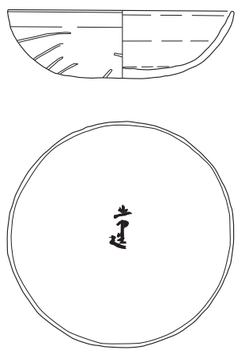
四條畷市文化財調査報告　第 61 集

四條畷市文化財調査年報

第　9　号

中野遺跡　4



令和４（２０２２）年３月

四條畷市教育委員会

四條畷市文化財調査年報　第９号　二〇二二・三　四條畷市教育委員会

巻 頭 写 真 図 版 1

1．中野遺跡遠景（北西から・平成23年10月撮影）

2．井戸１全景（北から・NN2013－2）

巻 頭 写 真 図 版 2

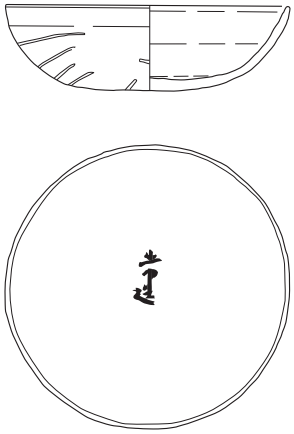
1．井戸１出土墨書土器底部・曲物蓋天板（NN2013－2）

2．出土玉類集合（NN1989－1）

四 條 畷 市 文 化 財 調 査 年 報

第　9　号

中野遺跡　4



令和４（２０２２）年３月

四條畷市教育委員会

例　　言

1．　本書は、四條畷市文化財調査年報の第９号であり、四條畷市文化財調査報告の第61集である。本書には、平成26（2014）年２～３月に宅地造成に伴い（ＮＮ2013－2）、中野遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を掲載する。関連資料として周辺での立会調査（ＮＮ1989－1、1993年度、ＮＮ2000－2）の概要を報告する。

2．　中野遺跡（ＮＮ2013－2）の発掘調査については、丹治尋好氏からの依頼を受け、四條畷市教育委員会が調査を実施した。調査期間等は本文中に記載している。

3．　中野遺跡（ＮＮ2013－2）の発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課主任　村上　始・事務職員　實盛良彦を担当者として実施した。（肩書はいずれも当時）

4．　発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

　地元自治会、大阪府教育庁文化財保護課、櫻井敬夫氏（故人）、瀬川芳則氏（元関西外国語大学教授）、渡辺晃宏氏（奈良大学教授）、諫早直人氏（京都府立大学准教授）、南健太郎氏（岡山大学助教）、光谷拓実氏（元奈良文化財研究所）、馬場　基氏（奈良文化財研究所）、村瀬　陸氏（奈良市教育委員会）、野島　稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館館長）、佐野喜美氏（前四條畷市立歴史民俗資料館館長）。（順不同）

5．　出土遺物の整理・図面作成などは、調査当時の一次整理に加え、四條畷市教育委員会生涯学習推進課上席主幹兼主任　村上　始、主任　實盛良彦、任期付職員　古谷真人（現苅田町教育委員会）が、会計年度任用職員　田伏美智代の協力を得て行った。

6．　本書は、村上・實盛・古谷が分担して執筆・編集を行った。文責者は各文末に記載している。

7．　発掘調査の出土遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．　本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）を用いた。

2．　土色の色調は、1998年度版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

3．　報告図面の表示方位は、ＮＮ2013－2調査は磁北、それ以外は世界測地系の国土座標（第Ⅵ座標系）に基づく座標北である。

本　文　目　次

巻頭写真図版
例　言・凡　例
目　　次
第１章　遺跡の位置と歴史的環境・・・

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図・・８
第２図　調査地区位置図・・12
第３図　調査地区平面図（ＮＮ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15～16
第４図　調査地区断面図（ＮＮ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17～18
第５図　井戸１平面図・断面図（ＮＮ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第６図　井戸４平面図・断面図（ＮＮ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第７図　出土遺物（包含層・土坑・井戸・ＮＮ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第８図　出土遺物（井戸１木製品①・ＮＮ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第９図　出土遺物（井戸１木製品②・ＮＮ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第10図　出土遺物（溝３・ＮＮ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第11図　出土遺物（溝３・ＮＮ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第12図　出土遺物（溝３・ＮＮ2013－２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第13図　調査地区平面図・断面図（ＮＮ1989－１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37～38
第14図　出土遺物（ＮＮ1989－１　立坑１・立坑２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第15図　出土遺物（ＮＮ1989－１　立坑４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第16図　出土遺物（ＮＮ1989－１　本体工区）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第17図　調査地区平面模式図・断面図・出土遺物（ＮＮ1993立会・ＮＮ2000－２）・・・・・・・46
第18図　中野遺跡（ＮＮ1991－１）の官衙関連遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

写　真　図　版　目　次

巻頭写真図版１　１．中野遺跡遠景（北西から・平成23年10月撮影）
　　２．井戸１全景（北から・ＮＮ2013－２）
巻頭写真図版２　１．井戸１出土墨書土器底部・曲物蓋天板（ＮＮ2013－２）
　　２．出土玉類集合（ＮＮ1989－１）

写真図版１　１．１地区近景（北西から・ＮＮ2013－２）
　　２．１地区南端壁面（北西から・ＮＮ2013－２）
写真図版２　１．１・２・４地区全景（北東から・ＮＮ2013－２）
　　２．２地区井戸４完掘状況（東から・ＮＮ2013－２）
写真図版３　１．３地区近景（西から・ＮＮ2013－２）
　　２．３地区井戸１上層半截状況（北から・ＮＮ2013－２）
写真図版４　１．３地区井戸１井戸枠検出状況（北から・ＮＮ2013－２）
　　２．３地区井戸１下層半截状況（北から・ＮＮ2013－２）
写真図版５　１．３地区井戸１方形板枠内半截状況（北から・ＮＮ2013－２）
　　２．３地区井戸１方形板枠除去状況（北から・ＮＮ2013－２）
写真図版６　１．３地区井戸１井筒内曲物蓋出土状況（北から・ＮＮ2013－２）
　　２．３地区井戸１井桁検出状況（北から・ＮＮ2013－２）
写真図版７　１．３地区井戸１完掘状況（北から・ＮＮ2013－２）
　　２．５・６地区近景（東から・ＮＮ2013－２）
写真図版８　１．５地区溝３近景（西から・ＮＮ2013－２）
　　２．５地区溝３遺物出土状況（南から・ＮＮ2013－２）
写真図版９　１．立坑４調査状況（西から・ＮＮ1989－１）
　　２．立坑４遺構検出状況（北西から・ＮＮ1989－１）
写真図版10　１．立坑１遺構完掘状況（西から・ＮＮ1989－１）
　　２．調査地全景（南西から・ＮＮ2000－２）
写真図版11　１．ＮＮ2013－２　出土遺物（包含層・土坑・井戸４）
　　２．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１土器）
写真図版12　１．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１瓦）
　　２．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１井筒）
写真図版13　１．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１井桁）
　　２．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１隅柱）
写真図版14　１．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１曲物蓋）

写真図版15　　１．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１横板）
　　２．ＮＮ2013－２　出土遺物（溝３土師器・瓦器）
写真図版16　　１．ＮＮ2013－２　出土遺物（溝３須恵器・陶磁器・玉）
　　２．ＮＮ2013－２　出土遺物（溝３須恵器・瓦質土器）
写真図版17　　１．ＮＮ2013－２　出土遺物（溝３瓦・砥石）
　　２．ＮＮ1989－１　出土遺物（立坑１）
写真図版18　　１．ＮＮ1989－１　出土遺物（立坑２）
　　２．ＮＮ1989－１　出土遺物（立坑２）
写真図版19　　１．ＮＮ1989－１　出土遺物（立坑４土器・瓦・埴輪）
　　２．ＮＮ1989－１　出土遺物（立坑４石器・金属器）
写真図版20　　１．ＮＮ1989－１　出土遺物（本体工区）
　　２．ＮＮ2000－２・93立会　出土遺物

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讃良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。中野遺跡は、飯盛山系の西側の山裾部に位置する遺跡である。

第２節　周辺の歴史的環境

中野遺跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物がみつかっている(第１図)。

旧石器時代　讃良川床遺跡では旧石器時代の握斧・ナイフ形石器・細石刃・削器・彫器などが出土している(櫻井1972)。また、忍岡古墳付近では、縦長剥片を用いたナイフ形石器が採集されている(片山1967a)。岡山南遺跡では、後期旧石器時代後半の木葉形尖頭器が出土している(野島・藤原・花田1976)。

縄文時代　縄文時代草創期の有茎尖頭器が南山下遺跡(野島1978b)、四條畷小学校内遺跡（野島1994c）、木間池北方遺跡(村上1997a)などでみつかっている。讃良郡条里遺跡の第二京阪道路調査地では縄文草創期末からの各時期の遺物が出土しており、石器製作跡も検出されている（井上ほか編2003、佐伯ほか編2007、井上編2008等）。南山下遺跡では中期の集落跡が検出されている(野島1978b、1988)。

砂遺跡では中期から晩期の集落跡がみつかっている(宮野1992、四條畷市教育委員会編2008)。集落内にはイノシシ等動物の足跡が残されていた。晩期では土偶等も出土している。

後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡がある。寝屋川市の讃良川遺跡に東接しており集落の中心が移動したものとみられ、北陸からの大型彫刻石棒・ヒスイ製祭祀具をはじめ、土偶などの祭祀用品、土器類や多量の石器類が出土した。また晩期の土壙墓が複数確認されている(片山1967b、桜井1972、宮野1992、野島編2000)。

弥生時代　弥生前期初頭の土器が縄文晩期の突帯文土器とともに讃良郡条里遺跡の2005年の調査でみつかっている(中尾ほか編2009)。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稲作の初現を示す遺物として重要である。讃良郡条里遺跡ではこれら以外にも前期から後期までの水田・微高地上の集落が検出されている（後川・實盛・井上編2015）。

雁屋遺跡は弥生前期から後期にわたって続く拠点的集落である。前期では板付Ⅱ式併行期に属する大形壺の出土や(野島1984a)、集落の検出がある（村上2001f）。中期では初頭から後葉までの方形周溝墓群が各調査で検出され、保存状態の良いコウヤマキ・ヒノキ・カヤ製の木棺のほか、朱塗り土器・蓋付木製四脚容器やタンカ状木製品、鳥形木製品などが出土している（辻本1987、野島1987a、野島1994a、阿部1999）。焼失竪穴建物や掘立柱建物、貯木施設も検出され、分銅形土製品や卜骨、銅鐸の舌や播磨地域の土器などが出土している（野島1994a、村上・實盛2011）。また2011年の調査ではサヌカイト埋納土坑を検出している。後期でも、竪穴建物群や方形周溝墓などが検出され（野島1987a、阿部1999）、丹後・近江・出雲・山陰地域系の土器類などを含む多くの遺物が出土している(三好ほか2007)。雁屋遺跡の銅鐸舌と関連するものとして、明治44年に四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸２口が出土したと伝えられ (梅原1985)、現在関西大学が所蔵している。

鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が５基みつかっている(野島1994b)。１号方形周溝墓には墳丘のほぼ中心に埋葬施設が１基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。２号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。

第１図　周辺遺跡分布図

１．中野遺跡	２．讃良川床遺跡	３．讃良寺跡	４．更良岡山古墳群	５．更良岡山遺跡
６．忍岡古墳	７．北口遺跡	８．砂遺跡	９．讃良郡条里遺跡	10．奈良田遺跡
11．坪井遺跡	12．岡山南遺跡	13．忍ケ丘駅前遺跡	14．南山下遺跡	15．奈良井遺跡
16．鎌田遺跡	17．墓ノ堂古墳	18．清滝古墳群	19．正法寺跡	20．国中神社内遺跡
21．大上遺跡	22．四條畷小学校内遺跡	23．木間池北方遺跡	24．城遺跡	25．南野米崎遺跡
26．雁屋遺跡	27．伝和田賢秀墓	28．南野遺跡	29．近世墓地	30．楠公遺跡
31．伝楠木正行墓				

このほか四條畷小学校内遺跡で前期の石敷き遺構が（野島1994c）、蔀屋北遺跡で中期の集落・方形周溝墓が（岩瀬編2012）、中野遺跡で中期の方形周溝墓が検出されている（村上・實盛2018）。

古墳時代　讃良川流域で古墳時代前期中頃に全長約87mの前方後円墳である忍岡古墳が築造されている(梅原1937)。主体部は竪穴式石室（石槨）で、碧玉製の石釧・鍬形石・紡錘車、鉄剣、鉄鎌、小札片など副葬品の一部が出土している。

この古墳に伴うとみられる前期の集落は、讃良郡条里遺跡で微高地上の集落が検出されている（井上編2008、近藤ほか編2006、佐伯ほか編2007、後川・實盛・井上編2015）。また岡山南遺跡でも集落を検出している（村上・實盛2016）。

中～後期の古墳としては墳長約70mの前方後円墳である後期初頭の墓ノ堂古墳があり、立会調査で周堤に立てられていた馬・馬飼形人物・武人・大刀・家・蓋などの多彩な埴輪片が出土している(野島1997c、村上・實盛・古谷2021)。忍ヶ丘駅前１号墳では琴を弾く男性埴輪が出土している(野島1993a、1997a)。清滝古墳群(野島1980a)や大上古墳群(村上・實盛編2017)、更良岡山古墳群(野島1981)などは中期から後期まで続く馬飼い集団の墓域とみられる。城遺跡内の大上３号墳は周溝を含めた全長が約45mある帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と墳丘の一部を検出し、原位置を保つ葺石や円筒埴輪が出土した(村上2006)。清滝古墳群２号墳は、直径20mの円墳で、周溝に馬が埋葬されていた(野島1980a)。大上５号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盗掘されていたが、金銅装中空耳環が１点出土した（野島1999、四條畷市教育委員会編2002）。

ＪＲ忍ケ丘駅付近では集落から中期の形象埴輪が多く出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪(櫻井・佐野・野島2006、2010等)、南山下遺跡で馬形埴輪(野島1987c、d)、岡山南遺跡で家形埴輪が出土しており(野島1982)、一緒に左足用の木製下駄も出土している(野島1979a、1982、瀬川1992)。

古墳時代における四條畷の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。古墳時代中期以降この地域では全域で渡来系の人々が多く居住していたとみられ、広範に馬飼も行われており、奈良田遺跡（野島1980c、野島・村上2000）、中野遺跡・四條畷小学校内遺跡（村上2000等）、城遺跡・大上遺跡（村上2006）、南野米崎遺跡（野島1985、1987e、1991、四條畷市教育委員会編2004）などの集落遺跡で馬骨・馬歯をはじめ陶質土器、初期須恵器や韓式系土器等が数多く出土している。讃良郡条里遺跡で５世紀初頭の馬骨の出土がみられ（中尾ほか編2009）、蔀屋北遺跡では馬具の鐙・ハミ・鞍や、井戸枠に再利用された準構造船、埋葬馬が完全な姿で出土しており、河内湖岸の集落とみられる(岩瀬ほか編2010、岩瀬編2012)。鎌田遺跡では溝からスリザサラや木鏃、祭具を載せる台等の祭祀遺物が出土し(村上2001c、d、e)、奈良井遺跡では方形周溝状の祭祀施設遺構を検出し、犠牲馬の首や人形・馬形土製品等が出土している(野島1980b、野島・村上2000、野島・村上・實盛2012)。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讃良郡条里遺跡では水田跡がみつかっている(野島1993b、中尾ほか編2009等)。讃良郡条里遺跡の2011年度の調査では水路の堤防構築に敷葉を使った工法が用いられていた（後川・實盛・井上編2015）。北口遺跡では緑色凝灰岩質の石核が出土し、中期に玉類の製作が行われたとみられる（村上・實盛2014）。

古代　正法寺跡は、７世紀に創建された寺院跡で、これまでの調査で中門、塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいずれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である(大阪府教育委員会編1970)。一方、創建当時の建物の多くは掘立柱建物であった (村上2001a)。ただし、中門は礎石建物で(野島・藤原・花田1977)、塔は石積みの遺構を伴っていた(大阪府教育委員会編1970)。また回廊の南西部分にあたると推定される位置の瓦だまりから創建時の鴟尾片が出土している(野島・村上2002)。

讃良寺跡は1969年に部分的に調査され、暗渠の可能性がある瓦敷きなどを検出し、７世紀の創建であることが分かった(桜井1972、櫻井・佐野・野島2006、2010)。1997年の調査では正法寺跡のものと同笵の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており（野島編2000)、文様に型起因の摩耗がみられることから、讃良寺のものが後に作られたと考えられている(野島1997b)。

飛鳥～奈良時代には寺跡の近辺を中心に集落跡がみつかっている。正法寺近辺では河川跡の数箇所で土馬を使った祭祀がおこなわれており、木間池北方遺跡で円面硯や土器と共に土馬が７体出土した

(村上2006)。木間池北方遺跡で「□万呂」(村上2006)、南野遺跡では「大」の字を墨書した土器が出土している(野島1995)。讃良郡条里遺跡では小型海獣葡萄鏡が出土しており、有力者が祭祀に用いたとみられる（後川・實盛・井上編2015）。また、讃良郡条里遺跡では奈良時代に遡る条里制地割が検出されており、初期の条里制地割施行例として注目される(中尾・山根編2009)。

平安時代には中野遺跡や、岡山南遺跡、讃良郡条里遺跡のほか、四條畷小学校内遺跡（村上2000）、木間池北方遺跡（村上2006）、蔀屋北遺跡(岩瀬ほか編2010)などで集落が検出されている。中野遺跡では「日置」と墨書された土師器坏や（村上2006）、「應保二年如月廿日」と書かれた墨書曲物井戸枠が出土している(村上2003、村上・實盛2019)。岡山南遺跡では掘立柱建物群が検出されており（野島・藤原・花田1976、野島1987b）、井戸からは「高田宅」「福万宅」などの墨書土器が出土している(野島1987a)。讃良郡条里遺跡では皇朝十二銭を用いた溝内祭祀跡を検出している（後川・實盛・井上編2015）。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滝街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の国中神社が鎮座している。四條畷市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社としてあげられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの国中神社だけである。

中世以降　鎌倉時代から室町時代にかけては、奈良井遺跡（村上2003a）、南山下遺跡（野島・村上2001、村上2001b）、岡山南遺跡（野島・藤原・花田1976、野島1982、野島・前田1984、野島1987b、村上2004、村上・實盛2013a）、中野遺跡（野島1977、1986b、西尾1987）、忍ケ丘駅前遺跡（野島1983、村上1997b）、四條畷小学校内遺跡（村上2000）、大上遺跡（村上2006）木間池北方遺跡（村上1997a）、南野遺跡(野島1995)、蔀屋北遺跡(岩瀬ほか編2010)、讃良郡条里遺跡（後川・實盛・井上編2015）、南野米崎遺跡、楠公遺跡、蔀屋遺跡等で集落跡等がみつかっている。坪井遺跡では鎌倉時代の鍛冶工房の跡とそれに伴う土壙墓がみつかっており(野島1996a、b)、工房跡では鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が検出されている。

南北朝時代に四條畷付近では、四條畷の合戦が行われたとされている。南朝方の実質的大将で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

戦国時代には、三好長慶が飯盛城を拠点に畿内・四国の一部を支配し室町幕府の実権を握った。遺跡としての飯盛城跡は大東市教育委員会によって調査が行われ（黒田1989）、平成23年度には城跡の詳細な縄張図を測量・作成した（村上・實盛編2013、黒田2013、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2013）。その後四條畷、大東両市により城跡の総合調査に着手し、石垣、瓦、礎石建物という織豊系城郭の要素を先駆的に導入した画期となる戦国城郭であることが判明した（李編2020）。

室町時代後期の16世紀中頃に讃良郡条里遺跡内の大将軍社が創建され、明治44年に式内社の忍陵神社に合祀されるまで地域の尊崇を集めた。発掘調査では御正躰あるいは奉納されたとみられる柴垣柳樹双鳥鏡が出土したほか、近世から近代に属する大量の灯明皿が出土し、文献に記録されていた「百灯明」の祭りの存在が裏付けられている（後川・實盛・井上編2015）。

(實盛良彦)

第２章　調査の経過

第１節　既往の調査

中野遺跡は、四條畷市中野本町・中野新町・中野一～三丁目に広がる遺跡で、古墳時代・中世の集落跡である。この遺跡は1977年に大阪瓦斯天然ガス管埋設工事に伴い発見され、中世の石組井戸などや、古墳時代中期の大溝がみつかった(野島1977、1986b)。この大溝からは朱塗りの壺や滑石製玉類、馬の下顎骨等が出土している(野島1986b、四條畷市教育委員会編2004)。またその後の二次調査では、隅丸方形の周溝状遺構を検出し、多量の漆が入った須恵器把手付碗や製塩土器等が出土している(野島1977、1978c、1986b)。

同年からは国道163号の拡幅工事に伴う調査が始まり、数次にわたって調査が行われた(野島1978a、西尾1987、1988、村上2000、2006)。1977～1978年の調査では、平安時代～室町時代の集落跡が確認され、室町時代の石組井戸から花崗岩の石臼が出土した(野島1978a)。この調査では硬玉製勾玉など古墳時代の遺物も出土している。1986年の調査でも中世の集落跡を確認したほか、古墳時代中期～後期の大溝から人物埴輪片や滑石製玉類、舟形木製品などが出土した(西尾1987)。1987～1988年の調査では古墳時代中期後半の井戸から板に乗せられた状態で馬頭骨が出土した(西尾1988)。井戸廃絶時に犠牲とされたものと考えられている(四條畷市教育委員会編2004)。1994年の調査では、古墳時代後期前半の落込から滑石製子持勾玉などが出土した(村上2000)。1996年の調査では奈良時代末～平安時代ごろの方形横板枠井戸を検出し、井戸内から「日置」と墨書された土師器坏が出土した(村上2006)。

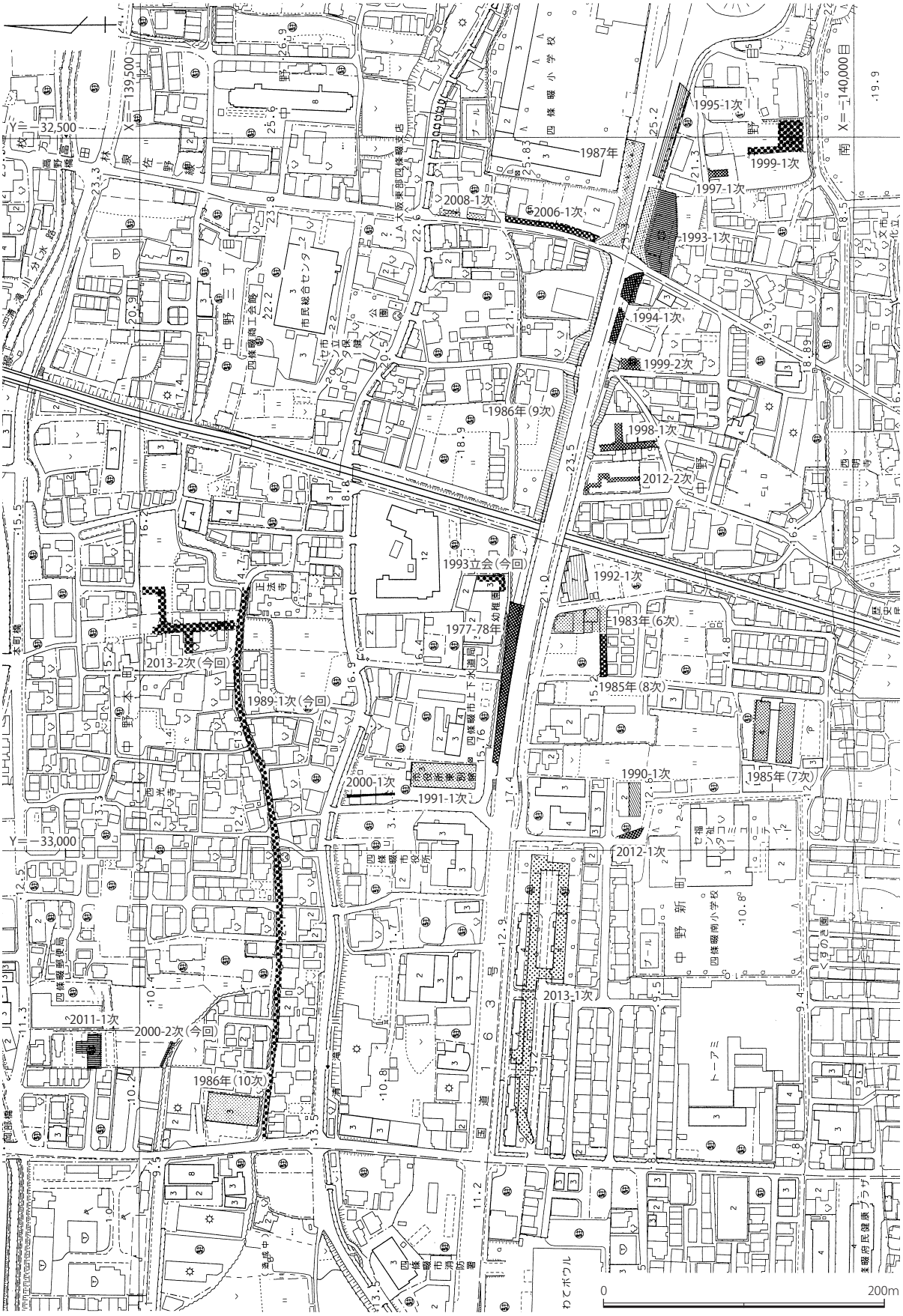
この間他の開発に伴う調査も多く行われており、1977年の旧国鉄片町線(現JR学研都市線)複線化工事に伴う調査では古墳時代後期の掘立柱群を検出している(野島1977)。1983・1985年の民間開発に伴う調査でも古墳時代の遺物が出土している(野島・前田1984、野島1986a)。1985年のマンション建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の井戸を検出し、井戸内からは石製玉類や多量の製塩土器などが出土した(野島1986b)。1986年の倉庫・事務所建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の掘立柱建物や竪穴建物等を検出し、井戸から馬形木製品が出土した（松岡1987）。1989年度の公共下水道工事に伴う調査では、弥生時代～近代の資料が出土した。特筆すべきものとしては古墳時代の大量の玉類、奈良時代の青銅製銙帯(丸鞆)、皇朝十二銭の饒益神寶、江戸時代の銅鏡などがあった(本書・野島1990)。1990年度と2012年度１次の旧法務局関連の調査では古墳時代中期の集落を検出した（村上・實盛2018）。1991～1992年の市役所東別館新築工事に伴う調査では、平安時代末～鎌倉時代初頭ごろの方形縦板枠井戸を検出し、その底部の井戸枠に使われていた曲物には「應保二年　如月廿日」の墨書があった(村上2003b、村上・實盛2019)。また溝からは青銅製銙帯(巡方)や長年大寶が出土した。1992年にはマンション建設工事に伴い中世及び古墳時代の集落跡を検出した（村上・實盛2018）。

1993年のガソリンスタンド建設に伴う調査では横穴式石室を検出している(村上2006・四條畷市史編さん委員会編2016)。石室は床面のみの残存であったが、玄室から羨道へ延びる石組排水溝を確認した。

1997年度調査（村上・實盛・古谷2021）では古代の集落を、1998年度（村上・實盛・古谷2021）、1999年度１次（整理中）、同２次調査（村上・實盛・古谷2021）では古墳時代から古代にかけての集落跡を検出した。1999年度１次調査では竪穴建物２基を検出した。

2007年から2009年にかけて主要地方道枚方富田林泉佐野線の拡幅工事に伴って２次にわたって行った調査では古墳時代の区画溝を検出し（村上・實盛2013a）、隣接する古墳時代祭祀遺跡である奈良井遺跡とのつながりが明らかになってきた。2011年度の調査では、平安後期～鎌倉前期の集落を検出し、「延任」の人名が書かれた木簡が出土した（村上・實盛2014）。2012年度２次調査では古墳時代の集落跡を検出した（村上・實盛・古谷2021）。2013年度の調査では平安時代から中世にかけての集落跡・古墳時代の集落跡・弥生時代の方形周溝墓を検出した（村上・實盛2018）。特に弥生時代の遺構は中野遺跡では初の確認であった。同年度の２次調査では古代～中世の集落を確認した（本書）。二重構造の重厚なつくりの井戸では年輪年代測定により708年＋αの年代が明らかになった。

（實盛）



第２図　調査地区位置図（座標は世界測地系）

第２節　調査の経過

平成25年度第２次の発掘調査（ＮＮ2013－２）については、四條畷市中野本町359他において宅地造成工事が計画され、平成26（2014）年１月９日に丹治尋好氏から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第93条第１項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。同年１月29日付け教委文第1-5271号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。また、計画用地の一部は周知遺跡の範囲外で、同年１月27日付で試掘調査依頼書および承諾書の提出があった。

平成26年１月27日に、計画用地内のうち中野遺跡範囲内に１か所、範囲外に１か所のトレンチを設定し試掘確認調査を実施した結果、中世を中心とした遺構面を確認した。遺跡範囲外については平成26年１月28日付で丹治尋好から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第96条第１項の規定により「遺跡発見の届出について」が提出され、同年２月10日付教委文第11-20号で通知があり、遺跡の範囲を拡大するとともに、発掘調査が必要との指導があった。これらの結果をもって協議を行い、遺跡が工事によって破壊される道路予定地全域の発掘調査を実施することとなった。同年１月28日付で発掘調査承諾書の提出があり、同年２月４日付畷教社第1413号で、文化財保護法第99条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は約658㎡で、調査期間は平成26年２月６日から３月15日までであった。調査は試掘確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力で掘削を行った。

調査で出土した遺物については、平成26年３月20日付畷教社第1580号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年３月27日に第5729号で受理された。大阪府教育委員会には同年３月20日付畷教社第1581号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年４月28日付教委文第３－10号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計30箱であった。

（實盛）

第３章　中野遺跡（ＮＮ2013－２）調査の成果

第１節　基本層序

発掘調査地区の調査前現況は、水田地および宅地であった。宅地部分のうち南半は、宅地造成のために0.6～0.8mほど盛土されていた。その下層はおよそ0.2mの耕土であった。宅地の造成以前は耕作地であったと思われる。なお、当該宅地は江戸期から続き通称「中岡嶋家」と称され、明治期には甲可村助役を輩出した旧家の宅地跡であり、宅地の造成は江戸期にさかのぼるとみられる。

耕土の下層に0.3mほど中世の遺物包含層が堆積し、その下面が古代～中世の集落面である第１遺構面であった。その下層は灰黄色の細砂層やオリーブ黒色系の花崗岩粒を含む土層が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第４図）。（實盛）

第２節　検出遺構

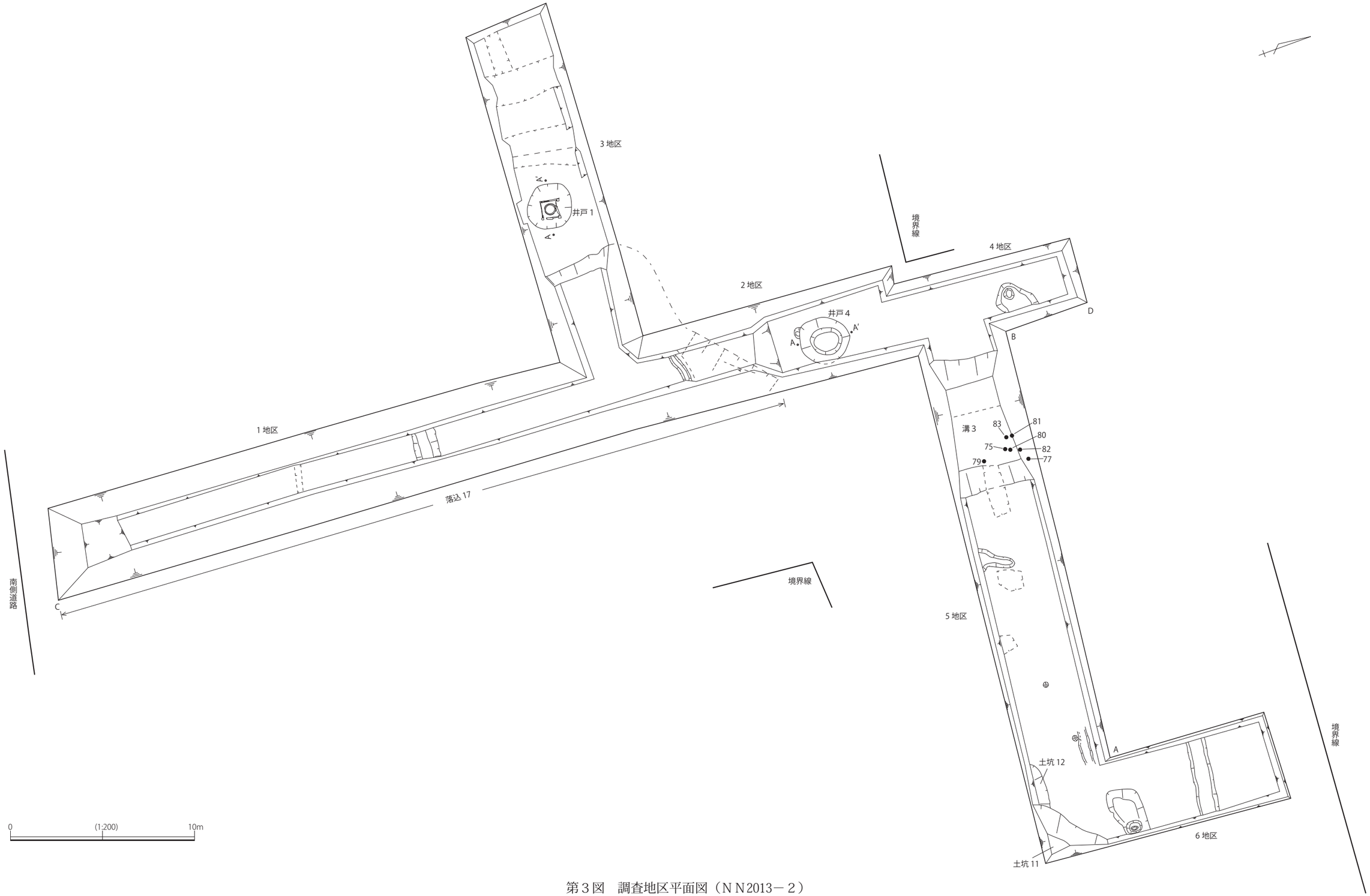
この調査で確認した遺構はおもに奈良～平安時代、中世に属するもので、Pit、土坑、溝、井戸があった（第３図）。調査地区を便宜上６つの地区に分け、遺構、遺物の検出を行った。遺構面の標高は、調査地区北東端でT.P.＋15.258m、北西端でT.P.＋15.059m、西端でT.P.＋14.412mであった。なお遺構の番号は、遺構の認識が変わった際の記録上の混乱を防止するため、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。以下、遺物を掲載した主な遺構を中心に詳述する。

土坑11　調査地区北東の６地区南端で検出した。土坑としたが、溝状遺構の北肩のみを検出したとみられ、その方向からは落込17と一連のものである可能性がある。検出できた規模は長さ4.5m、幅2.8m、深さは約0.63mである。上端の標高はT.P.＋15.278m、底部はT.P.＋14.653mであった（第３図）。土師器皿、高坏（第７図－３・４）、瓦器碗（第７図－５）、須恵器練鉢（第７図－６）などが出土した。鎌倉時代に埋没した遺構と考える。

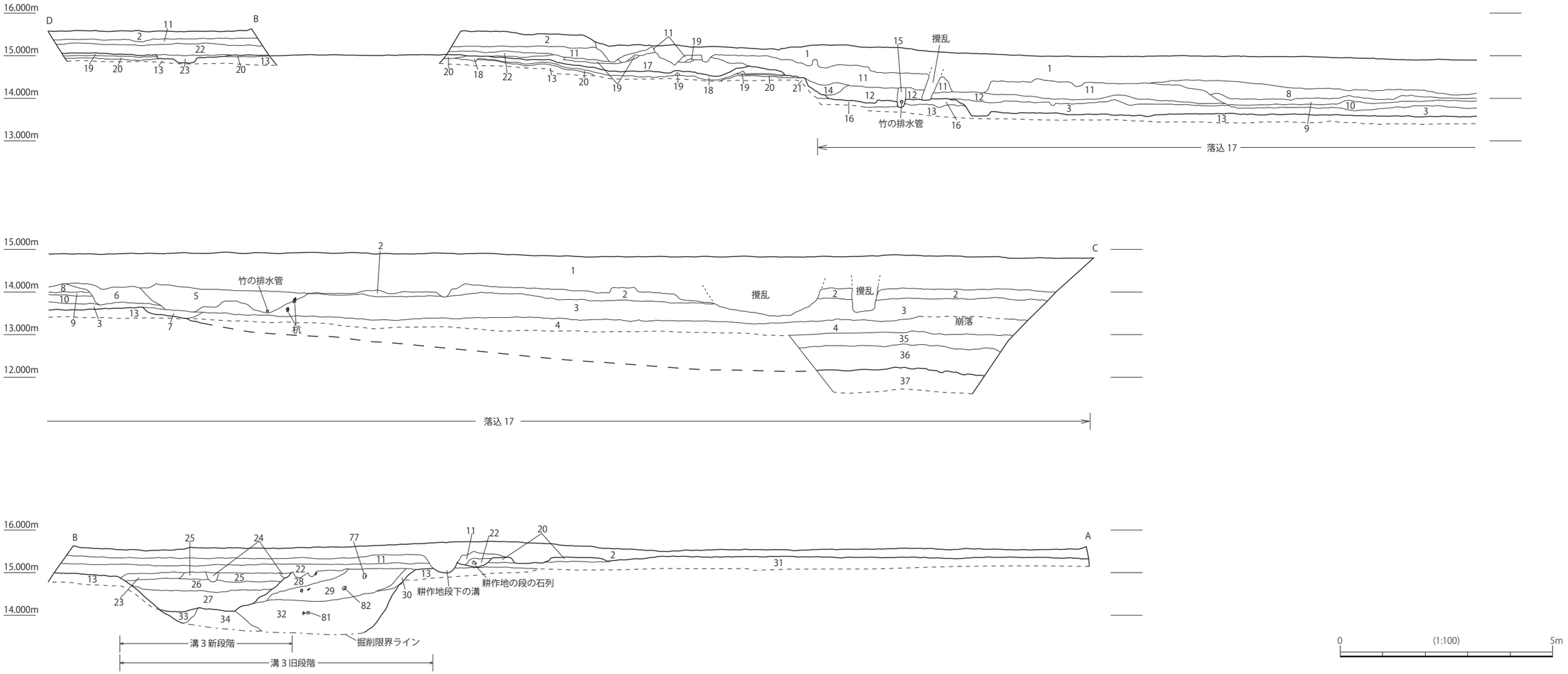
土坑12　調査地区北東の６地区南端で検出した。東西約2.6m、深さ約0.2mで、東側は土坑11に切られ、南側は調査地区外である。上端の標高はT.P.＋15.224m、底部はT.P.＋15.033mであった（第３図）。土師器皿（第７図－７）、壁土（第７図－８）などが出土した。鎌倉時代の遺構と考える。

落込17　調査地区中央～南側で１地区から２地区にかけて検出した。調査時は土地の起伏と認識しており、整理時に遺構番号を付した。北側の肩は遺構面掘下げを南側から順に行った影響で当初認識できず断面観察で確認した。断面観察から二段階で南へ向かって落ち込んでいるとみられる。南端が最も深くなるが、掘削深度が深く安全上の問題で全面調査を断念した。検出できた規模は東西約10m、南北約38.8mである。断面図37層は地山の可能性があり、そうであれば深さは約2.5mである。標高は北端部分の上端がT.P.＋14.597m、底部がT.P.＋13.772m、西端部分の上端がT.P.＋14.360m、底部がT.P.＋13.612mで、南端部分の底部はT.P.＋12.060mであった（第３図）。この落込は北側の肩のみを検出したが、その方向からは土坑11と一連のものである可能性がある。また、標高や検出状況からみると、1989-1次調査立坑No.4で検出した大溝とも一連のものである可能性があり、その場合幅40mほどとみられる。各調査状況から、この大溝はほぼ北東から南西へと流れているとみられ、古墳時代に機能したもので、中世段階に完全に埋没して耕作地として利用されるようになったとみられる。遺物包含層出土で取り上げた土師器皿（第７図－１）は本遺構に属するとみられる。

溝３　調査地区北側の５地区西寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、両端は調査地区外。検出規模は長さ4.2m、幅7.6m、深さ1.5m以上である。安全上の問題で遺構底まで調査することができなかった。堆積状況から新旧２段階に分けることができ、新段階には幅4.1m、深さ0.8mであった。検出標高は北端部分の東側上端がT.P.＋15.023m、西側上端がT.P.＋14.943m、底部がT.P.＋14.203mで、南端部分の東側上端はT.P.＋14.945m、西側上端はT.P.＋14.948m、底部はT.P.＋14.143mであった（第３図）。土師器（第10図－46～63）・須恵器（第10図－64、第11図－103～108）・輸入磁器（第10図－65～70）・瓦器（第10図－71～89）・国産陶器（第10図－90～94）・瓦質土器（第10図－95～99、

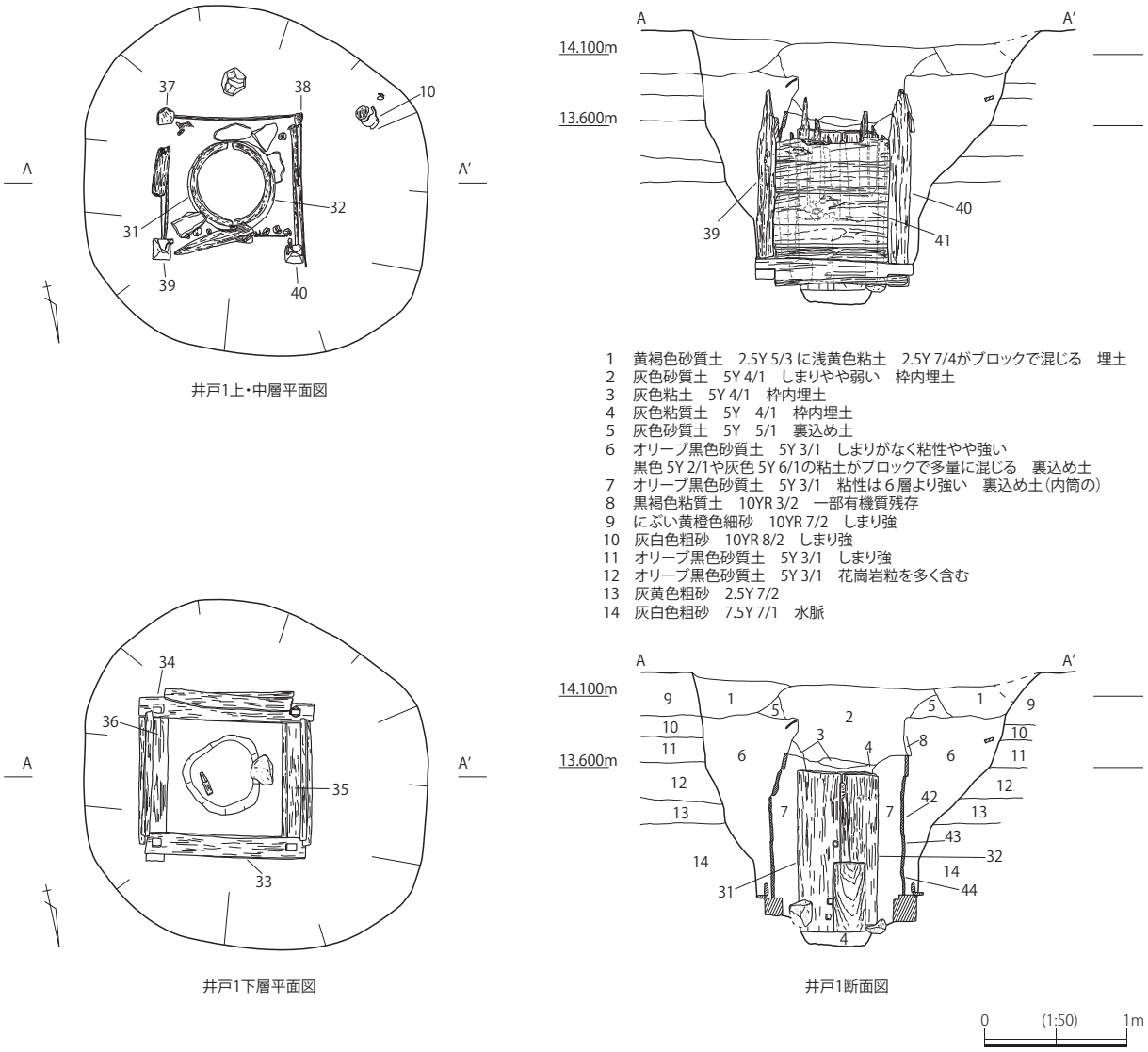


第３図　調査地区平面図（ＮＮ2013－２）



1　盛土
2　耕土
3　暗青灰色砂質土　5B 3/1　中世包含層　中世耕作地と思われる
4　暗青灰色砂質土　5B 4/1　中世包含層　中世包含層と思われる
5　３層に地山ブロック混入　近世以降の造成土と思われる
6　黄橙色砂質土　10YR 7/8 に地山ブロック混入　近世以降の造成土と思われる
7　灰色砂質土　N 5/ に 灰白色シルト　5Y 8/2 混入　溝２の埋土
8　灰黄褐色砂質土　10YR 4/2　中世包含層
9　黄橙色砂質土　10YR 7/8　しまりややあり　中世耕作地の第１面と思われる
10　黄灰色砂質土　2.5Y 6/1 に 淡黄色砂質土　2.5Y 8/3 がブロック状に混入
11　灰黄褐色砂質土　10YR 5/2　中世包含層
12　11 層に黄橙色砂質土　10YR 7/8 がブロック状に混入
13　オリーブ黒色砂質土　5Y 3/1　花崗岩粒を多く含む
14　灰色砂質土　N 6/
15　灰色砂質土　N5/
16　オリーブ黒色砂質土　5Y 3/1　しまり強
17　灰黄色細砂　2.5Y 6/2
18　橙色細砂　7.5YR 6/6
19　淡黄色粘土　2.5Y 8/3
20　暗青灰色粘土　5PB　3/1
21　灰白色シルト　2.5Y 7/1
22　暗灰黄色砂質土　2.5Y 4/2　中世包含層
23　灰色砂質土　7.5Y 6/1　土坑５の埋土
24　褐灰色砂質土　7.5YR 4/1
25　にぶい黄色砂質土　2.5Y 6/4
26　にぶい黄褐色砂質土　2.5Y 5/3
27　灰黄褐色砂質土　10YR 4/2
28　褐灰色粘質土　10YR 4/1
29　黒褐色砂質土　10YR 3/2
30　褐灰色砂質土　10YR 5/1 に 地山粘土ブロック混入
31　灰黄色細砂　2.5Y 6/2　しまりやや強
32　緑灰色粘質土　10G 5/1
33　にぶい黄色砂質土　2.5Y 6/3
34　灰色粘質土　N 5/ と 明青灰色シルト　5B 7/1 が層状に堆積
35　暗灰色砂質土　N 3/
36　暗青灰色中砂混粘質土　5BG 4/1
37　暗緑灰色粘土　5G 4/1　地山か

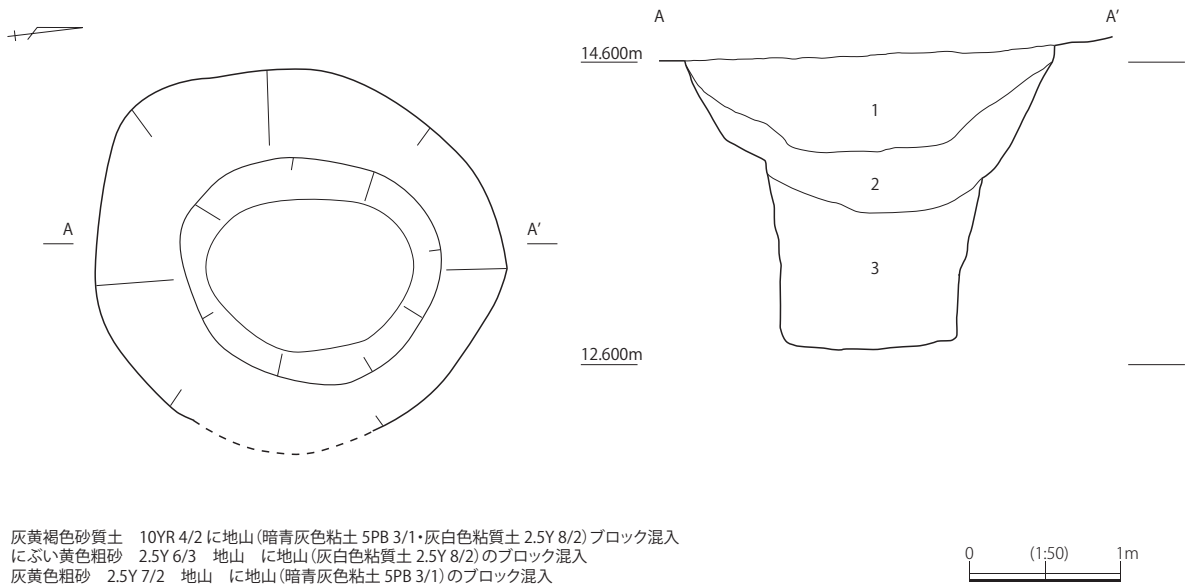
第４図　調査地区断面図（ＮＮ2013－２）



第５図　井戸１平面図・断面図（ＮＮ2013－２）

第11図－100～102）・瓦（第12図－109～115）・石製品（第12図－116～120）などが出土した。出土遺物を遺構の旧段階と新段階で分けて取り上げることができなかったが、遺物の時期に11世紀末～13世紀中ごろと、14世紀後半～16世紀前半の二つのまとまりがあり、それぞれ旧段階と新段階に対応する可能性が高いと考える。

井戸１　調査地区中央西寄りで検出した。掘方は東西南北とも約2.4mの大きさの不整円形で、深さ約1.9mである。井戸枠の形態は、底部に土居桁を設置して四隅に隅柱を立て、隅柱に施した加工部に横板を組み入れ構築した横板組隅柱型（鐘方2003）の方形枠を外枠とし、さらにその内部に、２分割した丸太を刳り抜き円形に組み合わせた円形丸太刳り抜き型Ｂ類（丸太分割刳り抜き）（鐘方2003）の円形枠を内枠として設置している。外枠の横板材は５段分を確認し、断面観察からさらに２段ほど板材が積まれていたとみられる。内枠の材の合わせ目は、南側は幅11㎝、厚さ１㎝の薄板で隙間をふさぎ、その基部に27×12㎝の礫を設置し固定していた。北側は幅７㎝、厚さ２㎝の板材を隙間にあて、その外側に47×18×４㎝の板材と、さらにその外側に49×23×５㎝の板材を縦向きに設置し固定していた。遺構上端の標高はT.P.＋14.276m、底部はT.P.＋12.337mであった（第３・５図）。土師器皿・羽釜・甕・碗（第７図－９～12）、黒色土器碗（第７図－13）、須恵器平瓶・坏・甕（第７図－14～16）、焼塩土器（第７図－17～20）、瓦（第７図－25～30）、桃核（写真図版11－２－198）、



第６図　井戸４平面図・断面図（ＮＮ2013－２）

曲物蓋（写真図版14－１－197）などが出土した。井筒内最下層出土の土師器碗（第７図－12）に「常□」墨書があった。井戸枠は内枠材と、外枠の土居桁材、隅柱材全て、横板材のうち４点を図化した（第８、９図）。外枠土居桁材のうち１点（第８図－35）について光谷拓実氏に依頼し年輪年代測定を行った結果、辺材型で708年＋αの測定値が出た。外枠の裏込め土から７世紀後葉の須恵器片が（第７図－15）、内枠の裏込め土から８世紀末～９世紀初頭の黒色土器片（第７図－13）が出土した。これらの出土遺物と年輪年代測定結果から、外枠は飛鳥時代末～奈良時代初頭ごろに構築され、何らかの理由で内枠が平安時代初頭に追加され、その後瓦が示す中世段階に廃絶したと考える。

井戸４　調査地区中央東寄りで検出した。直径約2.7mのいびつな円形で、深さ約２mである。井戸枠の残存はなく、一時に埋められたような堆積状況を呈するため、素掘り井戸か、もしくは井戸枠をすべて取上げ再利用した可能性がある。上端の標高はT.P.＋14.719m、底部はT.P.＋12.704mであった（第３・６図）。瓦器碗（第７図－21）、土師器皿（第７図－22）、製塩土器（第７図－23）、須恵器練鉢（第７図－24）などが出土した。鎌倉時代の遺構と考える。（實盛）

第３節　出土遺物

１．包含層出土遺物

１土師器皿　口径：10.0cm。器高：1.9cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内・断面は灰白色（2.5Y8/2）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：3/4。落込17が最終的に埋没する段階の遺物とみられる。Jタイプの13世紀代のものと思われる。（第７図－１、写真図版11－１－１）

２石錘　縦7.3cm。横4.6cm。厚さ1.1cm。一部欠損し、上部のみ紐を結わえる凹部の加工が認められる。下部は欠損により加工が確認できない。（第７図－２、写真図版11－１－２）

２．遺構出土遺物

土坑11

３土師皿　口径：7.6cm（復元）。器高：1.2cm（残存）。厚さ：0.3cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：やや密。１mm以下の雲母・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/8。外内面はナデ調整を施している。Jタイプの13世紀代のものと思われる。（第７図－３、写真図版11－１－３）

４土師器高坏　口径：20.4cm（復元）。器高：2.2cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外面は淡

橙色（5YR8/3)、内面は浅黄橙色（7.5YR8/4)、断面は灰白色（7.5YR8/2)。胎土：やや粗。１㎜以下の雲母・赤・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外内面はナデ調整を施している。奈良時代のもので混入品。（第７図－４、写真図版11－１－４）

５瓦器碗　口径：12.6㎝（復元)。器高：3.7㎝（残存)。厚さ：0.2～0.5㎝。色調：外・内面は暗青灰色（5PB4/1)、断面は灰白色（N8/)。胎土：密。１㎜以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/5。口縁外内面はナデ調整、体部外面はユビオサエ調整を施している。大和型Ⅲ－Ｂ段階で13世紀前半のものと思われる。（第７図－５、写真図版11－１－５）

６須恵器練鉢　　口径：28.0㎝（復元)。器高：5.4㎝（残存)。厚さ：0.7～0.8㎝。色調：外・内面は灰色（N5/)、断面は灰色（N6/)。胎土：やや粗。５㎜以下の黒・白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/10。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。（第７図－６、写真図版11－１－６）

土坑12

７土師皿　口径:9.6㎝(復元)。器高:1.2㎝(残存)。厚さ:0.6㎝。色調:外・内面は浅黄橙色(10YR8/3)、断面は灰白色（N8/)。胎土：密。１㎜以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁外内面はナデ調整、外面はナデ・ユビオサエ調整を施している。Jタイプの13世紀代のものと思われる。（第７図－７、写真図版11－１－７）

８壁土　横幅：3.2㎝（残存)。縦幅：5.1㎝（残存)。厚さ：2.5㎝。色調：内・外・断面ともにぶい黄橙色（10YR7/4)。３㎜以下の砂粒を含む。表面は平らで、裏面には木舞痕、スサ痕がある。（第７図－８、写真図版11－１－８）

井戸１

土師器

９皿　口径:11.0㎝（復元)。器高:1.5㎝。厚さ:0.3～0.4㎝。色調:外・内・断面は灰白色（2.5YR 8/2)。胎土：やや密。１㎜以下の白色砂粒を少量含む。焼成：やや不良。残存度：1/6。（第７図－９、写真図版11－２－９）

10甕　口径:21.8㎝（復元)。器高:13.6㎝。厚さ:0.3～0.8㎝。色調:外・内・断面は灰白色（7.5YR 8/2)。胎土：密。２㎜以下の雲母・白・黒・赤・灰色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。平城Ⅲ～Ⅴごろ（８世紀後半）と思われる。方形板枠裏込め土上面の再掘削層から出土。内枠井筒の設置時に遺存したとみられる。（第７図－10、写真図版11－２－10）

11羽釜　口径：26.6㎝（復元)。器高：4.3㎝（残存)。厚さ：0.8～1.3㎝。色調：外面はにぶい橙色（5YR6/4)、内面は橙色（7.5YR6/6)、外面は灰褐色（7.5YR 5/2)。胎土:粗。２㎜以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。９世紀初頭ごろのものと思われる。（第７図－11、写真図版11－２－11）

12碗　口径：11.3㎝。器高：3.4㎝。厚さ：0.2～0.4㎝。色調：外面は橙色（2.5YR6/6)、内面はにぶい橙色（5YR7/3）胎土：密。１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：9/10。底部に「常□」墨書がある。井筒内最下層から出土。８世紀末～９世紀初頭（京Ⅱ期中頃）か。（第７図－12、写真図版11－２－12）

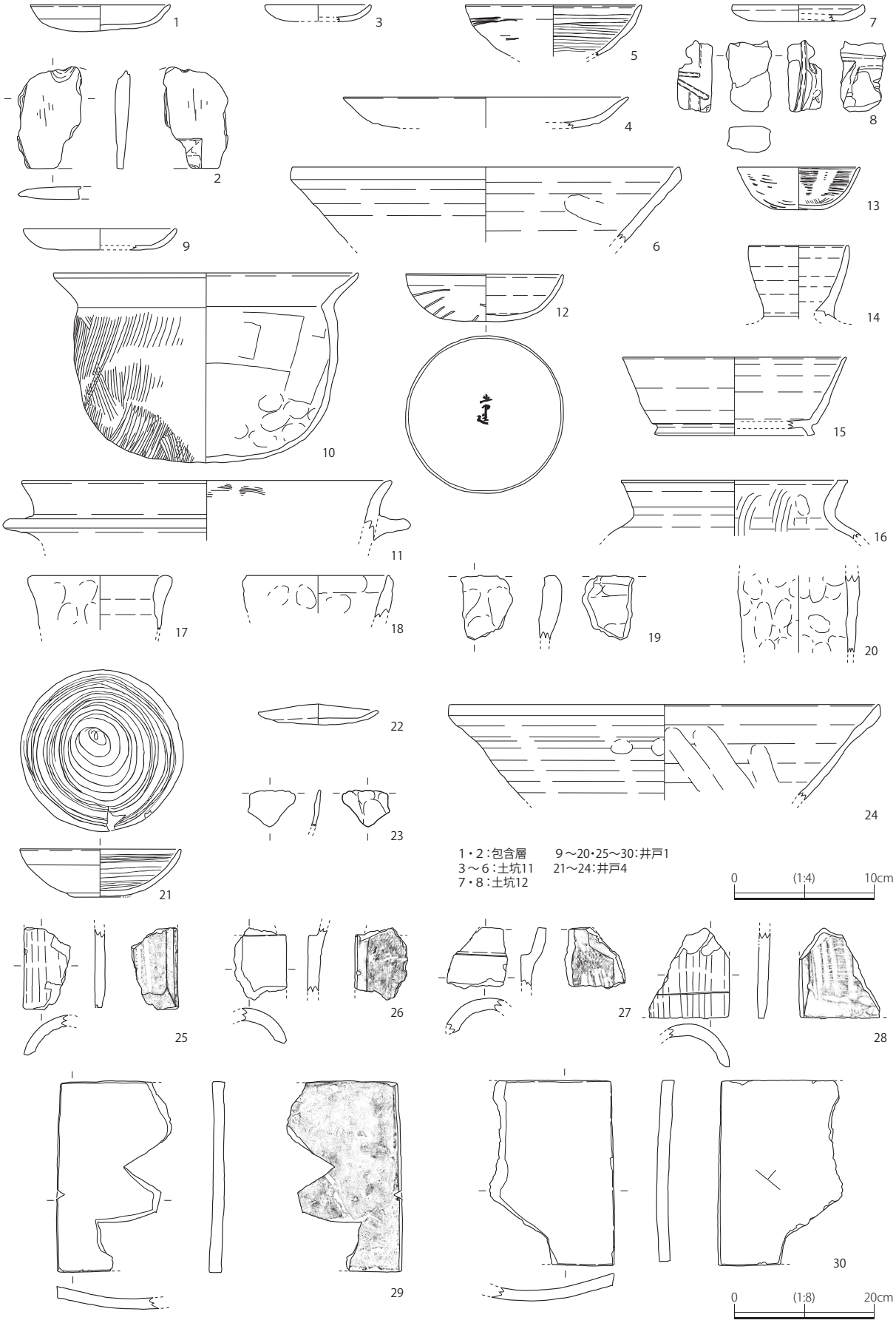
黒色土器

13Ａ類碗　口径：8.8㎝。器高：3.0㎝。厚さ：0.3㎝。色調：外・断面は明褐灰色（5YR7/2)、内面は黒色（N2/)。胎土：やや粗。１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：2/5。方形板枠内の井筒裏込め土から出土。８世紀末～９世紀初頭（京Ⅱ期中頃）か。内枠井筒の設置時期を示す可能性がある。（第7図－13、写真図版11－２－13）

須恵器

14平瓶　口径：7.2㎝（復元)。器高：5.3㎝。厚さ：0.3～1.6㎝。色調：外・内面は青灰色（5PB6/1)、断面は明緑灰色（5P7/1)。胎土：密。２㎜以下の黒・白色砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。（第７図－14、写真図版11－２－１）

15坏身　口径：16.0㎝（復元)。底径：11.4㎝（復元)。器高：5.6㎝。厚さ：0.2～0.5㎝。色調：外面は青灰色（5PB5/1)、内面は青灰色（5PB6/1)・断面は灰白色（7.5YR 8/1)。胎土：密。１㎜以下



第７図　出土遺物（包含層・土坑・井戸・ＮＮ2013－２）

の白色砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：1/5。TK48型式（Ⅲ型式第３段階）で、飛鳥編年飛鳥Ⅳ（７世紀後葉）とみる。方形板枠の裏込め土出土で､井戸全体の構築時期を示す可能性がある。（第７図－15、写真図版11－２－15）

16甕　口径:16.2cm（復元）。器高:4.0cm（残存）。厚さ:0.5～0.8cm。色調:外面は暗緑灰色（5G4/1)、内面は明青灰色（5PB7/1)、断面は灰白色（N8/)。胎土:密。１mmの雲母･白･黒色砂粒を含む。焼成:良好。残存度：小片。８世紀中ごろのものと思われる。（第７図－16、写真図版11－２－16）

焼塩土器

17焼塩土器　口径：10.4cm（復元)。器高：3.9cm（残存)。厚さ：0.2～1.1cm。色調：外面は灰白色（2.5YR8/1)、内面は青灰色（10YR8/2)・断面は灰白色（N7/)。胎土：粗。１mm以下の白・黒・灰色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第７図－17、写真図版11－２－17）

18焼塩土器　口径：10.8cm（復元)。器高：3.0cm（残存)。厚さ：0.5～0.9cm。色調：外面は灰白色（10YR8/1)、内面は灰白色（10YR8/2)・断面は灰白色（N7/)。胎土：粗。２mm以下の黒・赤色砂粒を少量含む。焼成：不良。残存度：小片。（第７図－18、写真図版11－２－18）

19焼塩土器　幅：3.7cm（残存)。器高：4.6cm。厚さ：0.8～1.5cm。色調：外面は灰白色（5YR8/2)、内面は灰白色（10YR8/2)、断面はにぶい橙色（10YR 7/4)。胎土：粗。２mm以下の白・灰・黒色砂粒を多量に含む。焼成：不良。残存度：小片。（第７図－19、写真図版11－２－19）

20焼塩土器　最大径：8.8cm（残存)。器高：5.5cm（残存)。厚さ：0.5～0.9cm。色調：外面は灰白色（5Y8/1)、内面は灰白色（2.5Y8/2)・断面は灰色（N6/)。胎土：粗。４mm以下の赤・白・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第７図－20、写真図版11－２－20）

瓦

25丸瓦　横幅：6.6cm（残存)。縦幅：11.8cm（残存)。色調：色調：外面は暗青黒色（5PB3/1)、内面は灰色（7.5YR6/1)、断面は灰色（N5/)。胎土：やや粗。４mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。裏面は布目が残る。（第７図－25、写真図版12－１－25）

26丸瓦　横幅：7.6cm（残存)。縦幅：10.4cm（残存)。色調：外・内面は青黒色（5PB1.7/1)、断面は灰白色（N8/)。胎土：粗。５mm以下の雲母・灰・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。裏面は布目が残る。玉縁。（第７図－26、写真図版12－１－26）

27丸瓦　横幅：8.7cm（残存)。縦幅：8.8cm（残存)。色調：外・内面は暗青黒色（5PB4/1)、断面は灰白色（N8/)。胎土：やや粗。２mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。裏面は布目が残る。玉縁。（第７図－27、写真図版12－１－27）

28丸瓦　横幅：11.5cm（残存)。縦幅：13.0cm（残存)。色調：外面は青黒色（5PB1.7/1)、内面は暗青黒色（5PB4/1)、断面は灰白色（N8/)。胎土：やや粗。１mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。表面にナデ・ヘラケズリがあり、裏面は布目が残る。（第７図－28、写真図版12－１－28）

29平瓦　横幅：16.5cm（残存)。縦幅：24.2cm。色調：外・内面は青黒色（5PB1.7/1)、断面は灰白色（N8/)。胎土：粗。１mm以下の雲母・白色砂粒を含む。焼成：良好。表面にナデがあり、裏面は布目が残る。（第７図－29、写真図版12－１－29）

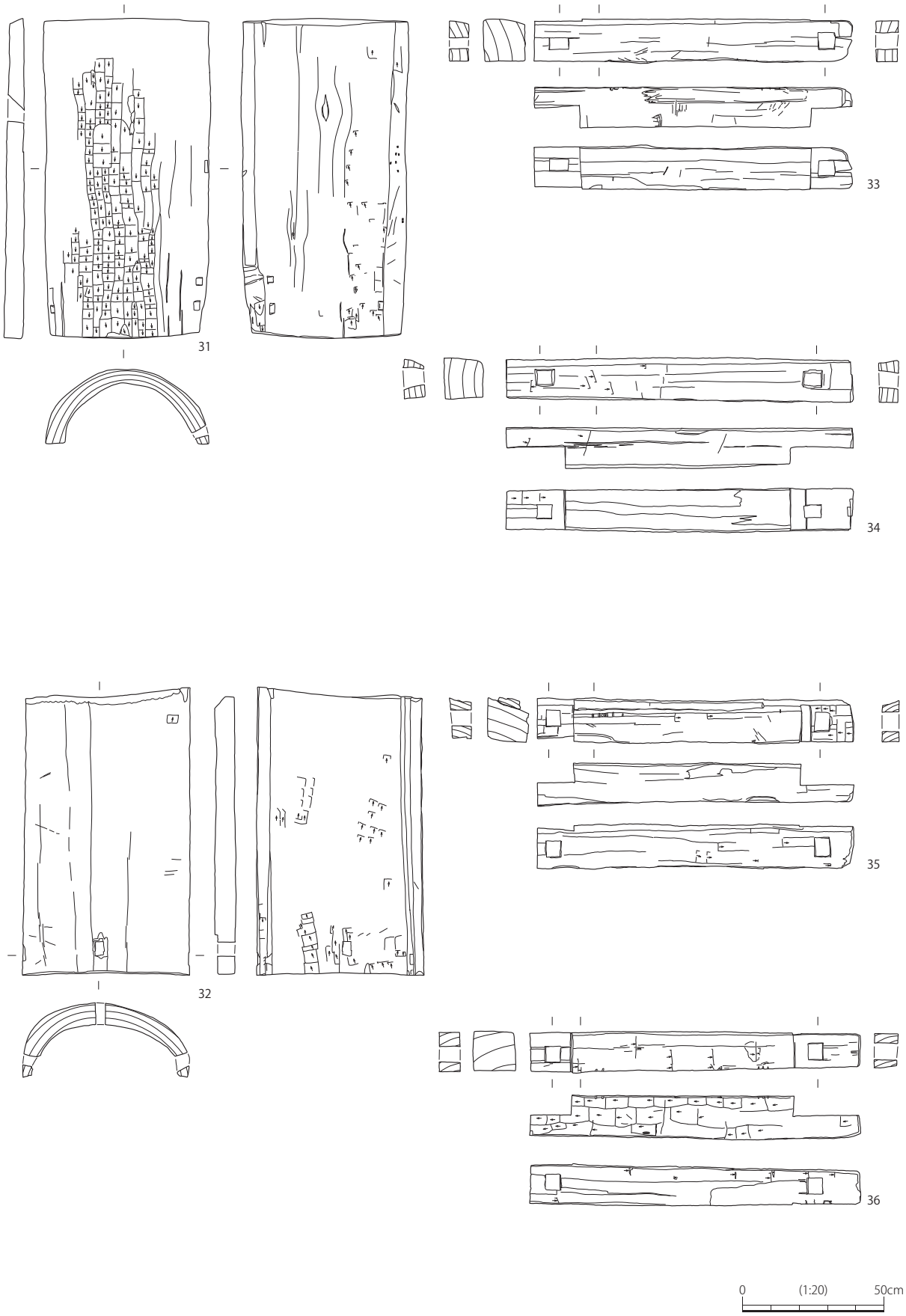
30平瓦　横幅：17.8cm（残存)。縦幅：26.6cm。色調：外・内面は青黒色（5PB1.7/1)、断面は灰白色（N8/)。胎土：粗。４mm以下の雲母・白・灰色砂粒を含む。焼成：良好。表裏面は板ナデが施される。これら丸・平瓦はいずれも中世のものと思われる。（第７図－30、写真図版12－１－30）

木製品

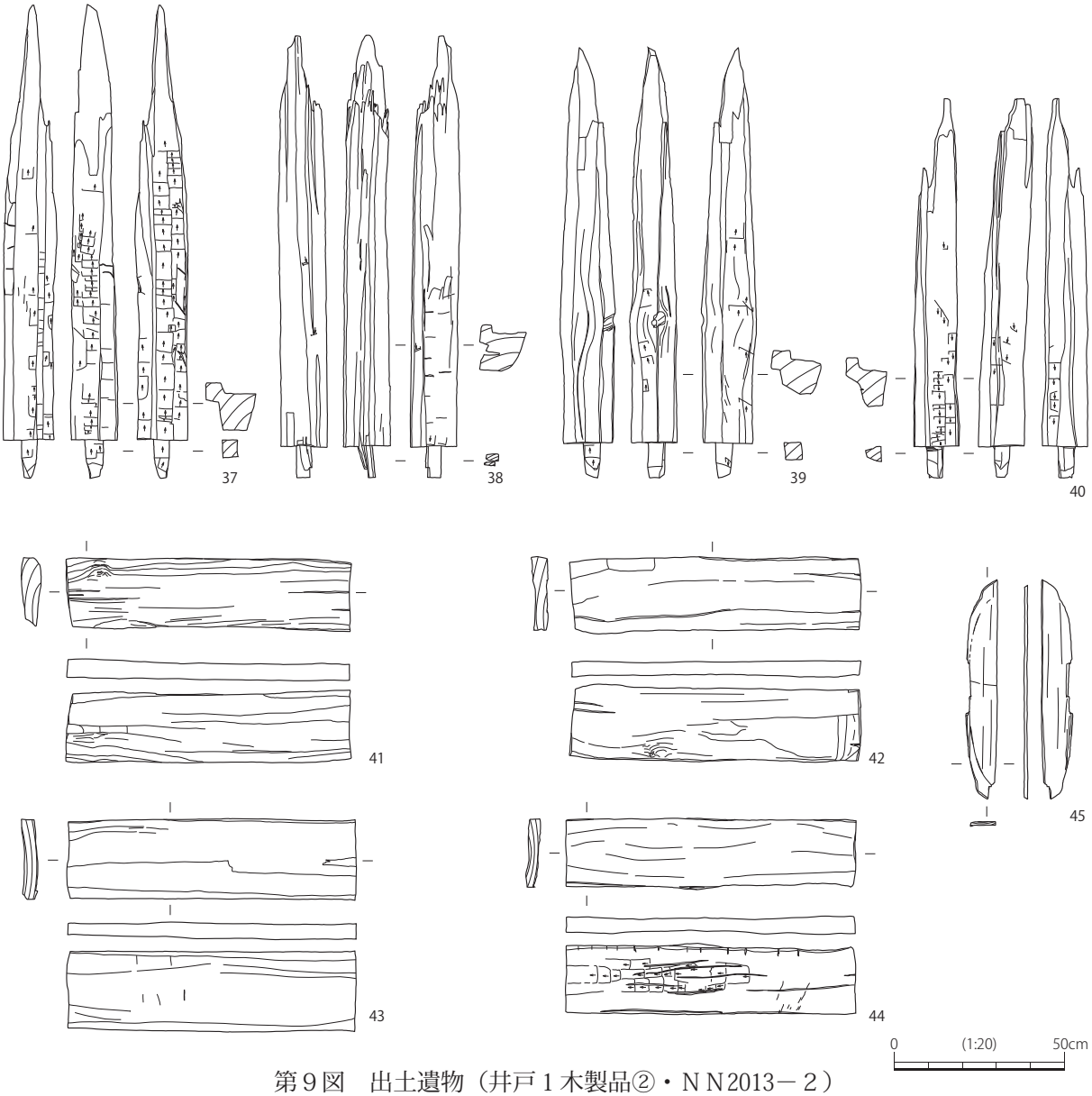
31井筒（東側）　長さ：113.2cm。幅59.2cm。厚さ4.0～7.4cm。表裏面ともに手斧による加工痕がみられる。裏面端部は逆方向の加工痕がみられ、井筒再利用に伴うものと思われる。井筒西側と同一のものと思われ、準構造船の船体部分の再利用と思われる。（第８図－31、写真図版12－２－31）

32井筒（西側）　長さ：102.2cm。幅59.2cm。厚さ3.0～7.8cm。表裏面ともに手斧による加工痕がみられる。裏面端部は逆方向の加工痕がみられ、井筒再利用に伴うものと思われる。井筒東側と同一のものと思われ、準構造船の船体部分の再利用と思われる。（第８図－32、写真図版12－２－32）

33井桁（北）　長さ：112.8cm。幅15.6cm。厚さ6.2～14.2cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられる。（第８図－33、写真図版13－１－33）



第８図　出土遺物（井戸１木製品①・ＮＮ2013－２）



第９図　出土遺物（井戸１木製品②・ＮＮ2013－２）

34井桁（南）　長さ：123.0cm。幅15.6cm。厚さ6.6～14.4cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられる。（第８図－34、写真図版13－１－34）

35井桁（西）　長さ：112.0cm。幅15.8cm。厚さ6.0～14.6cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられる。光谷拓実氏に年輪年代鑑定を依頼した結果、辺材型でAD708年＋αであった。（第８図－35、写真図版13－１－35）

36井桁（東）　長さ：117.2cm。幅14.2cm。厚さ7.2～15.4cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられる。（第８図－36、写真図版13－１－36）

37隅柱（南東）　長さ：139.2cm、11.4cm（部分）。幅15.6cm（最大）、5.2cm（ほぞ部分最大）。表裏面ともに手斧による加工痕がみられる。下部に井桁へ差し込むためのほぞが残存する。（第９図－37、写真図版13－２－37）

38隅柱（南西）　長さ：140.0cm、10.8cm（部分）。幅13.6cm（最大）、4.4cm（ほぞ部分最大）。表裏面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。一部、手斧以外の加工痕もみられる。下部に井桁へ差し込むためのほぞが残存する。別材によるほぞの補強がみられる。（第９図－38、写真図版13－２－38）

39隅柱（北東）　長さ：126.4cm、10.4cm（部分）。幅16.0cm（最大）、5.0cm（ほぞ部分最大）。表裏

面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。下部に井桁へ差し込むためのほぞが残存する。（第９図－39、写真図版13－２－39）

40隅柱（北西）　長さ：101.4cm、9.6cm（部分）。幅14.4cm（最大）、4.6cm（ほぞ部分最大）。表裏面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。下部に井桁へ差し込むためのほぞが残存する。（第９図－40、写真図版13－２－40）

41横板　長さ：84.0cm。幅21.4cm。厚さ3.4～5.8cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。方形枠北辺下から３基目（取上げ記号北②）。（第９図－41、写真図版15－１－41）

42横板　長さ：85.8cm。幅22.1cm。厚さ3.4～4.8cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。方形枠西辺下から３基目（取上げ記号西２段目）。（第９図－42、写真図版15－１－42）

43横板　長さ：85.2cm。幅23.8cm。厚さ3.2～4.8cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。方形枠西辺下から２基目（取上げ記号西３段目）。（第９図－43、写真図版15－１－43）

44横板　長さ：113.2cm。幅59.2cm。厚さ4.0～7.4cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。方形枠西辺下から１基目（取上げ記号西４段目）。（第９図－44、写真図版15－１－44）

45板材　長さ：64.4cm。幅9.1cm（最大）。厚さ0.7～1.1cm。表裏面ともに残る加工痕は不明瞭であるが、表面に弧を描くように線刻があり、中央にもある。転用材と思われる。井桁材下部で出土した。井桁材設置高を調整するために用いたとみられる。（第９図－45、写真図版15－１－45）

197曲物蓋　口径：22.0cm。天板径：22.8cm。高さ5.8cm。天板に植物の陰刻文様が彫られている。井筒内最下層から出土。（写真図版14－１－197）

井戸４

21瓦器碗　口径：11.5cm。器高：3.5cm（残存）。厚さ：0.45cm。色調：外・内面は青灰色（5PB 6/1）、断面は灰白色（N8/）。胎土：やや密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：1/1。口縁外内面はナデ調整、体部外面はユビオサエ調整を施している。第１層からの出土。大和型Ⅲ－Ｄ段階で13世紀後半のものと思われる。（第７図－21、写真図版11－１－21）

22土師皿　口径：7.1～8.6cm。器高：1.2cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外面は浅黄橙色（10YR8/4）、内面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：密。１mm以下の雲母・白・赤・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/1。外内面はナデ・ユビオサエ調整を施している。（第７図－22、写真図版11－１－22）

23製塩土器　最大幅：3.4cm（残存）。器高：2.6cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（7.5YR8/4）。胎土：粗。１mm以下の赤・黒・白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。古墳時代の混入品とみられる。（第７図－23、写真図版11－１－23）

24須恵器練鉢　口径：30.8cm（復元）。器高：6.9cm（残存）。厚さ：0.4～0.7cm。色調：外・内面は灰色（N 6/）、口縁外面は青灰色（5PB5/1）、断面は灰白色（N 7/）。胎土：やや密。２mm以下の白・黒・灰色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/8。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。（第７図－24、写真図版11－１－24）

溝３

土師器

46皿　口径：8.2cm。器高：1.3cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内・断面は浅黄色（2.5Y8/3）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。以下の46～63の土師器皿はすべてＪタイプの13世紀代のものと思われる。（第10図－46、写真図版15－２－46）

47皿　口径：8.5cm。器高：1.3cm。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内面は灰白色（5Y8/1）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：完形。（第10図－47、写真図版15－２－47）

48皿　口径：9.2cm（復元）。器高：1.1cm。厚さ：0.3cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（10YR8/2）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：1/2。（第10図－48、写真図版15－２－48）

49皿　口径：8.6cm。器高：1.3cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内・断面は灰白色（5Y8/1）。胎

土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：3/4。（第10図－49、写真図版15－２－49）
50皿　口径：8.4cm。器高：1.4cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（10YR8/4）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：3/4。（第10図－50、写真図版15－２－50）
51皿　口径：9.2cm（復元）。器高：1.2cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外面は灰白色（5Y7/2）、内・断面は灰白色（5Y8/2）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図－51、写真図版15－２－51）
52皿　口径:9.4cm（復元）。器高:1.4cm。厚さ:0.2～0.4cm。色調:外・内・断面は灰黄色（2.5Y7/2）。胎土：やや密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図－52、写真図版15－２－52）
53皿　口径：8.6cm。器高：1.3cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内面は灰白色（5Y8/1）、断面は灰黄色（2.5Y6/2）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：3/4。（第10図－53、写真図版15－２－53）
54皿　口径：9.1cm。器高：1.4cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外面はにぶい黄橙色（10YR7/2）、内・断面は灰白色（10YR8/2）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図－54、写真図版15－２－54）
55皿　口径：8.6cm。器高：1.7cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（7.5YR8/4）。胎土：やや密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：7/8。（第10図－55、写真図版15－２－55）
56皿　口径：13.2cm（復元）。器高：1.9cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外面はにぶい橙色（5YR7/4）、内面は淡橙色（5YR8/4）、断面は灰白色（5YR7/4）。胎土：やや密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図－56、写真図版15－２－56）
57皿　口径:12.7cm（復元）。器高:2.3cm。厚さ:0.5～0.6cm。色調:外・断面は浅黄橙色（10YR8/3）、内面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：やや密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図－57、写真図版15－２－57）
58皿　口径：13.3cm。器高：2.7cm。厚さ：0.5～0.7cm。色調：外・内面は浅黄橙色（10YR8/1）、断面は灰白色（7.5Y7/1）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：やや良好。残存度：1/2。（第10図－58、写真図版15－２－58）
59皿　口径：13.8cm（復元）。器高：2.6cm。厚さ：0.4～0.6cm。色調：外面はにぶい橙色（5YR7/3）、内・断面はにぶい橙色（7.5YR7/3）。胎土：やや密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図－59、写真図版15－２－59）
60皿　口径：13.0cm。器高：2.4cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：5/6。（第10図－60、写真図版15－２－60）
61皿　口径：14.2cm（復元）。器高：2.8cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外面は浅黄橙色（10YR8/4）、内・断面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図－61、写真図版15－２－61）
62皿　口径:10.0cm（復元）。器高:1.8cm。厚さ:0.4～0.5cm。色調:外・内・断面は黄橙色（10YR6/2）。胎土：やや密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/3。煤付着。（第10図－62、写真図版15－２－62）
63皿　口径:13.4cm（復元）。器高:2.8cm。厚さ:0.4～0.5cm。色調:外・内面は灰黄褐色（10YR6/2）、断面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：やや密。２mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。煤付着。以上、46～63の土師器皿はすべてＪタイプの13世紀代のものと思われる。（第10図－63、写真図版15－２－63）

須恵器

64坏蓋　口径：16.0cm（復元）。器高：0.9cm。厚さ：0.3～0.6cm。色調：外面は灰白色（N7/）内・断面は明青灰色（5PB7/1）。胎土：やや密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。８世紀後半のものと思われる。（第10図－64、写真図版16－１－64）
103練鉢　口径：28.8cm（復元）。器高：11.3cm。厚さ：0.5～1.0cm。色調：外・内面は灰色（N

第10図　出土遺物（溝３・ＮＮ2013－２）

6/)、口縁部外面は灰色（N 4/)、断面は灰色（N 5/)。胎土：やや粗。２㎜以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。（第11図－103、写真図版16－２－103）

104練鉢　口径:28.6cm（復元)。器高:9.3cm。厚さ:0.4～0.9cm。色調:外・内面は青灰色（5PB5/1)、口縁部外面は青黒色（5PB1.7/1)、断面は灰色（N 6/)。胎土：やや粗。４㎜以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/5。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。（第11図－104、写真図版16－２－104）

105練鉢　口径：23.2cm（復元)。器高：8.1cm（残存)。厚さ：0.5～0.8cm。色調：外・断面は灰色（N 8/)、口縁部外面は灰色（N 3/)、内面は灰色（N 3/)。胎土：やや粗。６㎜以下の白・灰・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/5。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。（第11図－105、写真図版16－２－105）

106片口練鉢　口径：30.6cm（復元)。器高：8.5cm（残存)。厚さ：0.6～0.8cm。色調：外面は灰色（N 6/)、口縁部外面は青灰色（5PB5/1)、内・断面は灰色（N 7/)。胎土:やや密。２㎜以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成:良好。残存度:1/5。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。（第11図－106、写真図版16－２－106）

107片口練鉢　口径：26.4cm（復元)。器高：10.1cm。厚さ：0.5～1.1cm。色調：外・内・断面は灰色（N 5/)。胎土：やや密。５㎜以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/3。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。（第11図－107、写真図版16－２－107）

108練鉢　口径：29.6cm（復元)。底径：14.0cm（復元)。器高：12.7cm。厚さ：0.6～1.2cm。色調：外・内・断面は灰白色（N 7/)。胎土：やや粗。７㎜以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/5。外内面はナデ調整。口縁に自然釉付着。猿投や瀬戸など東海系のもの。12世紀末～13世紀。（第11図－108、写真図版16－２－108）

磁器

65青磁碗　幅：3.9cm（残存)。器高：3.7cm（残存)。厚さ：0.5～0.8cm。色調：外・内面はオリーブ黄色（7.5Y6/3)、断面は灰白色（N8/)。胎土：密。２㎜以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。同安窯系。Ｄ期の12世紀代のものと思われる。（第10図－65、写真図版16－１－65）

66青磁碗　底径：7.2cm（復元)。器高：2.2cm（残存)。厚さ：0.9～1.2cm。色調：外・内面は緑灰色（7.5GY6/1)、断面は灰白色（N7/)。胎土：密。１㎜以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。龍泉窯系。（第10図－66、写真図版16－１－66）

67白磁碗　幅:4.7cm（残存)。器高:3.3cm（残存)。厚さ:0.4cm。色調:外・内面は灰白色（10Y6/1)、断面は灰白色（N8/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。Ｃ期の12世紀代のもの。（第10図－67、写真図版16－１－67）

68白磁皿　口径：6.6cm（復元)。器高：2.7cm（残存)。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外・内面は灰白色（7.5Y8/1)、断面は灰白色（7.5Y7/1)。胎土：密。１㎜以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。Ｃ期の12世紀代のもの。（第10図－68、写真図版16－１－68）

69白磁碗　口径：16.2cm（復元)。器高：2.9cm（残存)。厚さ：0.2～0.3cm。色調：外・内面は明緑色（7.5GY8/1)、断面は灰白色（N8/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。Ｄ・Ｅ期で12世紀～13世紀前半。（第10図－69、写真図版16－１－69）

70白磁皿　底径:3.2cm（復元)。器高:0.9cm（残存)。厚さ:0.4cm。色調:外・内面は灰白色（7.5Y8/1)、断面は灰白色（7.5Y7/1)。胎土：やや密。１㎜以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。（第10図－70、写真図版16－１－70）

瓦器

71碗　口径：8.4cm（復元)。器高：3.8cm（残高)。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内・断面は灰白色（N 8/)。胎土：やや粗。２㎜以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部外面はナデ調整を行い、体部外面はユビオサエ調整を行う。内面はヘラミガキがみられる。大和型Ⅳ－Ｂ段階で14世紀後半のものと思われる。（第10図－71、写真図版15－２－71）

72碗　口径：13.0cm。底径：5.1cm。器高：4.0cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内面は灰色（N6/)、

断面は灰白色（N8/）。胎土：密。１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：3/4。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施す。高台は不整形な三角形。大和型Ⅲ－Ｃ段階で13世紀中ごろのものと思われる。（第10図－72、写真図版15－２－72）

73碗　口径：13.0㎝。底径：4.1㎝。器高：4.0㎝。厚さ：0.2～0.4㎝。色調：外・内面は暗灰色（N3/）、断面は灰色（N6/）。胎土：密。１㎜以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施す。高台は極めて低い三角形。大和型Ⅲ－Ｂ段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図－73、写真図版15－２－73）

74碗　口径：12.4㎝。底径：4.4㎝。器高：3.6㎝。厚さ：0.3～0.5㎝。色調：外・内面は灰色（N7/）、断面は灰白色（N8/）。胎土：密。１㎜以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：ほぼ完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施す。高台は低い三角形。大和型Ⅲ－Ｂ段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図－74、写真図版15－２－74）

75碗　口径：11.8㎝。器高：3.4㎝。厚さ：0.3～0.4㎝。色調：外・内面は灰色（N4/）。胎土：密。１㎜以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：完形。高台は剥離。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。大和型Ⅲ－Ｃ段階で13世紀中ごろのものと思われる。（第10図－75、写真図版15－２－75）

76碗　口径：14.4㎝。底径：4.0㎝。器高：4.4㎝。厚さ：0.2～0.4㎝。色調：外・内面は灰色（N4/）、断面は灰白色（N7/）。胎土：密。１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：9/10。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型Ⅲ－Ｂ段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図－76、写真図版15－２－76）

77碗　口径：14.5㎝。底径：4.3㎝。器高：4.7㎝。厚さ：0.2～0.4㎝。色調：外・内面は淡黄色（2.5Y8/3）、灰色（N4/）。胎土：密。１㎜以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は密なヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型Ⅲ－Ａ（古）段階で12世紀後半と思われる。（第10図－77、写真図版15－２－77）

78碗　口径：15.1㎝。底径：4.7㎝。器高：4.7㎝。厚さ：0.3～0.5㎝。色調：外・内面は灰色（N4/）、断面は灰白色（N8/）。胎土：密。１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：9/10。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型Ⅲ－Ｂ段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図－78、写真図版15－２－78）

79碗　口径：13.9㎝。底径：4.2㎝。器高：4.5㎝。厚さ：0.2～0.4㎝。色調：外・内面は灰色（N4/）。胎土：密。１㎜以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型Ⅲ－Ｂ段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図－79、写真図版15－２－79）

80碗　口径：13.4㎝。底径：4.8㎝。器高：4.2㎝。厚さ：0.2～0.5㎝。色調：外・内面は灰色（N6/）。胎土：密。１㎜以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型Ⅲ－Ａ（古）段階で12世紀後半と思われる。（第10図－80、写真図版15－２－80）

81碗　口径：12.9㎝。底径：4.1㎝。器高：3.9㎝。厚さ：0.2～0.5㎝。色調：外・内面は灰色（N5/）。胎土：密。１㎜以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミ

ガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型Ⅲ－Ｃ段階で13世紀中ごろのものと思われる。（第10図－81、写真図版15－２－81）

82碗　口径：13.4cm。底径：4.1cm。器高：4.0cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内面は灰色（N6/）、断面は灰白色（7.5Y8/1）。胎土：密。１mm以下の石英・砂粒をやや多く含む。１cm大の礫１点含む。焼成：やや不良。残存度：ほぼ完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は放射状のハケメを施し、粗いヘラミガキを施す。見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型Ⅲ－Ｂ段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図－82、写真図版15－２－82）

83碗　口径：12.4cm。底径：4.4cm。器高：3.6cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内面は灰色（N4/）。胎土：密。１mm以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：ほぼ完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型Ⅲ－Ｃ段階で13世紀中ごろのものと思われる。（第10図－83、写真図版15－２－83）

84碗　底径：5.6cm（復元）。器高：2.1cm（残高）。厚さ：0.4～0.6cm。色調：外面は灰色（N5/）、内面は暗灰色（N3/）、断面は灰色（N6/）。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。見込部には斜格子状の暗文を施す。大和型Ⅰ－Ｃ段階で11世紀末のものと思われる。（第10図－84、写真図版15－２－84）

85碗　底径：6.0cm（復元）。器高：1.5cm（残高）。厚さ：0.5～0.7cm。色調：外・内面は灰色（N5/）、断面は灰白色（N7/）。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。見込部には斜格子状の暗文を施す。大和型Ⅰ－Ｃ段階で11世紀末のものと思われる。（第10図－85、写真図版15－２－85）

86碗　底径：3.8cm。器高：1.1cm（残高）。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内・断面は灰白色（N7/）。胎土：密。１mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：不良。残存度：小片。見込部にはジグザグ状の暗文を施す。大和型Ⅱ段階で12世紀前半。（第10図－86、写真図版15－２－86）

87皿　口径：8.6cm（復元）。器高：1.3cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内面は灰色（N4/～N6/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。口縁部外面はナデ調整を行い、体部外面はユビオサエ調整を行う。見込部にはジグザグ状の暗文を施す。13世紀代のものと思われる。（第10図－87、写真図版15－２－87）

88皿　口径：9.0cm（復元）。器高：2.7cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外面は灰色（N4/）、内面は灰色（N5/）、断面は灰白色（10YR 8/1）。胎土：粗。２mm以下の黒・赤色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部外面はナデ調整を行い、体部外面はユビオサエ調整を行う。13世紀代のものと思われる。（第10図－88、写真図版15－２－88）

89皿　口径：9.4～9.8cm。器高：1.8cm。厚さ：0.3～0.6cm。色調：外・内面は暗青灰色（5PB4/1）。胎土：やや粗。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁部外面はナデ調整を行い、体部外面はユビオサエ調整を行う。13世紀代と思われる。（第10図－89、写真図版15－２－89）

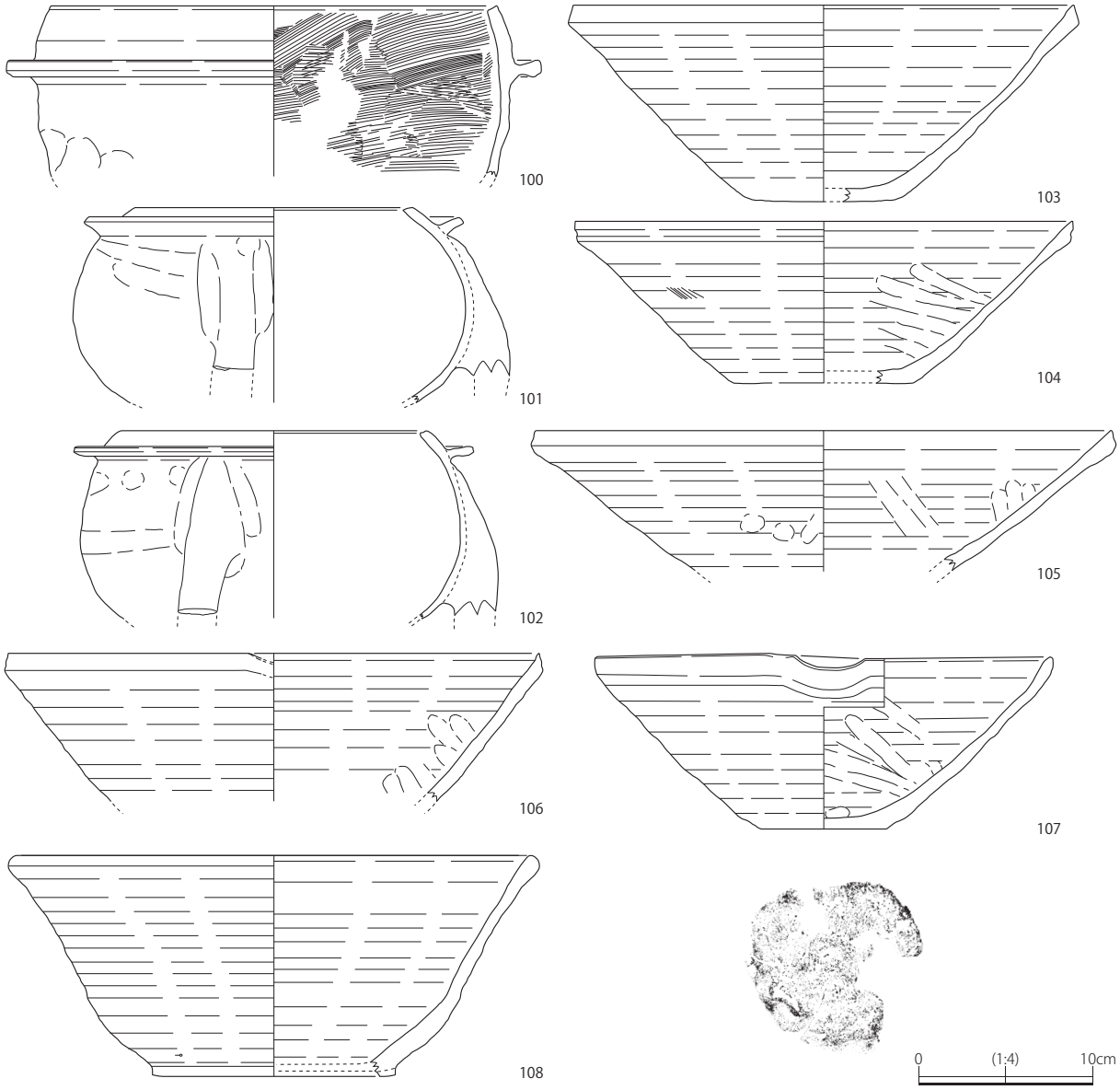
国産陶器

90碗　口径：16.2cm（復元）。底径：5.0cm（復元）。器高：6.8cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内面はオリーブ黄色（7.5Y6/3）、断面は灰白色（2.5YR8/1）。胎土：やや密。２mm以下の赤・黒色砂粒を含む。焼成：良好。内外面に灰釉。古瀬戸。14世紀後半～15世紀初頭のものと思われる。（第10図－90、写真図版16－１－90）

91碗　口径：14.8cm（復元）。器高：6.4cm（残存）。厚さ：0.4～0.6cm。色調：外面はオリーブ黄色（7.5Y6/3）、内面は灰白色（10Y7/2）、断面は灰白色（7.5YR8/1）。胎土：やや密。３mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/8。内外面に灰釉。古瀬戸。14世紀後半～15世紀初頭のものと思われる。（第10図－91、写真図版16－１－91）

92壺　器高：6.8cm。厚さ：0.7～0.9cm。色調：外・内面は灰白色（N7/）、断面は緑灰色（10GY6/1）。胎土：やや密。２mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。内面に灰釉。古瀬戸。（第10図－92、写真図版16－１－92）

93碗　底径：5.6cm（復元）。器高：1.4cm。厚さ：0.8cm。色調：外面は灰白色（10Y8/1）、内面は



第11図　出土遺物（溝３・ＮＮ2013－２）

灰オリーブ色（7.5Y5/3)、断面は灰白色（7.5Y8/1)。胎土：やや密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。内面に灰釉。古瀬戸。14世紀後半～15世紀初頭のものと思われる。（第10図－93、写真図版16－１－93）

94壺　器高：4.5cm（残存)。厚さ：0.8～1.4cm。色調：外面はオリーブ黄色（7.5Y6/3)、内・断面は灰白色（N8/)。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面に灰釉。古瀬戸。（第10図－94、写真図版16－１－94）

瓦質土器

95甕　口径：31.6cm。（復元)。器高：6.7cm（残存)。厚さ：0.6～1.6cm。色調：外面は灰色（N5/)、内面は灰色（N4/)、断面は灰色（N8/)。胎土：やや粗。１mm以下の砂粒含む。焼成：やや不良。残存度：小片。河内・和泉型で14世紀代のものと思われる。（第10図－95、写真図版16－２－95）

96摺鉢　口径：26.6cm。（復元)。器高：8.6cm（残存)。厚さ：0.6～1.0cm。色調：外・内面は灰色（N4/)、断面は灰白色（2.5Y8/1)。胎土：やや密。２mm以下の砂粒含む。焼成：やや不良。残存度：小片。14世紀後半のものと思われる。（第10図－96、写真図版16－２－96）

97火鉢　口径：31.0cm（復元)。器高：8.9cm（残高)。厚さ：0.8～1.4cm。色調：外・内面は灰白色（N7/)、断面は灰白色（N8/)。胎土：やや粗。１mm以下の砂粒を含む。焼成：やや良好。残存度：

小片。体部にスタンプ花文を施す。火鉢Ｃ。15世紀代のものと思われる。（第10図－97、写真図版16－２－97）

98火鉢　口径:28.6cm(復元)。器高:4.8cm(残高)。厚さ:0.6～1.4cm。色調:外面は灰褐色(7.5YR5/2)、内面は灰色（N6/)、断面は浅黄橙色（7.5YR8/4)。胎土：やや粗。２mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。火鉢Ａ。15世紀代のものと思われる。（第10図－98、写真図版16－２－98）

99火鉢　口径：45.0cm。（復元)。器高：10.3cm（残存)。厚さ：0.9～2.2cm。色調：外面は暗青灰色（5PB4/1)、内面は青灰色（5PB5/1)、断面は灰白色（N8/)。胎土：やや密。１mm以下の砂粒含む。焼成：良好。残存度：小片。13～14世紀のもので有孔盤型火鉢と思われる。（第10図－99、写真図版16－２－99）

100羽釜　口径：25.6cm（復元)。器高：9.8cm（残高)。厚さ：0.8～0.9cm。色調：外・内・断面は灰白色（10YR8/2)。胎土：やや粗。４mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。河内産Ｇ型式で15世紀後半～16世紀初頭のものとみられる。（第11図－100、写真図版16－２－100）

101三足釜　口径：16.0cm（復元)。器高：11.2cm（残高)。厚さ：0.5～0.6cm。色調：外面は淡橙色（5YR8/3)、内面は灰白色（N8/)、断面は灰白色（10YR8/2)。胎土：粗。１mm以下の砂粒を含む。焼成：やや良好。残存度：1/3。13世紀代のものと思われる。（第11図－101、写真図版16－２－101）

102三足釜　口径:17.6cm(復元)。器高10.8m(残高)。厚さ:0.3～0.6cm。色調:外面は橙色(2.5YR7/6)、内面は灰白色（N8/)、断面は灰白色（10YR8/1)。胎土：粗。１mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：1/3。13世紀代のものと思われる。（第11図－102、写真図版16－２－102）

瓦

109丸瓦　横幅：8.7cm（残存)。縦幅：5.0cm（残存)。厚さ：1.9～2.8cm。色調：外面は灰色（N5/)、内面は灰色（N4/)、断面は浅黄色（2.5Y7/3)。胎土：粗。５mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。裏面に布目が残る。玉縁。古代のものと思われる。（第12図－109、写真図版17－１－109）

110丸瓦　横幅:5.8cm（残存)。縦幅:8.9cm（残存)。厚さ:1.1～2.7cm。色調:外面は灰白色（N8/)・暗青灰色（5PB4/1)、内面は暗青灰色（5PB4/1)、断面は灰白色（N7/)。胎土：粗。３mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。表面に縄目痕、裏面には布目が残る。玉縁。中世のものと思われる。（第12図－110、写真図版17－１－110）

111丸瓦　横幅:5.0cm（残存)。縦幅:6.0cm（残存)。厚さ:1.1～2.0cm。色調:外面は灰白色（N7/)、内面は青灰色（5PB5/1)、断面は灰白色（N7/)。胎土：粗。５mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。裏面は布目が残る。玉縁。中世のものと思われる。（第12図－111、写真図版17－１－111）

112平瓦　横幅:6.5cm(残存)。縦幅:5.7cm(残存)。厚さ:1.4～1.8cm。色調:外面は灰白色(7.5YR8/2)、内面は浅黄橙色（7.5YR8/3)、断面は青灰色（5Y8/1)。胎土：粗。５mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。表面に布目痕、裏面にはタタキ目が残る。古代のものと思われる。（第12図－112、写真図版17－１－112）

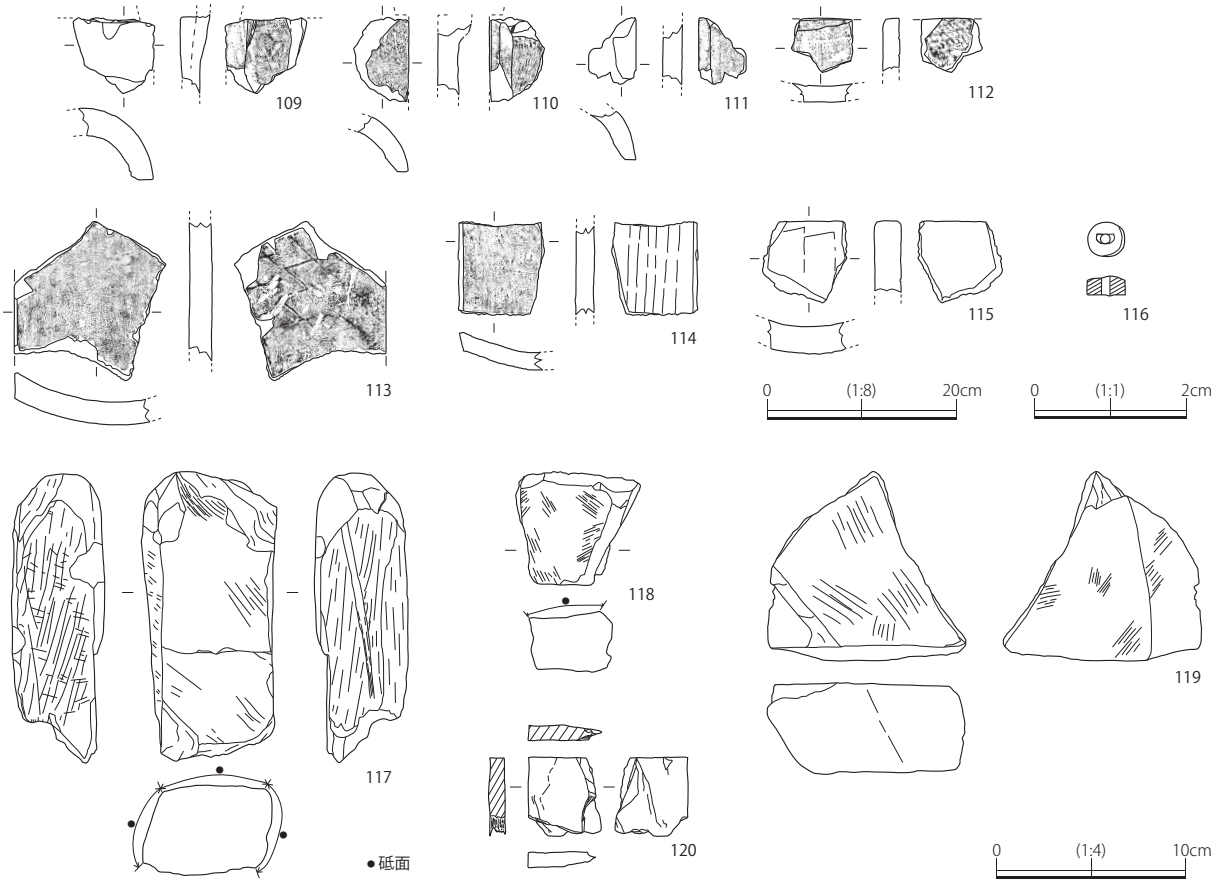
113平瓦　横幅:16.1cm（残存)。縦幅:16.9cm（残存)。厚さ:2.3～2.5cm。色調:外面は灰白色（N7/)、内面は灰白色（N8/)、断面は暗青灰色（5PB4/1)。胎土：粗。３mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。表面に布目痕があり、裏面は格子目タタキが施される。古代のものと思われる。（第12図－113、写真図版17－１－113）

114平瓦　横幅:9.1cm（残存)。縦幅:9.9cm（残存)。厚さ:1.9～2.0cm。色調:外面は青灰色（5PB6/1)、内面は暗青灰色（5PB3/1)、断面は明青灰色（5PB7/1)。胎土：粗。５mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。表面に布目痕が残る。中世のものと思われる。（第12図－114、写真図版17－１－114）

115平瓦　横幅：8.9cm（残存)。縦幅：8.7cm（残存)。厚さ：2.9cm。色調：外・内・断面は灰白色（5Y8/1)。胎土:粗。４mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。古代のものと思われる。（第12図－115、写真図版17－１－115）

石製品

116臼玉　横幅：0.5cm。縦幅：0.4cm。厚さ：0.25cm。滑石製。古墳時代のもの。（第12図－116、



第12図　出土遺物（溝３・ＮＮ2013－２）

写真図版16－１－116）

117砥石　横幅：7.2㎝。縦幅：15.4㎝。厚さ：4.8㎝。砥面４面。（第12図－117、写真図版17－１－117）

118砥石　横幅：6.7㎝。縦幅：6.0㎝。厚さ：3.2㎝。砥面１面。（第12図－118、写真図版17－１－118）

119砥石　横幅：10.5㎝。縦幅：11.0㎝。厚さ：4.9㎝。砥面４面。表裏面を主砥面としている。（第12図－119、写真図版17－１－119）

120不明石製品　横幅：3.9㎝。縦幅：4.2㎝。厚さ：0.9㎝。表裏面ともに調整痕なし。側面２面に擦り切り痕。硯等の未成品か。（第12図－120、写真図版17－１－120）

（村上　始・實盛・古谷真人）

第４章　中野遺跡（ＮＮ1989-1、1993年度、ＮＮ2000-2）立会調査の成果

第１節　1989-1立会調査

１．調査の経過

平成元年度の立会調査については、四條畷市中野本町３～６、24番において公共下水道建設が計画された。計画箇所の西端は昭和61（1986）年度に実施した中野遺跡第10次調査（松岡1987）の南に隣接しており、遺跡の存在が予想されたため、関係各課で協議を行い、下水道工事時に立会調査を行うこととなった。本体工区については平成元（1989）年12月21日に四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し文化庁長官へ文化財保護法第57条の３第１項（当時）の規定により「埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。

同年10月２日から11月16日にかけて立坑掘削部の立会調査を行った。調査は必要に応じ遺構の略測、断面図作成、写真撮影、遺物の取上げを行うとともに、遺構埋土の水洗選別を実施した。立坑１、２、４で遺構を検出し多くの遺物が出土した。平成２（1990）年３月19日から６月７日にかけて本体工区（清滝蔀屋下水道1-202工区）の立会調査を行った。調査はNo.1からNo.20人孔までの下水管埋設工区全域で行い、工事に並行しNo.3人孔から開始しNo.7-No.5人孔間接続部で最終終了した。全ての箇所で写真撮影および断面略測を行い、必要に応じ土壌の水洗選別を行い、遺物を取上げた。

これらすべての調査における出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計30箱であった。

（實盛）

２．検出遺構

この調査で遺構を検出できたのは、立坑掘削部においてであり、本体工区については調査の性格上断面観察と遺物の取上げに注力した。遺構の検出は立坑No.1において溝１基とPit２基、立坑No.2において大溝１基、立坑No.4において大溝とそれに流れ込む溝であった。

立坑No.1で検出した遺構群は、遺構面の標高が北端でT.P.＋7.605m、南端でT.P.＋7.520mであった。遺構の出土遺物はいずれも細片で図化できるものはなかったが、検出状況などから、昭和61年度第10次調査（松岡1987）の第３遺構面に対応するとみられる。同調査では古墳時代の建物群を検出しており､それが続いているものとみられる。同調査での遺構面標高がT.P.＋8.3m程度であることから、同調査地が微高地上にあたっており、本調査地は微高地縁辺部にあたるものとみられる。

立坑No.2はほぼ全域が大溝内とみられ、大溝１として遺物を取り上げた。大溝内は第１層灰色粘質土層、第２層青灰色粘質土層、第３層灰色粘質土層であり、いずれの土層からも多量の遺物が出土した。この大溝は出土遺物から古墳時代のものである。

立坑No.4で検出した大溝は、検出できた幅3.3m、長さ6.1m、深さ0.85mである。遺構面の標高は南東端でT.P.＋12.345m、南西端でT.P.＋12.220mであった。この大溝は南側の肩のみを検出したが、標高や検出状況からみると、2013-2次調査で検出した落込17と一連のものである可能性があり、その場合幅40mほどとみられる。本体部分の調査状況から、この大溝はほぼ北東から南西へと流れているとみられ、調査で出土した遺物の大半は他の地点のものも含めこの大溝に属する資料である可能性があろう。No.16-17人孔間接続部の断面図は立坑４に隣接した位置のもので、大溝部の堆積状況を示す。大溝内は灰色砂層が堆積しており、この土層から多くの遺物が出土した。出土遺物および2013-2次調査の状況から、大溝は古墳時代に機能したもので、中世段階にほぼ埋没して耕作地として利用されるようになったとみられる。

（實盛）

３．出土遺物

立坑No.１（包含層）

121韓式系土器甕　横：12.2cm（残存）。縦：12.8cm（残存）。厚さ：0.4～0.7cm。色調：外・内面は黄橙色（7.5YR 8/8）、断面は灰色（N8/）。胎土：やや密。３mm以下の灰・白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。土師質。古墳時代のもの。（第14図－121、写真図版17－２－121）

122陶質土器甕　横：8.1cm（残存）。縦：8.9cm（残存）。厚さ：0.6～0.8cm。色調：外・内面は青灰色（5PB 5/１）、断面は暗紫灰色（5RP 4/1）。胎土：密。１mm以下の白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。古墳時代のもの。（第14図－122、写真図版17－２－122）

123須恵器坏蓋　口径:12.2cm。器高:4.6cm。厚さ:0.2～0.6cm。色調:外・内・断面は青灰色(5PB5/1)。胎土：密。２mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/3。MT15型式（Ⅱ型式１段階）で６世紀前半のものと思われる。（第14図－123、写真図版17－２－123）

124土製紡錘車　径：4.5cm。孔径：0.8～0.9cm。器高：1.8cm。色調：にぶい橙色（7.5YR 6/4）～灰白色（2.5Y8/2）。残存度：ほぼ完形。古墳時代のもの。（第14図－124、写真図版17－２－124）

これらに加え、滑石製臼玉33点が出土した。（巻頭写真図版２－２）

立坑No.２（大溝１）

弥生土器

125蓋　口径：12.2cm（復元）。器高：2.1cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内・断面はにぶい黄橙色（2.5Y6/3）。胎土：粗。２mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第14図－125、写真図版18－１－125）

土師器

126小型甕　口径：11.5cm。器高：11.6cm。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外面は浅黄橙色（7.5YR8/3）、内面は浅黄橙色（7.5YR 8/4））。胎土：粗。３mm以下の白・赤色砂粒含む。焼成：良好。残存度：完形。古墳時代後期後半のものと思われる。（第14図－126、写真図版18－１－126）

127甕　口径：20.8cm。（復元）。器高：6.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.9cm。色調：外・内面は浅黄橙色（7.5YR 7/3）、断面は灰色（5Y4/1）。胎土：やや密。３mm以下の雲母・赤・白色砂粒含む。焼成：不良。残存度：小片。口縁部外内面はヨコナデ調整。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。煤付着。７世紀中ごろのものと思われる。（第14図－127、写真図版18－１－127）

128ミニチュア土器把手付鍋　口径：11.2cm。（復元）。器高：7.5cm（残存）。厚さ：0.2～0.6cm。色調：外内面はにぶい黄橙色（10YR6/3）、内面は浅黄橙色（7.5YR 7/4）、断面は黒褐色（2.5Y3/1）。胎土：粗。１mm以下の白・赤・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第14図－128、写真図版18－１－128）

129ミニチュア土器　口径：6.4cm。（復元）。器高：3.3cm（残存）。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外内面はにぶい黄橙色（10YR6/3）、内面は浅黄橙色（7.5YR 7/4）、断面は黒褐色（2.5Y3/1）。胎土：粗。１mm以下の白・赤・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第14図－129、写真図版18－１－129）

130ミニチュア土器　口径：6.4cm（復元）。器高：3.0cm。厚さ：0.4～0.6cm。色調：外・内面は灰白色（2.5Y8/2）、断面は灰色（5Y5/1）。胎土：やや密。１mm以下の雲母・白色砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：1/6。外内面はナデ調整を施している（第14図－130、写真図版18－１－130）

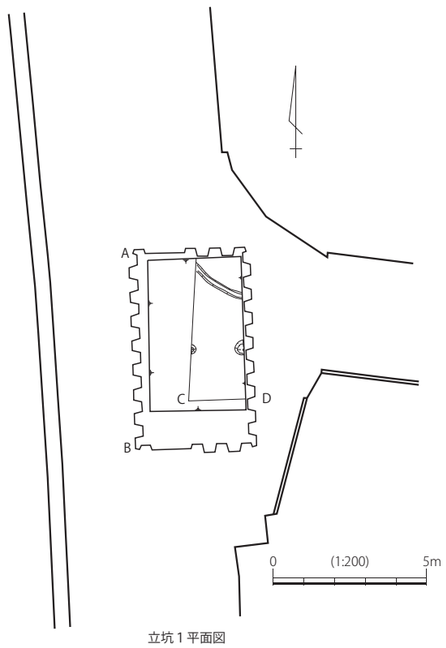
131ミニチュア土器把手　横：2.7cm。（残存）。器高：1.9cm（残存）。厚さ：1.0～1.9cm。色調：外内断面はにぶい黄橙色（10YR7/4）。胎土：やや密。１mm以下の雲母・白・赤・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。（第14図－131、写真図版18－１－131）

製塩土器

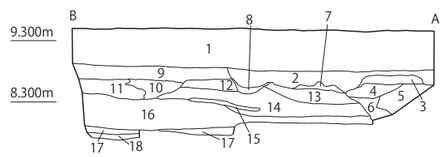
132製塩土器　口径：9.0cm（復元）。器高：3.7cm（残存）。厚さ：0.1～0.4cm。色調：外・断面は赤灰色（2.5YR6/1）、内面は橙色（2.5YR7/6）。胎土：粗。５mm以下の雲母・白・赤・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。古墳時代のもの。（第14図－132、写真図版18－２－132）

133製塩土器　口径：4.6cm（復元）。器高：3.5cm（残存）。厚さ：0.2～0.3cm。色調：外・内・断面は灰色（5Y5/1）。胎土：粗。３mm以下の赤・白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。古墳時

NN1989-1 調査位置（四條畷市下水道施設平面図 5-08、5-09 を基に作成）

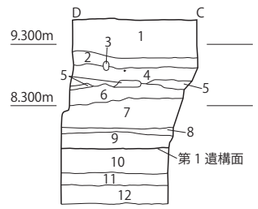


立坑 1 平面図



A-B

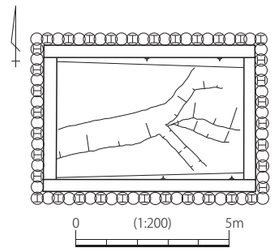
1 明赤褐色砂質土
2 灰赤色砂質土
3 紫灰色砂質土
4 暗青灰色細砂層
5 灰黄色細砂層
暗青灰色細砂層混じり
6 暗青灰色砂質土
7 青灰色砂質土
8 暗青灰色砂質土
9 灰色砂質土
10 紫灰色砂質土
11 灰オリーブ色砂質土
12 緑灰色砂質土
13 暗緑灰色砂質土
14 青灰色砂質土
15 灰白色砂層
16 暗紫灰色砂質土　包含層
17 暗灰色粘質土
18 紫黒色粘質土



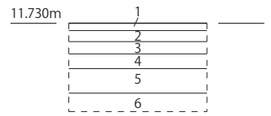
C-D

1 明褐色砂質土
2 青灰色砂質土
3 灰色砂質土
4 緑灰色砂質土
5 緑灰色砂層
6 暗緑灰色砂質土
7 暗青灰色砂質土
8 暗青灰色砂質土
7 層よりやや暗い
9 暗紫灰色砂質土　包含層
10 灰オリーブ色砂質土
第 1 遺構面
11 明黄褐色粘質土
12 灰黄色砂質土
砂利を含む

立坑 1 断面図

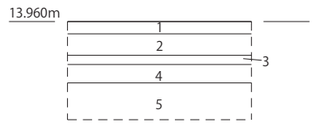


立坑 4 平面図（方位は任意）



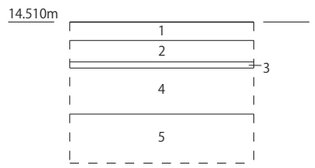
1 アスファルト
2 盛土
3 褐色砂質土
中世遺物包含層
4 褐色細砂層
小石混じり
5 褐灰色砂質層
6 白灰色砂層

No.3



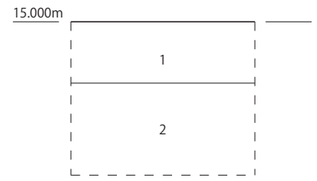
1 攪乱
2 褐色砂層
3 明褐色砂質土
4 青灰色シルト層
5 灰色砂層　黒褐色シルト層混入

No.18-14



1 攪乱
2 褐色砂層
3 橙褐色砂層
4 青灰色シルト層
5 灰色砂層

No.16-17

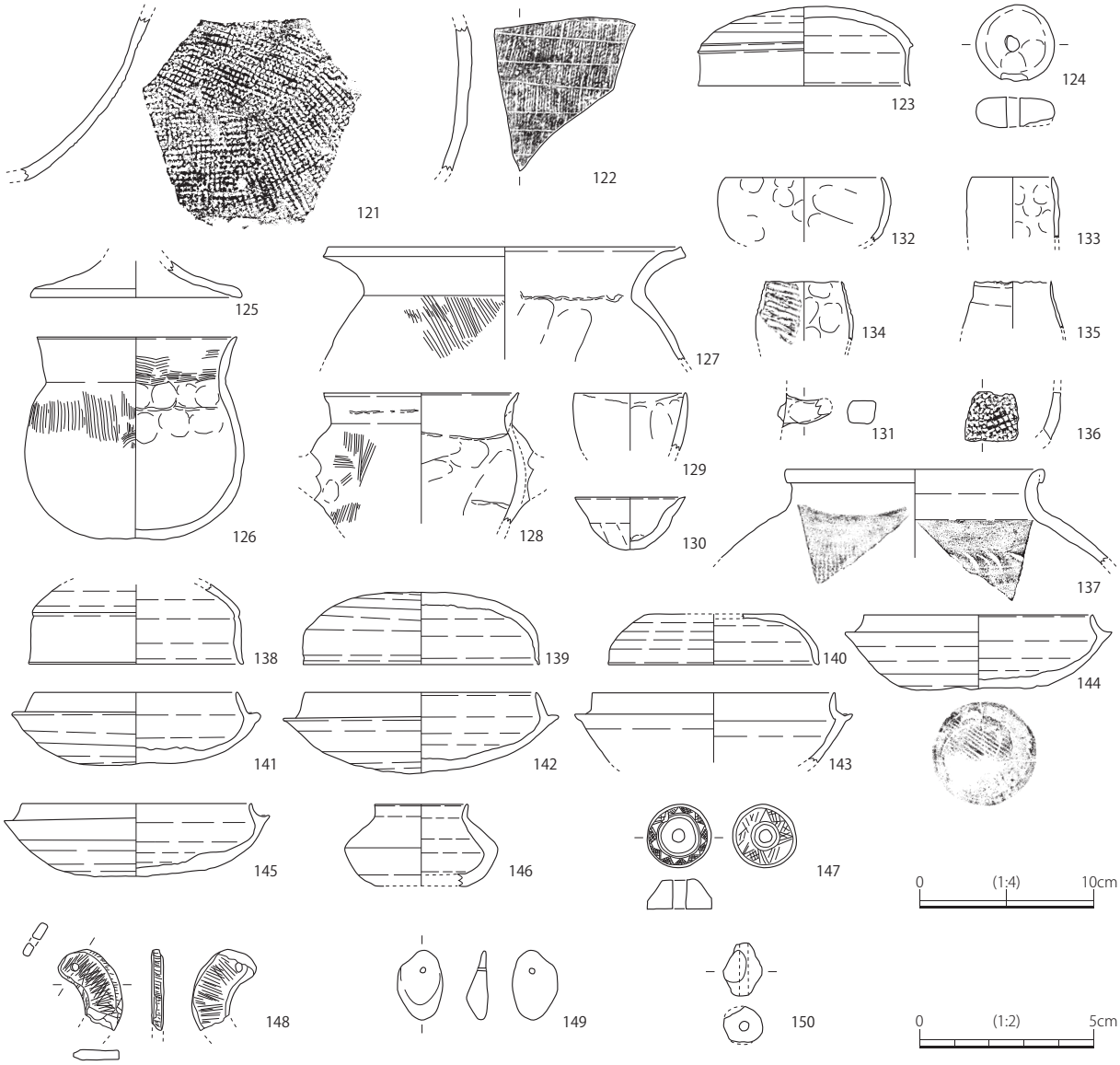


1 盛土
2 青灰色粘質土　遺物包含層

No.19-20

0
(1:100)
2m

第13図　調査地区平面図・断面図（ＮＮ1989－１）



第14図　出土遺物（ＮＮ1989－１　立坑１・立坑２）

代のいわゆるコップ形のもの。（第14図－133、写真図版18－２－133）

134製塩土器　口径：4.4cm（復元）。器高：3.4cm（残存）。厚さ：0.1～0.2cm。色調：外・内・断面は黄灰色（2.5Y4/1）。胎土：粗。２mm以下の白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。古墳時代のいわゆるコップ形のもの。（第14図－134、写真図版18－２－134）

135製塩土器　口径：4.4cm（復元）。器高：2.7cm（残存）。厚さ：0.1cm。色調：外・内・断面は灰白色（N8/）。胎土：粗。１mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。古墳時代のいわゆるコップ形のもの。（第14図－135、写真図版18－２－135）

韓式系土器

136平底甕　2.9×3.1cm。厚さ：0.6cm。色調：外面はにぶい黄橙色（10YR6/4）、内・断面はにぶい橙色（5YR6/4）。胎土：やや粗。２mm以下の雲母、白色・黒色鉱物含む。焼成：良好。残存度：小片。土師質。古墳時代の平底のものの底部に近い胴部。（第14図－136、写真図版18－２－136）

須恵器

137甕　口径:15.0cm（復元）。器高:5.1cm。厚さ:0.5～0.8cm。色調:外・内・断面は青灰色（5PB6/1）。胎土：密。１mm以下の白・黒色砂粒含む。焼成：良好。残存度：小片。（第14図－137、写真図版18－１－137）

138坏蓋　口径：12.4cm（復元）。器高：4.6cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外面は灰色（N5/）、内・断面は灰白色（N8/）。胎土：密。３mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。MT15型式（Ⅱ型式１段階）で６世紀前半のものと思われる。（第14図－138、写真図版18－１－138）

139坏蓋　口径：13.4cm。器高：4.1cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：外・内面は青灰色（5PB6/1）。胎土：密。２mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：完形。時計回りの調整。MT85型式（Ⅱ型式３段階）で６世紀中ごろのものと思われる。（第14図－139、写真図版18－１－139）

140坏蓋　口径：12.2cm（復元）。器高：2.9cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・断面は灰色（N6/）、内面は灰白色（N7/）。胎土:密。３mm以下の白色砂粒を含む。焼成:良好。残存度:1/6。TK43型式（Ⅱ型式４段階）で６世紀後半のものと思われる。（第14図－140、写真図版18－１－140）

141坏身　口径：11.8cm。器高：4.2cm。厚さ：0.3～0.9cm。色調：外面は青灰色（5B6/1）、内面は青灰色（5PB6/1）、断面は紫灰色（5P5/1）。胎土：やや密。４mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：完形。MT85型式（Ⅱ型式３段階）で６世紀中ごろのものと思われる。（第14図－141、写真図版18－１－141）

142坏身　口径：13.3cm。器高：4.7cm。厚さ：0.3～0.9cm。色調：外・内・断面は青灰色（5PB6/1）。胎土：やや密。５mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：3/4。MT85型式（Ⅱ型式３段階）で６世紀中ごろのものと思われる。（第14図－142、写真図版18－１－142）

143坏身　口径：14.0cm（復元）。器高：4.0cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内・断面は青灰色（5PB6/1）。胎土：密。１mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。MT85型式（Ⅱ型式３段階）で６世紀中ごろのものと思われる。（第14図－143、写真図版18－１－143）

144坏身　口径：13.2cm。器高：4.3cm。厚さ：0.4～0.7cm。色調：外・内・断面は灰白色（5Y8/）。胎土：やや密。３mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：完形。MT85型式（Ⅱ型式３段階）で６世紀中ごろのものと思われる。（第14図－144、写真図版18－１－144）

145坏身　口径：13.2cm。器高：4.2cm。厚さ：0.3～1.0cm。色調：外面は灰白色（N7/）、内・断面は明青灰色（5PB7/1）。胎土：やや密。３mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：5/8。MT85型式（Ⅱ型式３段階）で６世紀中ごろのものと思われる。（第14図－145、写真図版18－１－145）

146壺　口径：5.4cm（復元）。器高：4.7cm。厚さ：0.2～0.9cm。色調：外・内・断面は灰白色（N7/）。胎土：密。２mm以下の白色砂粒含む。焼成：良好。残存度：1/4。飛鳥時代のもの。（第14図－146、写真図版18－１－146）

土製品

150土製切子玉　幅：1.1cm。器高：1.5cm（残存）。古墳期。（第14図－150、写真図版18－２－150）

石製品

147滑石製紡錘車　上径：2.0cm。下径：3.7cm。孔径：0.7～0.8cm。器高：1.8cm。色調：暗緑灰色（10GY 4/1）。残存度：完形。古墳時代のもの。（第14図－147、写真図版18－２－147）

148滑石製勾玉　横幅：1.9cm。縦幅：2.3cm。古墳期。（第14図－148、写真図版18－２－148）

149垂飾　横幅：1.3cm。縦幅：2.0cm。緑灰色系の不定形の石材を用いる。古墳時代のものか。（第14図－149、写真図版18－２－149）

これらに加え、土玉７点、滑石製臼玉218点、青色ガラス小玉１点、チャート製臼玉１点が出土した。（巻頭写真図版２－２）

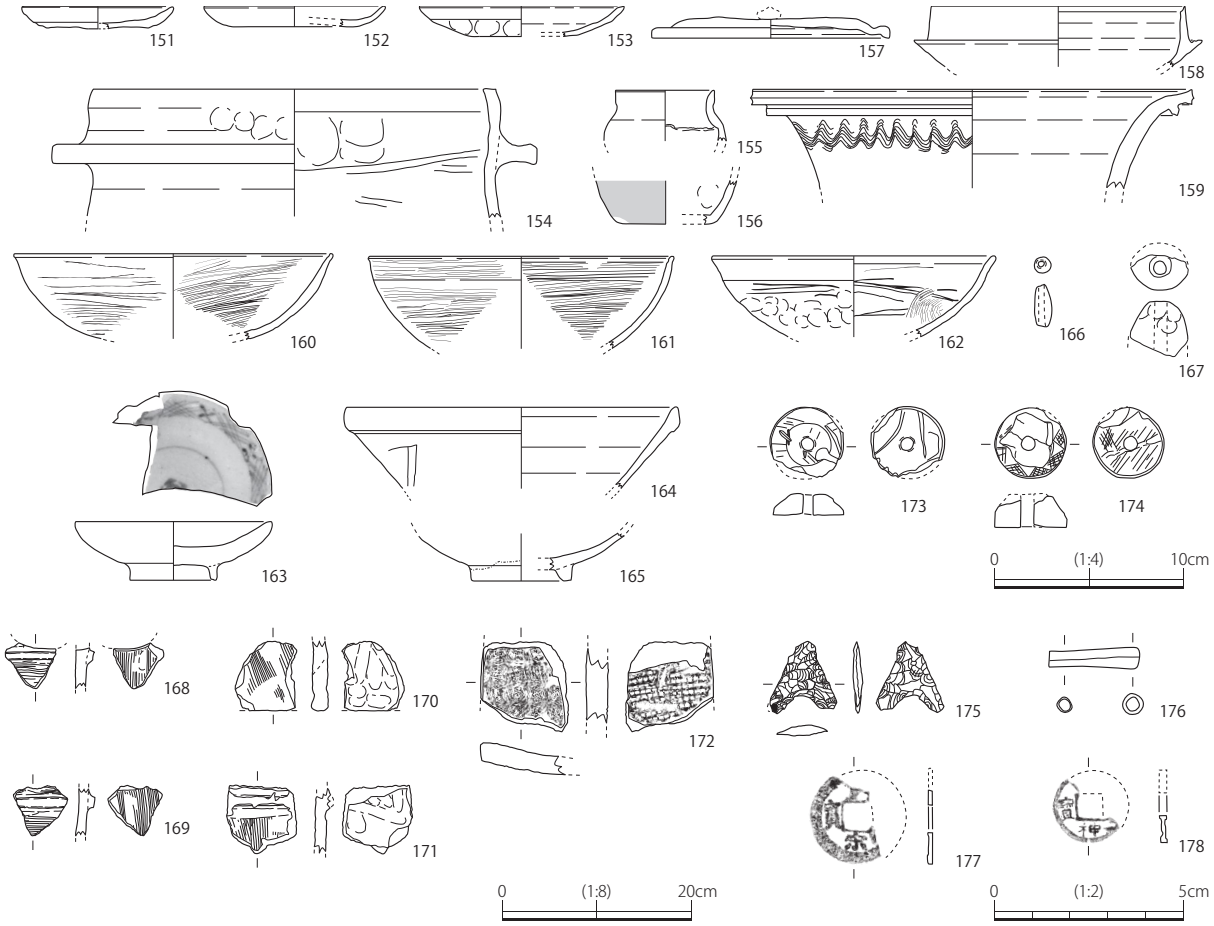
立坑No.4

土師器

151皿　口径：8.0cm（復元）。器高：1.2cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内・断面は灰白色（2.5YR 8/2）。胎土：密。１mm以下の黒・赤色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。（第15図－151、写真図版19－１－151）

152皿　口径：9.6cm（復元）。器高：1.1cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内面は灰白色（10YR 8/1）、断面は黒色（7.5YR 2/1）。胎土:密。１mm以下の黒色砂粒を含む。焼成:不良。残存度:1/6。（第15図－152、写真図版19－１－152）

153皿　口径:10.8cm（復元）。器高:1.6cm。厚さ:0.2～0.4cm。色調:外・内・断面は浅黄橙色（10YR



第15図　出土遺物（ＮＮ1989－１　立坑４）

8/3)、橙色（2.5YR 7/6)。胎土：密。１mm以下の白・赤色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はユビオサエ調整を施している。(第15図－153、写真図版19－１－153)

瓦質土器

154羽釜　口径：21.2cm（復元)。器高：6.7cm（残存)。厚さ：0.6cm。色調：外・内・断面は灰白色（2.5Y8/2)。胎土：粗。１mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。15世紀代のものと思われる。(第15図－154、写真図版19－１－154)

ミニチュア土器

155ミニチュア土器　口径：5.2cm（復元)。器高：2.7cm（残存)。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（10YR8/3)。胎土：粗。３mm以下の雲母・白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外内面はナデ調整を施している。(第15図－155、写真図版19－１－155)

156ミニチュア土器　底径：4.8cm（復元)。器高：2.3cm（残存)。厚さ：0.4cm。色調：外・内・断面は灰白色（2.5Y8/1)。胎土：粗。1mm以下の白・黒・赤色砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。(第15図－156、写真図版19－１－156)

須恵器

157坏Ｂ蓋　口径：12.6cm（復元)。器高：1.1cm。厚さ：0.3～0.6cm。色調：外・内・断面は灰色（N5/)。胎土：密。１mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。平城宮Ｖ期で８世紀後半のものと思われる。(第15図－157、写真図版19－１－157)

158坏身　口径：13.4cm（復元)。器高：3.2cm（残存)。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内・断面は青灰色（5PB5/1)。胎土：密。２mm以下の白色砂粒を含む。焼成：やや良好。残存度：小片。MT15型式（Ⅱ型式１段階）で６世紀前半のものと思われる。(第15図－158、写真図版19－１－158)

159甕口縁　口径：23.2cm。（復元）。器高：5.3cm（残存）。厚さ：0.5～0.9cm。色調：外面は青灰色（5PB5/1）、内・断面は青灰色（5PB6/1）。胎土：密。３mm以下の雲母・白・黒色砂粒含む。焼成：不良。残存度：小片。TK208型式（Ⅰ型式３段階）。（第15図－159、写真図版19－１－159）

瓦器

160碗　口径：16.8cm（復元）。器高：4.5cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内面は暗灰色（N3/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。大和型Ⅱ－Ａ段階で12世紀初頭のものと思われる。（第15図－160、写真図版19－１－160）

161碗　口径：16.2cm（復元）。器高：4.9cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内面は暗灰色（N3/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はナデ調整を行い、内面端部にはわずかに段差が残る。外面はユビオサエ調整を行う。大和型Ⅱ－Ａ段階で12世紀初頭のものと思われる。（第15図－161、写真図版19－１－161）

162碗　口径：15.0cm（復元）。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内面は灰色（N4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。口縁部外面はナデ調整を行い、外面はユビオサエ調整を行う。大和型Ⅲ－Ａ段階で12世紀末のものと思われる。（第15図－162、写真図版19－１－162）

磁器

163染付小皿　口径：10.4cm（復元）。底径：4.6cm（復元）。器高：5.2cm。厚さ：0.9～1.0cm。色調：外・内面は明緑灰色（10GY8/2）、断面は灰白色（N8/）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/3。見込にコンニャク印判による五弁花文がある。18世紀後半のものと思われる。（第15図－163、写真図版19－１－163）

164白磁　口径：17.4cm（復元）。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.3～0.7cm。色調：外・内面は灰白色（7.5Y7/2）、断面は灰白色（N8/）。胎土：密。１mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。Ｃ期の12世紀代のもの。（第15図－164、写真図版19－１－164）

165白磁　底径：5.2cm（復元）。器高：2.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.6cm。色調：外・内面は灰白色（7.5Y8/2）、断面は灰白色（7.5Y8/2）。胎土：密。１mm以下の黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。Ｃ期の12世紀代のもの。（第15図－165、写真図版19－１－165）

土製品

166土錘　幅：0.9cm。長さ：2.2cm。色調：灰白色（2.5Y8/1）。残存度：完形。古代のもの。（第15図－166、写真図版19－２－166）

167土錘　幅：3.0cm（残存）。長さ：2.9cm（残存）。色調：外・内・断面は灰白色（10YR8/2）。胎土：粗。２mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。（第15図－167、写真図版19－２－167）

埴輪

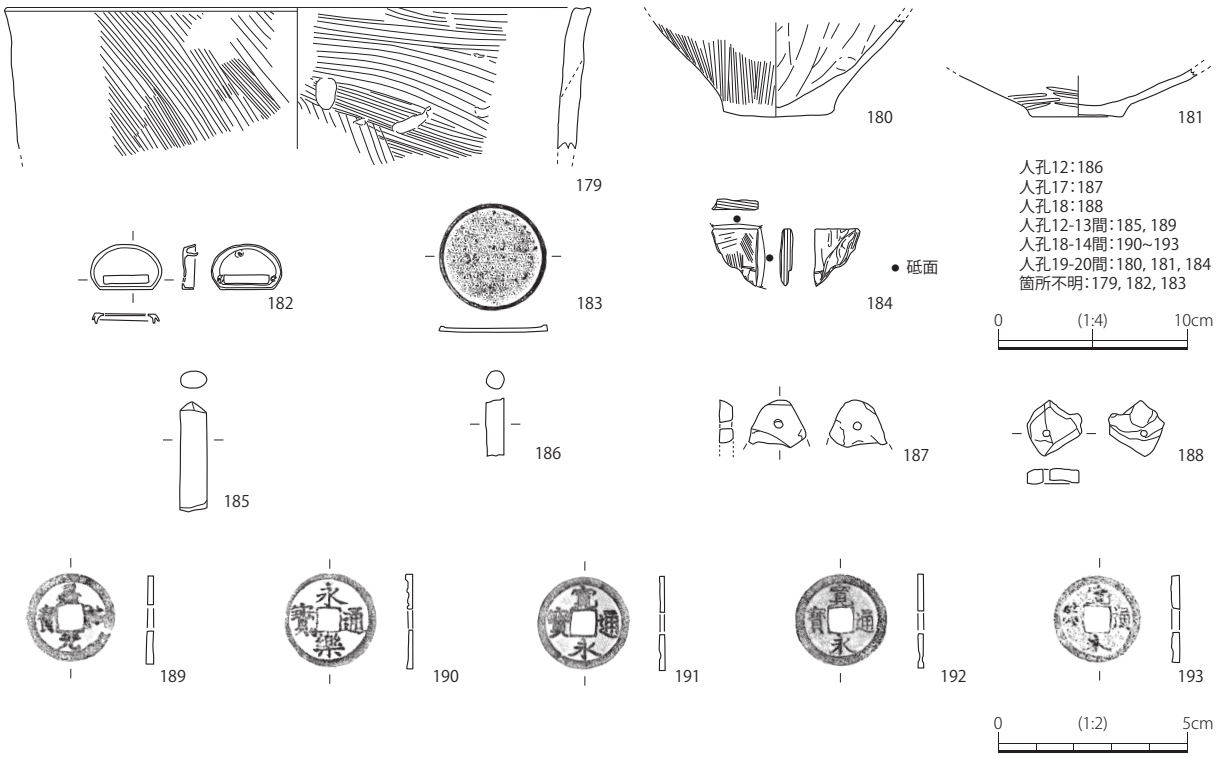
168円筒埴輪　幅：5.4cm（残存）。器高：4.8cm（残存）。厚さ：1.0～1.4cm。色調：外・内面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、断面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）。胎土：やや粗。２mm以下の白・灰・赤色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面はヨコハケ調整、内面はタテハケ調整が施されている。突帯に接するように透孔が配置される。（第15図－168、写真図版19－１－168）

169円筒埴輪　幅：5.7cm（残存）。器高：5.3cm（残存）。厚さ：0.9～1.0cm。色調：外・内面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、断面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）。胎土：やや粗。２mm以下の白・灰・赤色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面はヨコハケ調整、内面はタテハケ調整が施されている。（第15図－169、写真図版19－１－169）

170円筒埴輪　幅：6.5cm（残存）。器高：7.3cm（残存）。厚さ：1.2cm。色調：外・内面はにぶい橙色（10YR 7/3）、断面は灰白色（7.5Y7/1）。胎土：やや密。５mm以下の白・茶色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。底部片。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ・ユビオサエ調整が施されている。（第15図－170、写真図版19－１－170）

171円筒埴輪　幅：7.4cm（残存）。器高：7.1cm（残存）。厚さ：1.2cm。色調：外・内面はにぶい橙色（10YR 7/3）、断面は灰白色（7.5YR7/1）。胎土：やや密。４mm以下の白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ調整が施されている。（第15図－171、

写真図版19－１－171）
瓦
172平瓦　横幅:9.3cm（残存）。縦幅:9.5cm。色調:外面は灰白色（5Y7/1)、内･断面は灰白色（N7/)。胎土：粗。３mm以下の白・黒・灰・赤色砂粒を含む。焼成：良好。古代のもの。（第15図－172、写真図版19－１－172）
石製品
173滑石製紡錘車　上径:2.3cm。下径:3.9cm。孔径:0.8cm。器高:1.1cm。色調:オリーブ灰色（10Y 4/2)。残存度：完形。古墳時代のもの。（第15図－173、写真図版19－２－173）
174滑石製紡錘車　下径：3.7cm。孔径：0.7cm。器高：1.6cm。色調：緑灰色（10GY 6/1)。残存度：上部破損。古墳時代のもの。（第15図－174、写真図版19－２－174）
175石鏃　幅：1.7cm。器高：1.9cm。縄文時代の凹基式。（第15図－175、写真図版19－２－175）
金属製品
176煙管吸口　幅：0.4～0.6cm。長さ：2.4cm（残存)。厚さ：0.1cm。青銅製。江戸期のもの。（第15図－176・写真図版19－２－176）
177皇宋通宝　直径：2.5cm（復元)。厚さ：0.1cm。残存度：1/2。1039年初鋳の北宋銭。（第15図－177、写真図版19－２－177）
178□□神宝　直径：1.9cm（復元)。厚さ：0.2cm。残存度：1/2。直径と銭質から皇朝十二銭の饒益神宝（859年初鋳）である可能性が極めて高い。（第15図－178、写真図版19－２－178）
これらに加え、土玉３点、土製算盤玉１点、滑石製有孔円盤２点、滑石製臼玉176点、ガラス小玉９点（青２・黒２・桃１・水４）が出土した。（巻頭写真図版２－２）
本体工区（202工区）
埴輪
179円筒埴輪（口縁部）　口縁部径:31.0cm（復元)。器高:7.5cm（残存)。厚さ:0.9～1.0cm。色調:外・内・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/6)。胎土：粗。６mm以下の白・灰色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁外内面はヨコナデ調整、外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整が施されている。出土地点不明。（第16図－179、写真図版20－１－179）
弥生土器
180甕　底径：5.9cm。器高：5.1cm（残存)。厚さ：0.4～1.6cm。色調：外面は浅黄橙色（10YR 8/4)、内面は灰白色（5Y8/1)、断面は黒褐色（2.5Y3/1)。胎土：やや粗。３mm以下の白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。人孔19-20間出土。（第16図－180、写真図版20－１－180）
181壺　底径：4.8cm。器高：2.2cm（残存)。厚さ：0.3～0.9cm。色調：外・内・断面はにぶい黄橙色（10YR 6/3)。胎土：やや密。４mm以下の白色砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。第Ⅳ様式。人孔19-20間出土。（第16図－181、写真図版20－１－181）
石製品
184砥石　横幅：2.4cm。縦幅：3.0cm。厚さ：0.7cm。砥面４面。人孔19-20間出土。（第16図－184、写真図版20－１－184）
185不明石製品　横幅：0.5～0.7cm。縦幅：2.9cm。滑石製。円柱状で先端部が若干尖る。管玉などの未成品の可能性がある。人孔12-13間出土。（第16図－185、写真図版20－１－185）
186管玉未成品　横幅：0.5cm。縦幅：1.5cm。滑石製。穿孔前のもの。人孔No.12出土。（第16図－186、写真図版20－１－186）
187剣形石製品　横幅：1.5cm（残存)。縦幅：1.2cm（残存)。厚さ：0.4cm。滑石製。基部のみの破片。人孔No.17出土。（第16図－187、写真図版20－１－187）
188滑石製有孔円盤　横幅：1.4cm（残存)。縦幅：1.5cm（残存)。厚さ：0.4cm。滑石製。剣形石製品の一部である可能性がある。人孔No.18出土。（第16図－188、写真図版20－１－188）
金属製品
182青銅製銙帯(丸鞆)　横幅：3.7cm。縦幅：2.4cm。器高：0.8cm（最大)。厚さ：0.1cm。出土地点不明。（第16図－182、写真図版20－１－182）



第16図　出土遺物（ＮＮ1989－１　本体工区）

183銅鏡　直径：5.7～5.8cm。厚さ：0.2cm。残存度：完形。江戸時代の懐中鏡とみられる。出土地点不明。（第16図－183、写真図版20－１－183）

189景祐元宝　直径：2.4cm。厚さ：0.1cm。残存度：完形。人孔12-13間出土。1034年初鋳の北宋銭。（第16図－189、写真図版20－１－189）

190永楽通宝　直径:2.6cm。厚さ:0.2cm。残存度:完形。人孔18-14間出土。1411年初鋳の明銭。（第16図－190、写真図版20－１－190）

191寛永通宝　直径：2.5cm。厚さ：0.1cm。残存度：完形。人孔18-14間出土。江戸時代。（第16図－191、写真図版20－１－191）

192寛永通宝　直径：2.5cm。厚さ：0.1cm。残存度：完形。人孔18-14間出土。江戸時代。（第16図－192、写真図版20－１－192）

193寛永通宝　直径：2.3cm。厚さ：0.2cm。残存度：完形。人孔18-14間出土。江戸時代。（第16図－193、写真図版20－１－193）

これらに加え、各地点から下記の資料が出土した。（巻頭写真図版２－２）

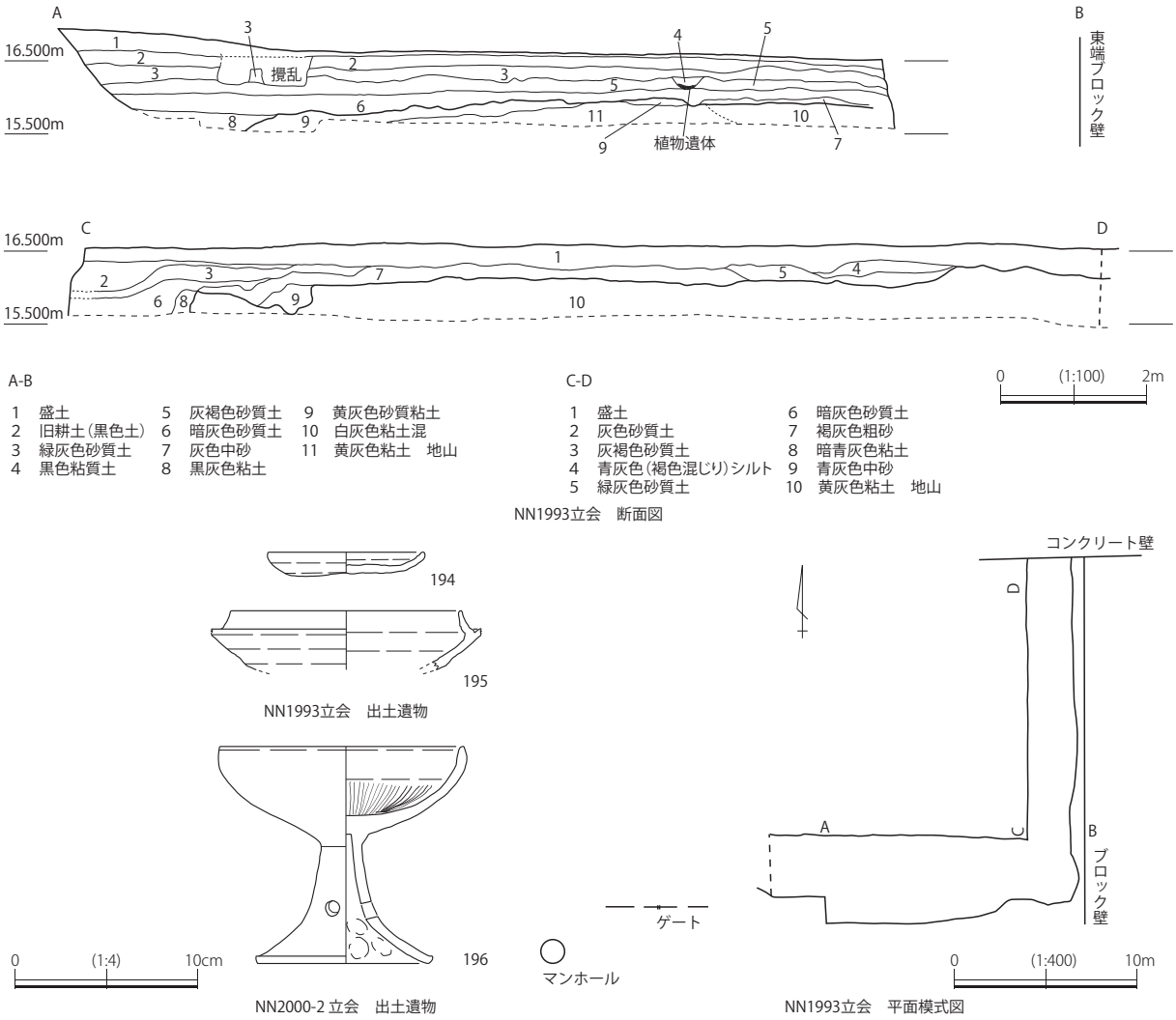
・人孔No.3：滑石製臼玉２点、ガラス小玉（黒）１点。
・人孔No.12：滑石製臼玉１点、ガラス小玉５点（黒３・桃１・不明１）。
・人孔No.14：滑石製臼玉３点。
・人孔No.17：滑石製臼玉６点、ガラス小玉（黒）１点。
・人孔No.18：滑石製臼玉11点、土玉１点、ガラス小玉（紺）１点。
・人孔2-3間：滑石製臼玉２点、土製円盤１点、ガラス小玉（色調不明）２点。
・人孔12-13間：滑石製臼玉３点、ガラス小玉６点（黒３・青１・不明２）。
・人孔16-17間：滑石製臼玉９点。
・人孔17-18間：滑石製臼玉８点、ガラス小玉４点（黒２・青１・不明１）。
・人孔18-14間：滑石製臼玉125点、同未成品１点、滑石製有孔円盤１点、滑石製勾玉１点、同未成品１点、滑石製管玉１点、滑石製角柱状製品１点、ガラス小玉61点（黒29・青５・赤２・桃５・水１・緑１・黄緑１・不明17)、石製丸玉１点、土玉１点、和釘２点。

・人孔19-20間：滑石製臼玉６点。
・地点不明：ガラス小玉（水）２点。

このように、この調査では水洗選別により、古墳時代に属する多くの玉類が出土した。調査全体での古墳時代玉類等出土総計は、滑石製臼玉603点、同未成品１点、滑石製勾玉２点、同未成品１点、滑石製管玉１点、同未成品１点、滑石製有孔円盤４点、滑石製紡錘車３点、剣形石製品１点、円柱状石製品１点、角柱状石製品１点、チャート製臼玉１点、石製丸玉１点、石製垂飾１点、ガラス小玉93点、土玉11点、土製切子玉１点、土製算盤玉１点、土製有孔円盤１点、土製紡錘車１点で、合計730点であった。

なお、上記ガラス小玉の色調表記は一次整理時の選別に従ったが、「黒色」とされたものは、実際は濃紺色の可能性がある。

（村上・實盛・古谷）



第17図　調査地区平面模式図・断面図・出土遺物（ＮＮ1993立会・ＮＮ2000－２）

第２節　1993年度立会調査

１．調査の経過

平成５年度の立会調査については、四條畷市中野本町677－１において幼稚園園舎建て替えが計画され、平成５（1993）年５月24日に学校法人山本栄学園から四條畷市教育委員会を経由し文化庁長官へ文化財保護法第57条の２第１項（当時）の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。指導内容は発掘調査が必要との通知があった。

確認調査の結果、建物部分では埋蔵文化財への影響が及ばないため、隣接宅地との境の擁壁建設箇所の工事立会のみ行うこととした。同年８月31日に擁壁建設箇所の立会調査を行った結果、土師器皿（第17図－194）、須恵器坏身（第17図－195）などが出土した。断面観察で遺構状の窪みを確認したため、断面図の作成を行った。

（實盛）

２．出土遺物

194土師器皿　口径：8.6㎝。器高：1.3㎝。厚さ：0.3～0.5㎝。色調：外・内面は灰白色（10YR8/2）、断面は黄灰色（2.5Y5/1）。胎土：密。１㎜以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：3/5。（第17図－

194、写真図版20－２－194）

195須恵器坏身　口径：12.6cm（復元）。器高：3.2cm（残存）。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内・断面は明青灰色（5PB 7/1）。胎土：密。１mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。TK43型式（Ⅱ型式４段階）である。（第17図－195、写真図版20－２－195）

（古谷）

第３節　2000-2立会調査

１．調査の経過

平成12年度の立会調査については、四條畷市中野本町279－１において共同住宅建設が計画され、平成12（2000）年１月12日に谷口仁から四條畷市教育委員会を経由し文化庁長官へ文化財保護法第57条の２第１項（当時）の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。指導内容は発掘調査が必要との通知があった。

同年３月７日に確認調査を行うこととなったが、実際に現地で再度協議した結果建物部分は盛土がなされ埋蔵文化財への影響が及ばないことが判明したため、擁壁建設箇所の工事立会のみ行うこととした。同年７月18日に擁壁建設箇所の立会調査を行った結果、土師器高坏（第17図－196）などが出土したが、明確な遺構の検出はなかった。

（實盛）

２．出土遺物

196土師器高坏　口径：13.3cm。底径：9.7cm。器高：11.9cm。厚さ：0.5～1.0cm。色調：外・内・断面は橙色（2.5YR 7/8）。胎土：やや粗。５mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。外面ナデ調整。坏部内面に暗文が施される。脚部内面はユビオサエ調整である。円形透孔。古墳時代中期のもので、須恵器編年のTK216型式期併行とみられる。（第17図－196、写真図版20－２－196）

（古谷）

第５章　調査のまとめ

第１節　調査のまとめ

今回報告した中野遺跡の調査では、遺跡北西部の状況を確認することができ、弥生時代から近世にわたる多くの成果があった。以下、遺構・遺物の時期ごとにまとめを行っていきたい。

古墳時代　2000-2次立会調査ではこの時期のほぼ完形の高坏が出土した。付近では未確認である古墳時代の遺構が周辺に存在している可能性があり、重要な資料といえるだろう。

また、1989-1次立会調査ではこの時期の遺構を確認した。立坑１では遺構群を確認し、北側の10次調査地（松岡1987）からの遺構の広がりを捉えることができた。立坑２もこの時期を中心とした大溝であった。立坑４で検出した北東から南西への大溝は南側の肩のみを検出したが、標高や検出状況からみると、2013-2次調査地で検出した落込17および土坑11と一連のものである可能性があり、その場合幅40mほどとみられる。各調査状況から、この大溝は古墳時代に機能したもので、中世段階に完全に埋没して耕作地として利用されるようになったとみられる。1989-1次立会調査で多量の玉類が出土しており、遺構の特殊性が観取される。また、周辺調査では調査地から東北東に300mの位置の奈良井遺跡で古墳時代に機能した東西方向の幅26mの大溝を検出しており（村上・實盛2013a）、そこから谷状の地形が2013-2次調査地まで続くため、これらはすべて一連のものである可能性がある。相当な幅かつ長大な溝の可能性があり、周辺に所在した馬飼い集落における、重要な意義を持つ区画溝の存在を考えたい。

飛鳥時代～平安時代　2013-2次調査で検出した井戸１は主にこの時期に機能したものであった。方形の外枠と円形の内枠の二重構造で、「常□」墨書土器が出土しており、外枠土居桁材が年輪年代測定で708年＋α（辺材型）の測定値が出た。外枠の裏込め土からは７世紀後葉の、内枠の裏込め土から８世紀末～９世紀初頭の土器が出土しており、外枠は飛鳥時代末～奈良時代初頭ごろに構築され、何らかの理由で内枠が平安時代初頭に追加され、その後中世段階に廃絶したことが判明した。もともと方形板枠井戸として作られたものを、平安時代前期に円形枠井戸として修築を行い、最終的に中世段階に廃絶したとみられる。長期にわたり使用された井戸の存在は、この土地の特異性を示している可能性がある。

加えて、1989-1次立会調査では、青銅製銙帯(丸鞆)や皇朝十二銭の饒益神寶が出土した。周辺の調査では、1991年度1次の市役所東別館建設に伴う調査で、青銅製銙帯(巡方) や皇朝十二銭の長年大寶が出土している(村上・實盛2019)。特に青銅製銙帯などの出土からは、付近に官衙等重要施設の存在が想定される（次章参照）。いずれにしても、近接した位置で、帯に用いられる銙帯の巡方と丸鞆がともに出土し、二種の皇朝十二銭がみつかっていることは、遺跡の重要性を際立たせる資料ということができるだろう。

鎌倉時代～室町時代　2013-2次調査で検出した遺構の多くはこの時期のものであった。特に溝３は調査面積に比して多量の遺物が出土しており、活発な人間活動の痕跡が覗える。同時期の井戸４を隣接して検出しており、周辺に同時期の集落が存在している可能性が高い。周囲で調査を行なう際に、十分検討しておくべき資料を得ることができたといえるだろう。

江戸時代　江戸時代には、遺跡一帯は農村景観と化し、2013-2次調査地西半には住宅が建設された。この段階の遺物が1989-1次立会調査でもいくつか出土しており、人間活動の状況をうかがい知ることができた。

このように、今回の調査では、遺跡北西部の状況を確認し、古墳時代から江戸時代まで長期にわたって土地利用が行われ続けていることを確認することができた。今後も調査を継続することで、各時代の詳細な土地利用状況をさらに明らかにしていきたい。

（實盛）

第６章　讃良郡衙と持統天皇
―中野遺跡の官衙関連遺構から―

１．はじめに

四條畷市中野遺跡の調査では、これまでの調査で平安期を中心とした重要な成果があり、讃良郡の郡衙所在地の想定も可能な資料がみつかっている。「讃良郡」は現在の寝屋川市の一部、四條畷市西部、大東市の東部大半にあたる地域で、690年に即位した第41代天皇である持統天皇とかかわりが深く歴史上重要といえる。その郡衙の所在地を探ることから、持統天皇の生い立ちについても深く知ることができる可能性がある。

２．讃良という土地

これまでの発掘調査による成果や文献の記述からみると、讃良地域（のちの讃良郡域：寝屋川市の一部、四條畷市西部、大東市東部大半）では古墳時代に、馬飼いが盛んに行なわれていた（野島1984）。

この馬飼いに従事していた豪族について、『日本書紀』には、天武天皇12（683）年10月５日の条に、「娑羅羅馬飼造・菟野馬飼造に連の姓を賜る」という記述がある。

これらの氏族の出自については、以下の記述がある。

・『日本書紀』　欽明天皇23(562)年７月１日条

秋七月己巳朔、新羅遣使獻調賦。其使人、知新羅滅任那、恥背國恩、不敢請罷。遂留、不歸本土。例同國家百姓、今河内國更荒郡鸕鷀野邑新羅人之先也。

（新羅の使者が帰国せず日本に住みつき、河内国更荒郡鸕鷀野邑の新羅人の先祖になった。）

・『新撰姓氏録』　河内国諸蕃の項

佐良々連　　出自百済国人久米都彦也

宇努造　　出自百済国人弥那子富意弥之後也

（これを須那子富意弥と読んで宇努と四條畷市砂を結び付ける説があるが、引用された翻刻に起因する誤りとみられる。）

・『新撰姓氏録』　河内国未定雑姓の項

宇努連　　出自新羅皇子金庭興之後也

このように、娑羅羅（佐良々）氏・菟野（宇努）氏ともに、百済や新羅からの渡来系の氏族であるとの記述がある。このことを裏付けるように、四條畷市域の古墳時代の遺跡からは、朝鮮半島とのかかわりを示す陶質土器や韓式系土器などが多く出土する。これら渡来系の人びとは、馬飼いの技術をもたらして四條畷付近に住みつき、豪族化したのであろう。

３．讃良地域と持統天皇

次に、讃良地域と持統天皇との関係を考えたい。天皇は幼名を鸕野讃良皇女という。このうち「讃良」は、古代「讃良郡」の地名からとられている。また、「鸕野」は、先述のとおり『日本書紀』に更荒郡（讃良郡）の「鸕鷀野邑」が記録されている。この地名は「菟野馬飼造」と共通し、彼らはこの地域が本貫地の可能性がある。

古代讃良郡にあった郷名として、『和名類聚抄』高山寺本には、山家、甲可、牧岡、高宮、石井の五つが記されている。このうち山家は現大東市域、高宮は現寝屋川市域で、石井は不詳だが順序から寝屋川市域とされ（『和名抄』の郷名配列順が地理地勢順であることはこれまでに幾度も指摘されている（栄原2001））、残りの甲可、牧岡が現四條畷市域である。牧岡は他の写本や版本では枚岡と表記されるが、現東大阪市域の枚岡と混同されたとみられ、古写本である高山寺本の「牧岡」を正とすべきと考える。

従来、「鸕鷀野邑」は、菟野氏が馬飼い氏族であることなどから、馬飼いの牧があったことによる

郷名とみられる「牧岡郷」(『和名類聚抄』高山寺本）と同一視されてきた。しかし、牧岡郷の別称としてはほかに「馬甘里」(『日本霊異記』中巻）がある。この「馬甘里」は、讃良郡内で行われた馬飼いに関連する名称とみられ、名称の付し方が牧岡郷と共通する。牧岡郷は、「岡」が共通する丘陵地である四條畷市岡山を中心とした地域（四條畷市砂、岡山、寝屋川市小路）に比定できる（山口1972)。この地にはのちに郡名寺院讃良寺がおかれており、むしろ娑羅羅馬飼造の本貫地であったと考えられる。鸕鷀野邑を牧岡郷に比定する根拠とされてきた「拠持統帝御名、鸕野与讃良、同一地」の文言は江戸期のものとされる上に出典が不明確なことに加え、その内容は「持統天皇の御名から鸕野と讃良は同一地とみなす」ことを述べているのみで、論拠とすること自体が困難である。このことから、「鸕鷀野邑」はこれ以外の高宮郷、石井郷、甲可郷、山家郷のいずれかにあった可能性が考えられる。

この鸕鷀野の地名は河内湖が低湿地であった際に水鳥が多く生息していた付近の景観によるものとみられ（瀬川1975)、丘陵景観による地名とみられる牧岡郷よりむしろ、湖畔の低湿地であった可能性のある甲可郷、山家郷を候補とすべきと考える。その中で、甲可郷内の白鳳寺院正法寺は後に山号「小野山」と号しており、母音の変換で鸕鷀野と通じるという指摘がある（瀬川1975)。これらのことから、「鸕野」はおおよそ現在の四條畷市南野・中野・清滝などの付近を中心とした甲可郷域を指すのではないかと考えられる。発掘調査の進展により牧岡郷域だけでなく甲可郷域（四條畷市中野、清滝、南野など）でも馬飼いが盛んであったことが明らかとなってきており、「鸕鷀野邑」は甲可郷に比定でき、菟野氏は同郷域を基盤としていたと考える。

このように地名を皇族の名に使う場合、その地で生まれ育ったか、領地をもっていたか、その地出身の豪族から乳母が出たためその豪族に養育されたといった理由が考えられるという（直木1960)。先述のとおり讃良地域では馬飼いを行なった渡来系の豪族である娑羅羅氏や菟野氏の存在が記録されており、これらの豪族の名も、持統天皇の名と共通している。天皇は、これらの豪族に養育された、あるいは乳母がこれらの豪族の出身だったといった理由で讃良地域にゆかりが深かったため、その地名を名に持った可能性がある。持統天皇は、その幼名から、讃良地域とゆかりの深い天皇だったと言えるだろう。

４．中野遺跡の官衙関連遺構・遺物

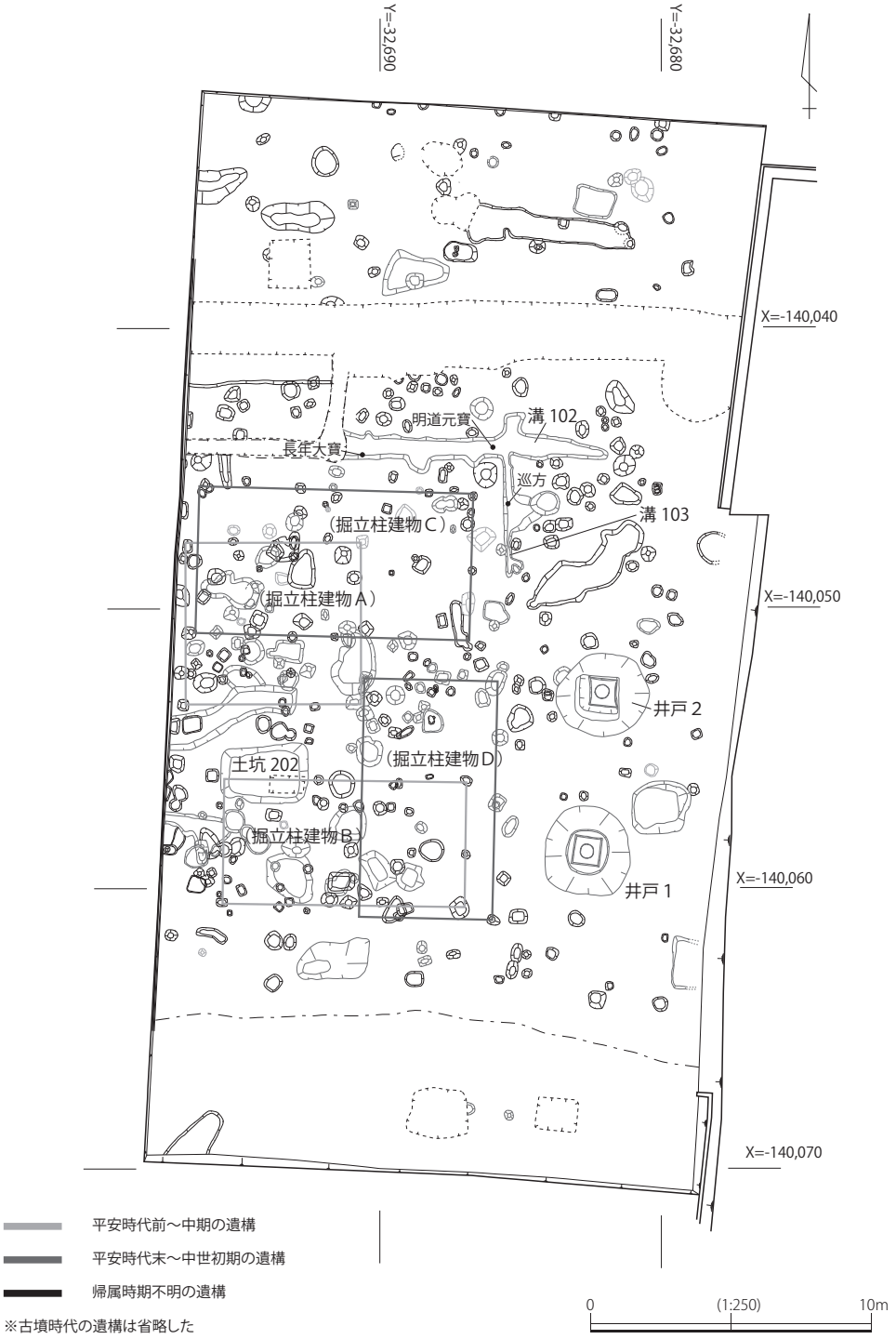
このように日本歴史上重要な地である讃良郡の郡衙跡について、所在地を探るうえで役立つ可能性があるのが、中野遺跡の調査成果である。

中野遺跡は、四條畷市中野本町から中野二丁目にかけて広がる遺跡で、弥生時代（約2500～1850年前)、古墳時代（約1850～1400年前)、平安時代（約1200～800年前）と中世（鎌倉時代～室町時代・約800～400年前）の集落跡である。官衙に関連する可能性がある遺構は平成３年（1991）11月から翌年１月にかけて、四條畷市役所の東別館建設に伴い行った発掘調査で検出した（村上・實盛2019)。

この調査で最も多くみつかった遺構は平安時代後期～鎌倉時代前期のものであった。官衙関連の遺構としては、青銅製銙帯 (巡方)が出土した溝103、皇朝十二銭の長年大寶や宋銭の明道元寶などが出土した溝102があげられ、これらは東西および南北方向のほぼ正方位をとる。

報告時には検討できなかったが、この調査では一次整理時に各遺構の帰属時期を細かく検討しており、その資料を用いながら再検討した結果、溝102の南、溝103の西の区画に４棟の掘立柱建物を検出していたことがわかった。いずれも正方位を取り、柱穴の帰属時期などから平安時代前～中期の掘立柱建物Ａ・Ｂと、平安時代後～鎌倉時代前期の掘立柱建物Ｃ・Ｄの２段階にわけられる。溝102、103で出土した遺物は両時期にまたがっており、両溝は継続して存続していたとみられる。一方、溝102に区画された北側では遺構の検出数が南側より著しく少なくなっている。すなわち、これらの掘立柱建物はいずれも溝102、103によって区画された土地に建てられたと考えられる。建物の配置からは官衙などの中心施設そのものを検出したというよりは、付属施設である蓋然性が高いが、巡方や皇朝十二銭などの出土から考えると、至近に官衙などの中心施設が存在した可能性は十分にある。

他の特筆すべき遺構は井戸２で、應保二年の墨書がある曲物井戸枠や青白磁合子蓋などを含む多くの遺物が出土した。特に墨書曲物は、年代が分かる資料として貴重なものであり、平成25年度に四條



第18図　中野遺跡（ＮＮ1991－１）の官衙関連遺構

畷市指定有形文化財に指定された。應保二年は1162年にあたり、平安時代末の年代の定点となる資料と言える。

周辺の調査でも、1989年度の公共下水道工事に伴う調査で、青銅製銙帯(丸鞆)が出土している（今回報告）。また、同一調査で皇朝十二銭の饒益神寶も出土している。近接した位置で、帯に用いられる銙帯の巡方と丸鞆がともに出土し、二種の皇朝十二銭がみつかっていることは、遺跡の重要性を際立たせる資料ということができるだろう。

加えて、2013-2次調査（今回報告）では、飛鳥時代末～奈良時代初頭に築造され、修築を経て中世まで継続して機能した井戸の存在が判明した。もともと方形板枠井戸として作られたものを、平安時代前期に円形枠井戸として修築を行い、最終的に中世段階に廃絶したとみられる。長期にわたり使用された井戸の存在は、この土地の特異性を示している可能性がある。

５．讃良郡衙所在地を探る

このように、中野遺跡では正方位をとる二時期の掘立柱建物群や、その建物を区画する正方位の溝を検出し、銙帯や皇朝十二銭、墨書遺物の出土があることから、官衙など重要施設の存在が想定できる。これまで讃良郡の郡衙所在地を市内の岡山南遺跡に求める説があったが（藤澤1977）、中野遺跡を讃良郡の郡衙所在候補地として挙げることができる可能性があるだろう。

中野遺跡は、讃良郡のうち甲可郷域に属し、同じ一帯には古墳時代後期に墳長約70mと同時期の北・中河内随一の規模で、この地域にあって馬飼いを主導した盟主墳といえる墓ノ堂古墳が築造されている。もともと盟主が存在した有力な地に郡衙が建設された蓋然性は考慮する価値があるといえるだろう。

持統天皇は、そのような馬飼い氏族の後裔とみられる娑羅羅氏や菟野氏とかかわりがあり、讃良地域にゆかりの深い天皇であった。『日本書紀』によれば、持統天皇八年（694）６月８日、更荒郡（讃良郡）から白いヤマドリが献上されている。その年の12月６日には藤原京へ遷都されており、このことは遷都に向けた吉兆として捉えられ、郡の官吏及び捕獲者には褒美として位や品物が与えられている。その舞台が天皇の出自と関わりがある地であることも、単なる偶然ではない可能性があるかもしれない。

今後も市内において調査を継続することで、讃良郡衙所在地の検討材料を充実させていきたい。

（實盛）

付記

この章は、令和２年２月23日に大阪府立近つ飛鳥博物館で開催予定であったが感染症拡大により中止となった令和元年度冬季企画展『歴史発掘おおさか2019』調査成果報告会における発表予定原稿「中野遺跡の発掘調査―讃良郡衙を考える―」を基に改稿したものである。

主要参考文献

宇治谷孟1988『日本書紀　全現代語訳』下、講談社。
宇治谷孟1992『続日本紀　全現代語訳』上、講談社。
栄原永遠男2001「河内国石川郡における郷の配置」『新堂廃寺』大阪府教育委員会。
四條畷市教育委員会編2006『こども歴史　わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市教育委員会編2010『歴史とみどりのまち　ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市史編さん委員会編2016『四條畷市史』第５巻考古編、四條畷市。
實盛良彦2018「持統天皇と四條畷」『四條畷市文化財調査年報』第５号、四條畷市教育委員会。
瀬川芳則1975『清滝の古寺正法寺と氏寺の造営』四條畷市文化財シリーズ３、四條畷市教育委員会。
瀧音能之監修2016『古代史再検証　持統天皇とは何か』別冊宝島2490号、宝島社。
遠山美都男2010『天智と持統』講談社。
直木孝次郎1960『持統天皇』吉川弘文館。
塙保己一編1894「新撰姓氏録」『群書類聚』第17輯、経済雑誌社。
平尾兵吾1931『北河内郡史蹟史話』（1973年増補再刊）。
藤澤一夫1977「河内国讃良郡々衙跡即四條畷市岡山南遺跡説」『大阪文化誌』第３巻第１号、財団法人大阪文化財センター。
村上　始2003「大阪・中野遺跡」『木簡研究』第25号、木簡学会。
村上　始・實盛良彦2019『四條畷市文化財調査年報』第６号、中野遺跡２、四條畷市教育委員会。

参考文献

青木　修2002「猿投窯の片口鉢について－片口鉢生産と編年に関する覚書―」『愛知県史研究』第６号。
後川恵太郎・實盛良彦・井上智博編2015『讃良郡条里遺跡』四條畷市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター。
阿部幸一1999『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅳ、大阪府教育委員会。
井上智博・多賀晴司編2003『讃良郡条里遺跡』その２、財団法人大阪府文化財センター。
井上智博編2008『讃良郡条里遺跡』Ⅵ、財団法人大阪府文化財センター。
岩瀬　透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明編2010『蔀屋北遺跡』Ⅰ、大阪府教育委員会。
岩瀬　透編2012『蔀屋北遺跡』Ⅱ、大阪府教育委員会。
梅原末治1937「河内四條畷村忍岡古墳」『日本古文化研究所報告』第４、日本古文化研究所。
梅原末治1985『銅鐸の研究』木耳社。
大阪府教育委員会編1970『四条畷町、正法寺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会。
片山長三1967a「枚方台地の先土器時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
片山長三1967b「縄文時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。。
鐘方正樹2003b『井戸の考古学』同成社。
川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号、日本考古学会。
黒田　淳1989「飯盛山城跡の調査」『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』1988年度、大東市教育委員会。
黒田　淳2013『飯盛山城遺跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
古代の土器研究会編1992『都城の土器集成』古代の土器研究会。
古代の土器研究会編1993『都城の土器集成』Ⅱ、古代の土器研究会。
近藤章子・山本雅和・多賀晴司編2006『讃良郡条里遺跡』Ⅳ、財団法人大阪府文化財センター。
佐伯博光・六辻彩香編2007『讃良郡条里遺跡』Ⅴ、財団法人大阪府文化財センター。
櫻井敬夫1972「考古学」『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。
櫻井敬夫1977『畷の歴史・畷の文化財』四條畷市・四條畷市教育委員会。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔2006『こども歴史　わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔2010『歴史とみどりのまち　ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市教育委員会編2002『みどりの風と古墳』第17回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市教育委員会編2004『馬と生きる』開館20周年記念特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市教育委員会編2008『ひとつぶの籾』第23回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市史編さん委員会編2016『四條畷市史』第５巻考古編、四條畷市。
四條畷市立歴史民俗資料館編1990『はるかなる日々―四條畷の史跡・文化財―』四條畷市・四條畷市教育委員会。
瀬川芳則1992「最古の木製下駄」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ、同刊行会。
大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2013『飯盛城跡縄張測量図』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店。
中世土器研究会編1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社。
辻本　武1987『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
寺沢　薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、木耳社。
中尾智行・山根　航編2009『讃良郡条里遺跡』Ⅷ、財団法人大阪府文化財センター。
中村　浩2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
西尾　宏1987『中野遺跡発掘調査概要』Ⅳ、四條畷市教育委員会。
西尾　宏1988『中野遺跡発掘調査概要』Ⅴ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1977「四條畷市中野遺跡」『まんだ』第２号、まんだ編集部。
野島　稔1978a『中野遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1978b「南山下遺跡」『まんだ』第５号、まんだ編集部。
野島　稔1978c「大阪府四條畷市発見の製塩土器」『古代学研究』第86号、古代学研究会。
野島　稔1979a「岡山南遺跡出土の古代下駄」『まんだ』第８号、まんだ編集部。
野島　稔1979b「大阪府下における製塩土器出土遺跡」『ヒストリア』第82号、大阪歴史学会。
野島　稔1980a『清滝古墳群発掘調査概要』四條畷市文化財研究調査会。
野島　稔1980b「四條畷市奈良井遺跡（２）」『まんだ』第９号、まんだ編集部。
野島　稔1980c「四條畷市奈良田遺跡」『まんだ』第９号、まんだ編集部。
野島　稔1981『更良岡山古墳群発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔1982『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅱ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1983『忍ケ丘駅前遺跡発掘調査概要』Ⅱ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1984a『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1984b「河内の馬飼」『万葉集の考古学』筑摩書房。
野島　稔1985「四條畷市南野米崎遺跡」『まんだ』第24号、まんだ編集部。
野島　稔1986a『四條畷市埋蔵文化財発掘調査概要―1985年度―』四條畷市教育委員会。
野島　稔1986b『中野遺跡発掘調査概要』Ⅲ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1987a『雁屋遺跡』四條畷市教育委員会。
野島　稔1987b『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅳ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1987c「四條畷市、南山下遺跡出土の馬形埴輪」『まんだ』第30号、まんだ編集部。
野島　稔1987d「四條畷市南山下遺跡」『まんだ』第30号、まんだ編集部。
野島　稔1987e「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』Ⅰ、韓式系土器研究会。
野島　稔1988「四條畷市“南山下遺跡”」『まんだ』第35号、まんだ編集部。
野島　稔1990「四條畷市・中野遺跡」『まんだ』第39号、まんだ編集部。
野島　稔1991「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』Ⅲ、韓式系土器研究会。

野島　稔1992「四條畷市・大上遺跡」『まんだ』第47号、まんだ編集部。
野島　稔1993a「四條畷市忍ケ丘駅前遺跡」『まんだ』第49号、まんだ編集部。
野島　稔1993b「四條畷市鎌田遺跡（一）」『まんだ』第50号、まんだ編集部。
野島　稔1994a『雁屋遺跡発掘調査概要－四條畷市江瀬美町所在－』四條畷市教育委員会。
野島　稔1994b「四條畷市鎌田遺跡（二）」『まんだ』第51号、まんだ編集部。
野島　稔1994c「四條畷市・四條畷小学校内遺跡」『まんだ』第53号、まんだ編集部。
野島　稔1995『南野遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔1996a「四條畷市坪井遺跡」『まんだ』第57号、まんだ編集部。
野島　稔1996b「鍛冶工房のある風景」『まんだ』第58号、まんだ編集部。
野島　稔1997a「五絃の琴」『まんだ』第60号、まんだ編集部。
野島　稔1997b「四條畷市更良岡山遺跡（一）」『まんだ』第62号、まんだ編集部。
野島　稔1997c『はにわはともだち』第12回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
野島　稔1999「四條畷市大上古墳群」『まんだ』第66号、まんだ編集部。
野島　稔編2000『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔2006『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔2008「王権を支えた馬」『牧の考古学』高志書院。
野島　稔2009「河内湖東岸における古墳と古代豪族の動向」『北河内の古墳』財団法人交野市文化財事業団。
野島　稔・藤原忠雄・花田照也1976『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔・藤原忠雄・花田照也1977『正法寺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔・前田　暢1984『岡山南遺跡・中野遺跡発掘調査概要』Ⅲ、四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始1999『正法寺跡・大上遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2000『奈良田遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2001『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2002『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始・實盛良彦2012『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
原田昌則・尾崎良史2014『考古資料からみる八尾の歴史』公益財団法人八尾市文化財調査研究会。
平尾兵吾1928「北河内郡」『大阪府史蹟名勝天然記念物』第三冊、大阪府学務部。
平尾兵吾1931『北河内郡史蹟史話』北河内郡教育会（1973年増補再刊）。
松岡良憲1987『中野遺跡発掘調査概報』四條畷市教育委員会。
宮崎泰史・藤永正明編2006『年代のものさし』大阪府立近つ飛鳥博物館。
宮野淳一1992『更良岡山遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
三好　玄・杉本厚典・野島　稔・深澤芳樹2007「弥生時代後期周溝状遺構に伴う土器群」『大阪歴史博物館研究紀要』第６号、財団法人大阪市文化財協会。
村上　始1997a『木間池北方遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
村上　始1997b『忍ケ丘駅前遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
村上　始2000『四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001a『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001b『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001c「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『月刊考古学ジャーナル』No.470、ニュー・サイエンス社。
村上　始2001d「四條畷市鎌田遺跡」『まんだ』第71号、まんだ編集部。
村上　始2001e「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『祭祀考古』第21号、祭祀考古学会。
村上　始2001f「四條畷市雁屋遺跡」『まんだ』第73号、まんだ編集部。
村上　始2003a『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2003b「大阪・中野遺跡」『木簡研究』第25号、木簡学会。
村上　始2004『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2006『一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦2011「雁屋遺跡の発掘調査」『近畿弥生の会第14回集会京都場所発表要旨集』近畿弥生の会。
村上　始・實盛良彦2013a『中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦2013b『北口遺跡・讃良郡条里遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦2014『四條畷市文化財調査年報』第１号、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦2016『四條畷市文化財調査年報』第３号、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦2018『四條畷市文化財調査年報』第５号、中野遺跡、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦2019『四條畷市文化財調査年報』第６号、中野遺跡２、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦・古谷真人2021『四條畷市文化財調査年報』第８号、中野遺跡３（墓ノ堂古墳）、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦編2013『飯盛山城跡測量調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦編2017『四條畷市文化財調査年報』第４号、大上遺跡（大上古墳群）、四條畷市教育委員会。
山口　博1968『四條畷町の歴史』。
山口　博編1972『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。
山口　博1990『四條畷市史』第４巻、四條畷市役所。
李　聖子編2020『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。

写 真 図 版 1

１．１地区近景（北西から・ＮＮ2013－２）

２．１地区南端壁面（北西から・ＮＮ2013－２）

写 真 図 版 2

1．１・２・４地区全景（北東から・ＮＮ2013－２）

2．２地区井戸４完掘状況（東から・ＮＮ2013－２）

写 真 図 版 3

１．３地区近景（西から・ＮＮ2013－２）

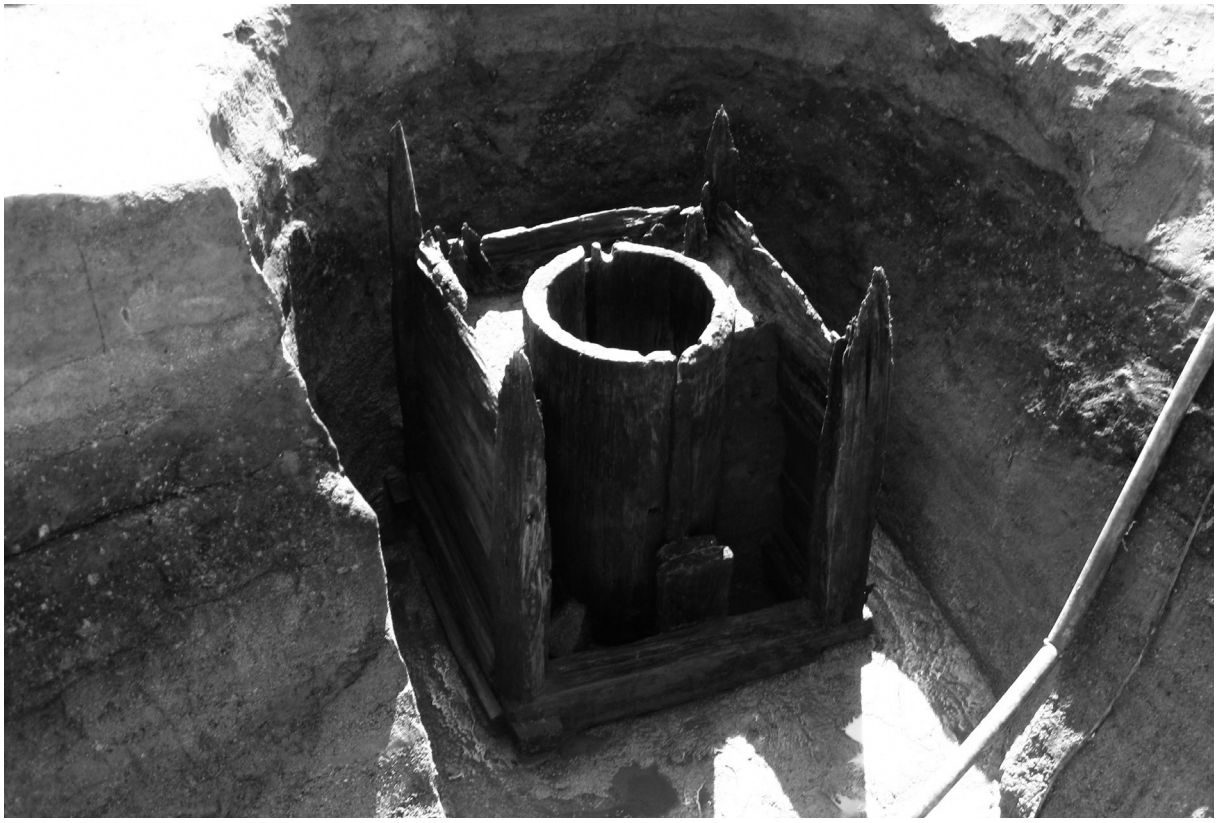
２．３地区井戸１上層半截状況（北から・ＮＮ2013－２）

写 真 図 版 4

１．３地区井戸１井戸枠検出状況（北から・ＮＮ2013－２）

２．３地区井戸１下層半截状況（北から・ＮＮ2013－２）

写 真 図 版 5



１．３地区井戸１方形板枠内半截状況（北から・ＮＮ2013－２）

２．３地区井戸１方形板枠除去状況（北から・ＮＮ2013－２）

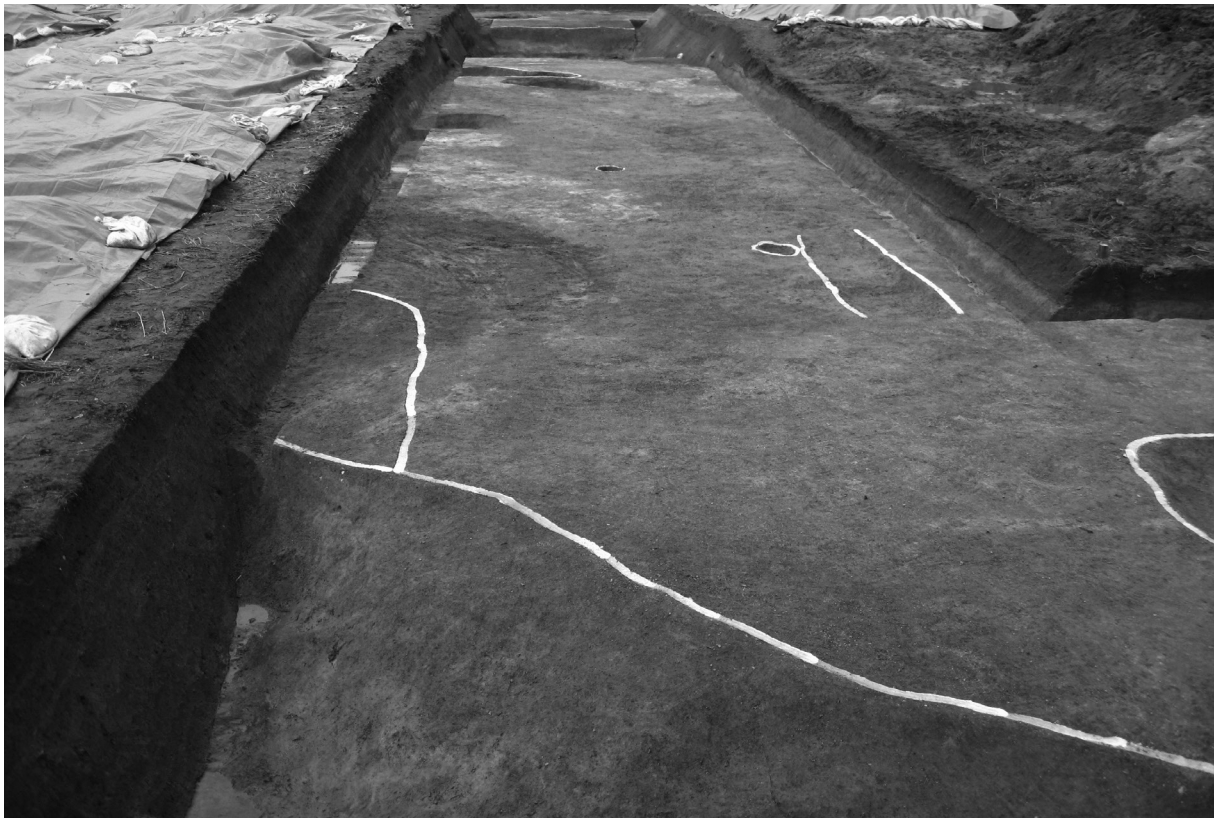
写 真 図 版 6

１．３地区井戸１井筒内曲物蓋出土状況（北から・ＮＮ2013－２）

２．３地区井戸１井桁検出状況（北から・ＮＮ2013－２）

写 真 図 版 7

１．３地区井戸１完掘状況（北から・ＮＮ2013－２）



２．５・６地区近景（東から・ＮＮ2013－２）

写 真 図 版 8

１． ５地区溝３近景（西から・ＮＮ2013－２）

２． ５地区溝３遺物出土状況（南から・ＮＮ2013－２）

写 真 図 版 9

1．立坑４調査状況（西から・ＮＮ1989－１）

2．立坑４遺構検出状況（北西から・ＮＮ1989－１）

写 真 図 版 10

1．立坑１遺構完掘状況（西から・ＮＮ1989－１）

2．調査地全景（南西から・ＮＮ2000－２）

写 真 図 版 11

1．ＮＮ2013－２　出土遺物（包含層・土坑・井戸４）

2．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１土器）

写 真 図 版 12

１．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１瓦）

２．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１井筒）

写 真 図 版 13

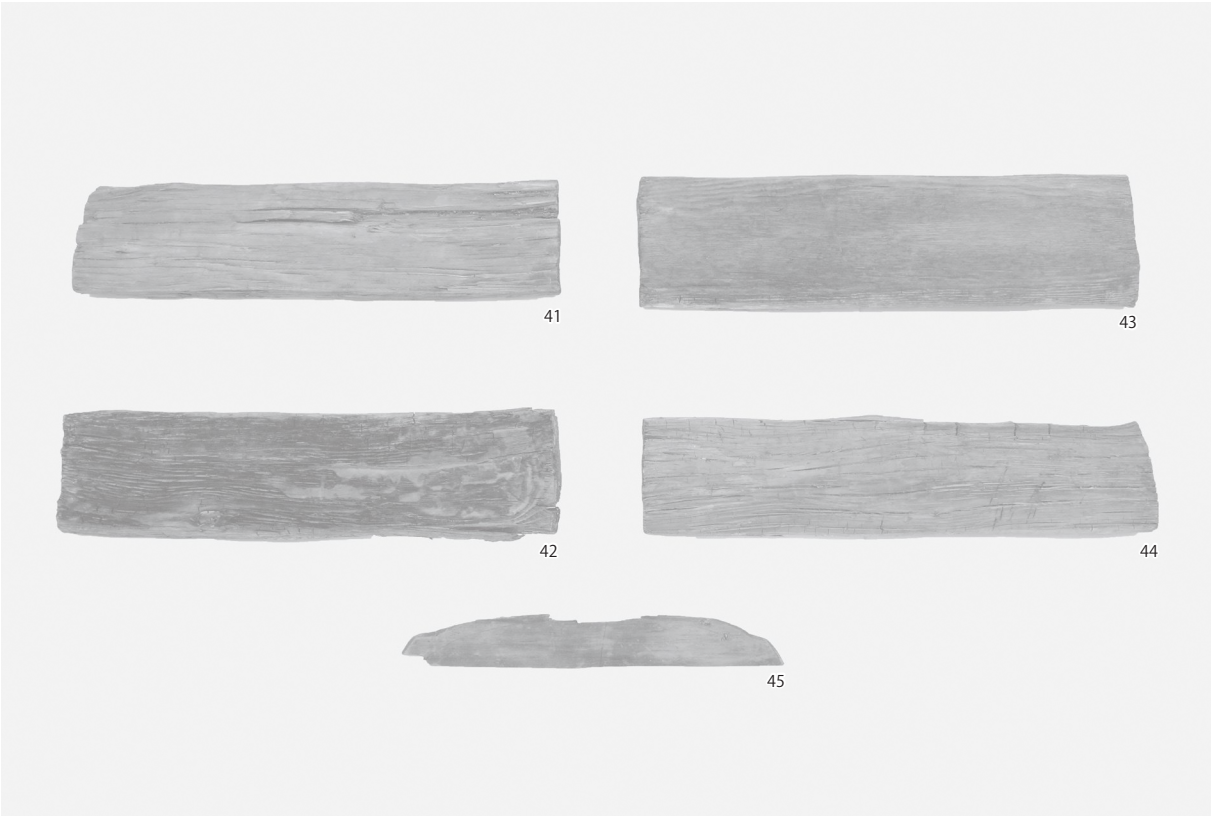
１．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１井桁）

２．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１隅柱）

写 真 図 版 14

1．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１曲物蓋）

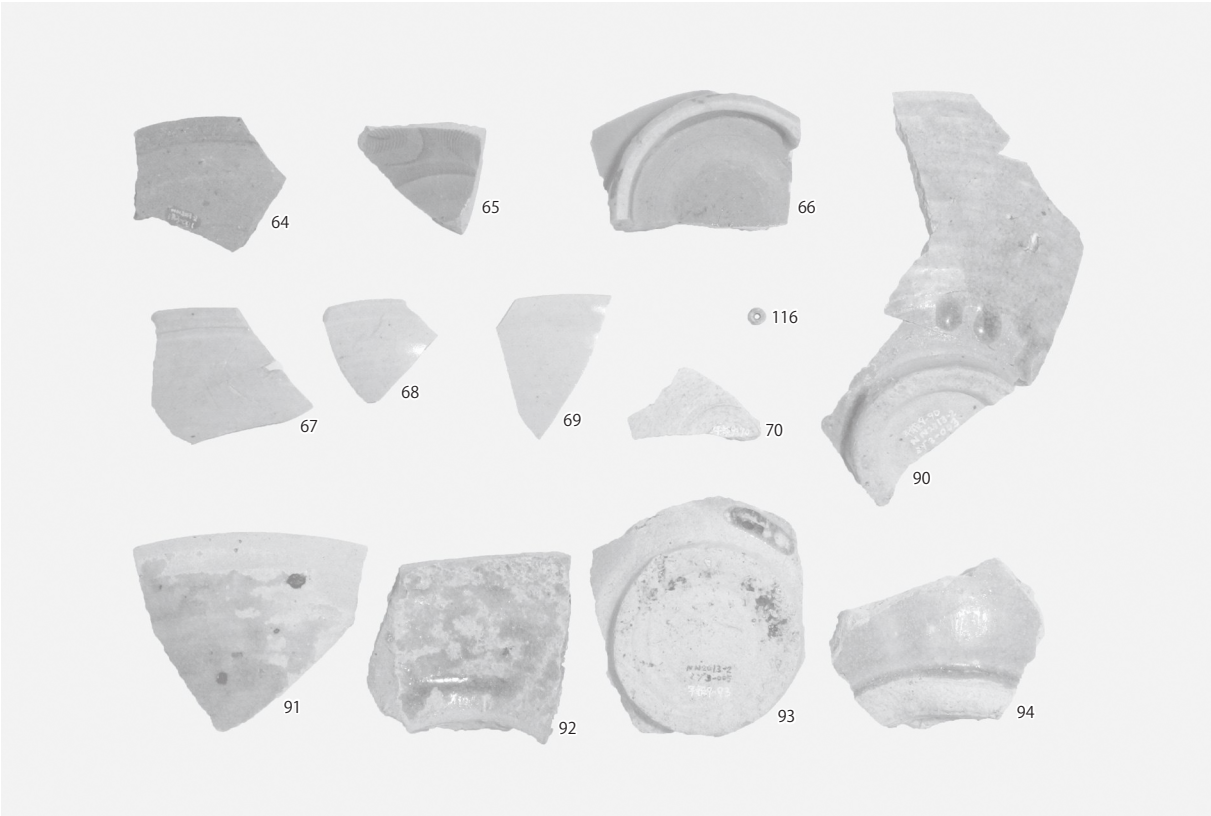
写 真 図 版 15



１．ＮＮ2013－２　出土遺物（井戸１横板）

２．ＮＮ2013－２　出土遺物（溝３土師器・瓦器）

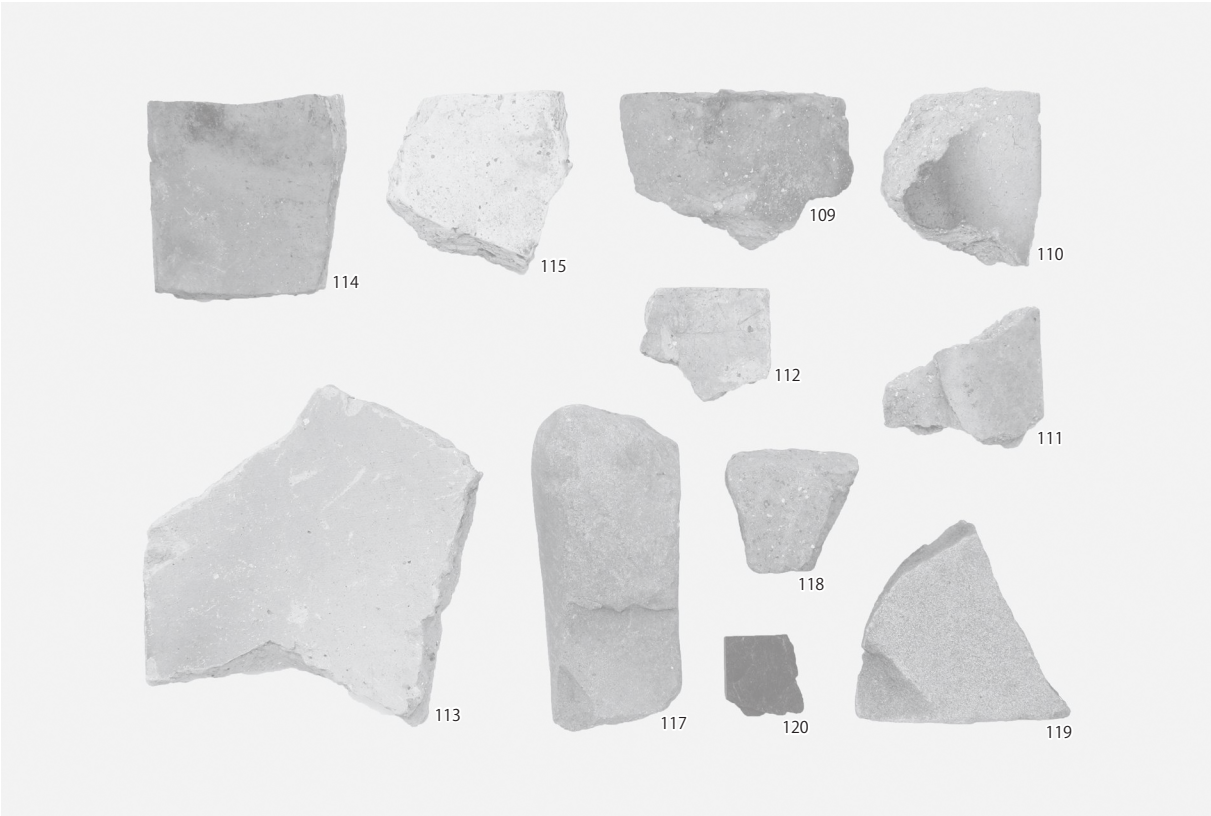
写 真 図 版 16



1．ＮＮ2013－２　出土遺物（溝３須恵器・陶磁器・玉）

2．ＮＮ2013－２　出土遺物（溝３須恵器・瓦質土器）

写 真 図 版 17

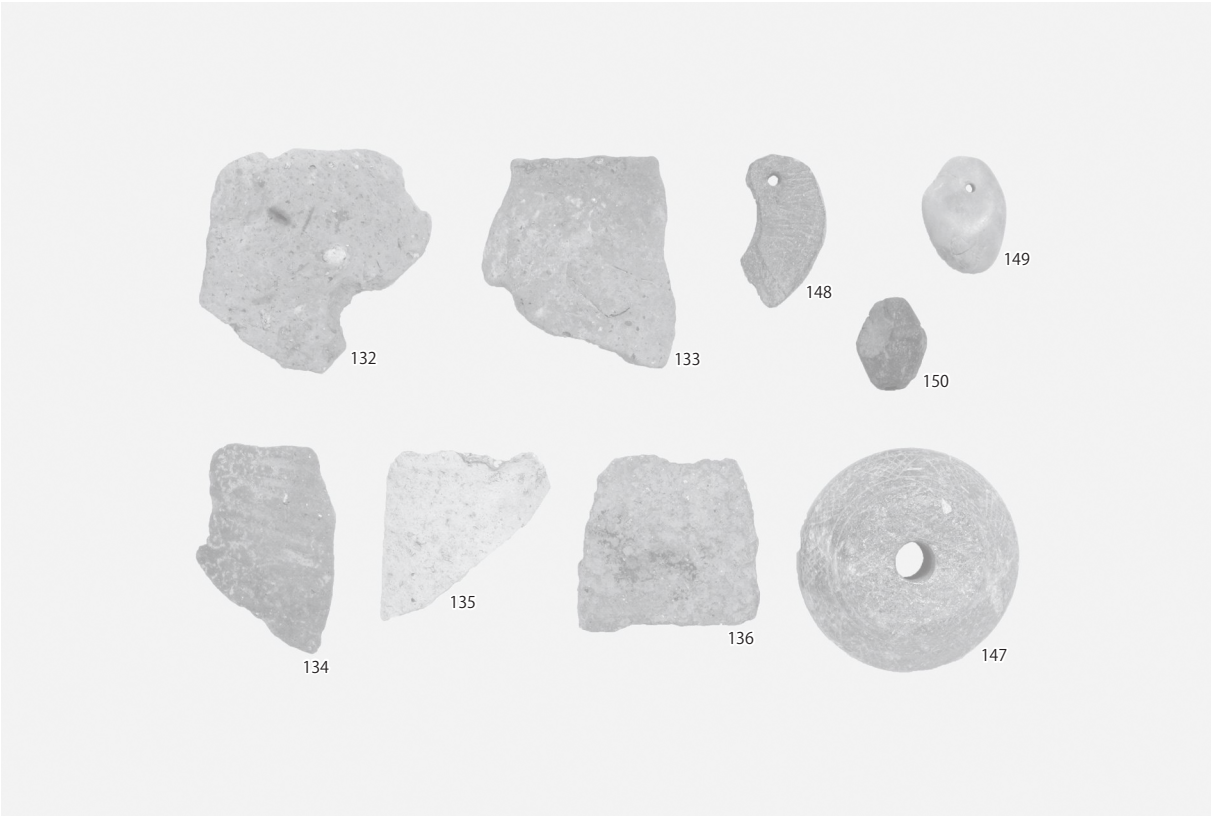


1．ＮＮ2013－２　出土遺物（溝３瓦・砥石）

2．ＮＮ1989－１　出土遺物（立坑１）

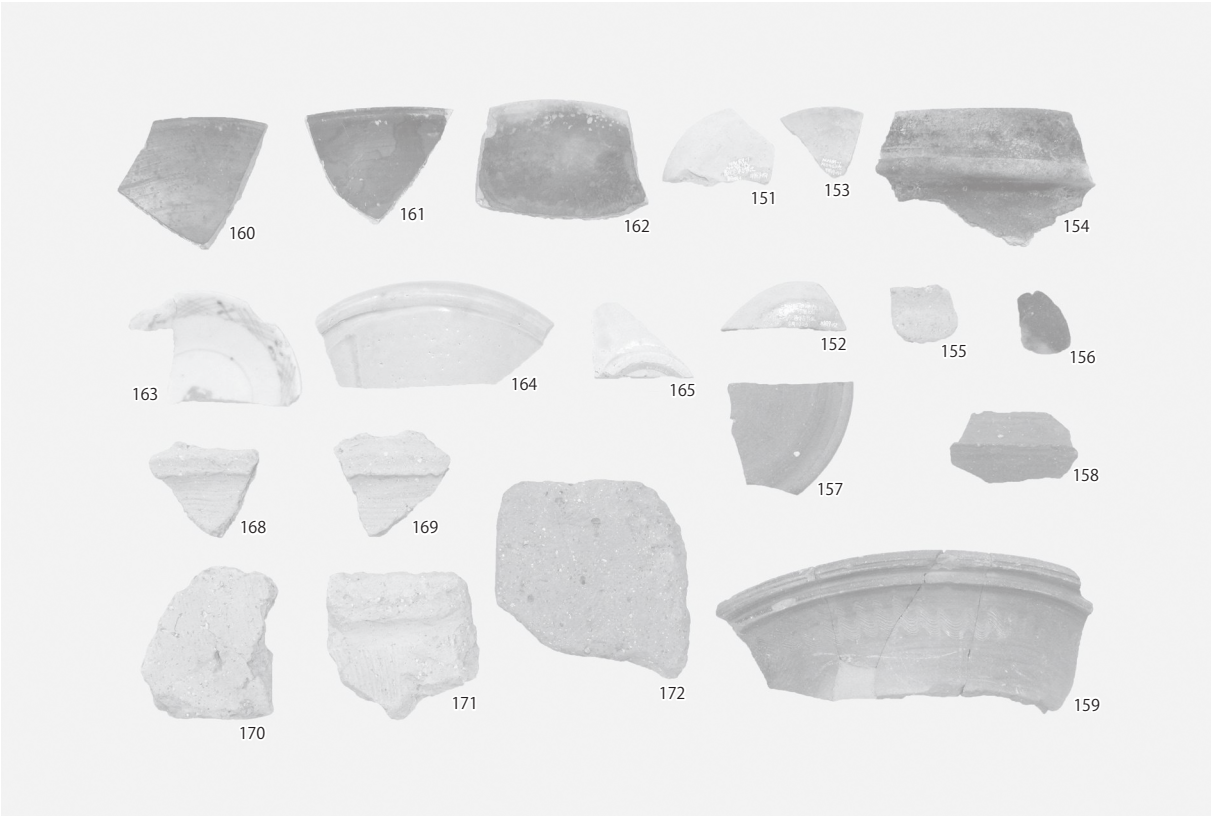
写 真 図 版 18

1．ＮＮ1989－１　出土遺物（立坑２）

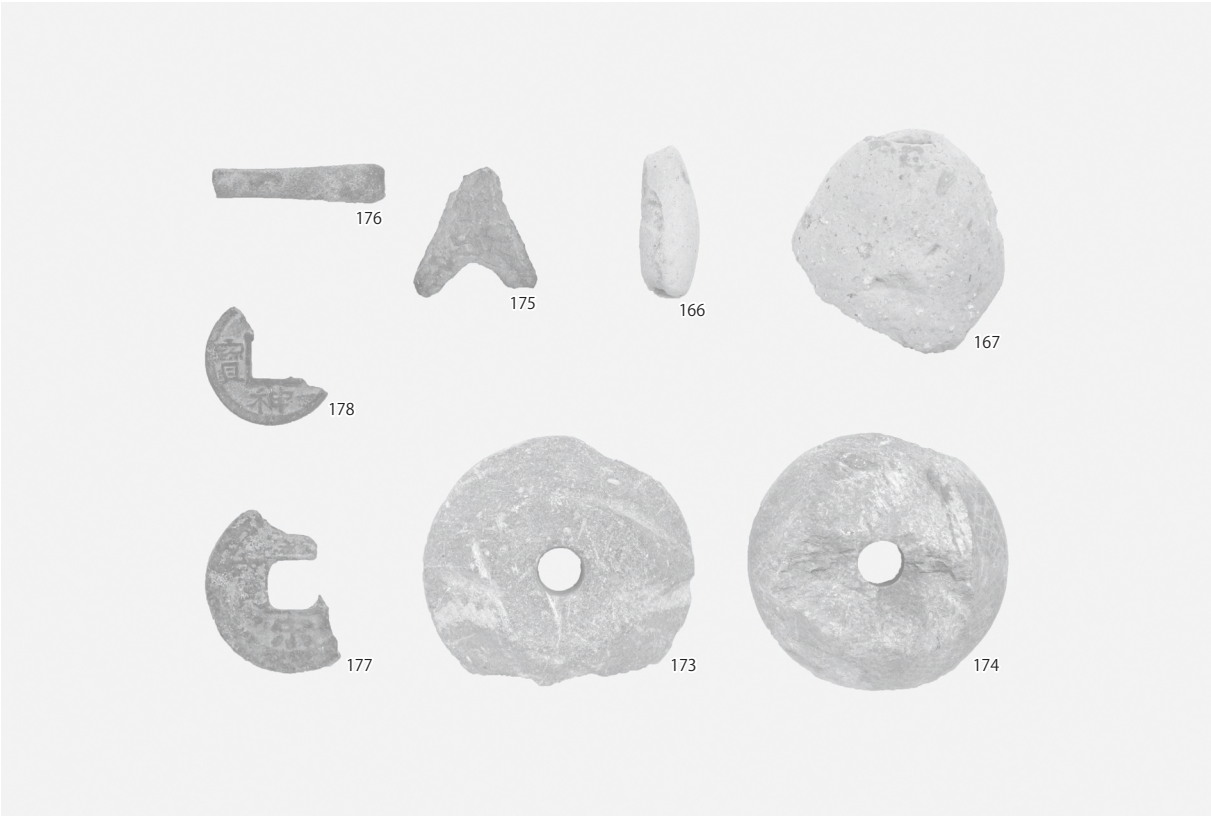


2．ＮＮ1989－１　出土遺物（立坑２）

写 真 図 版 19

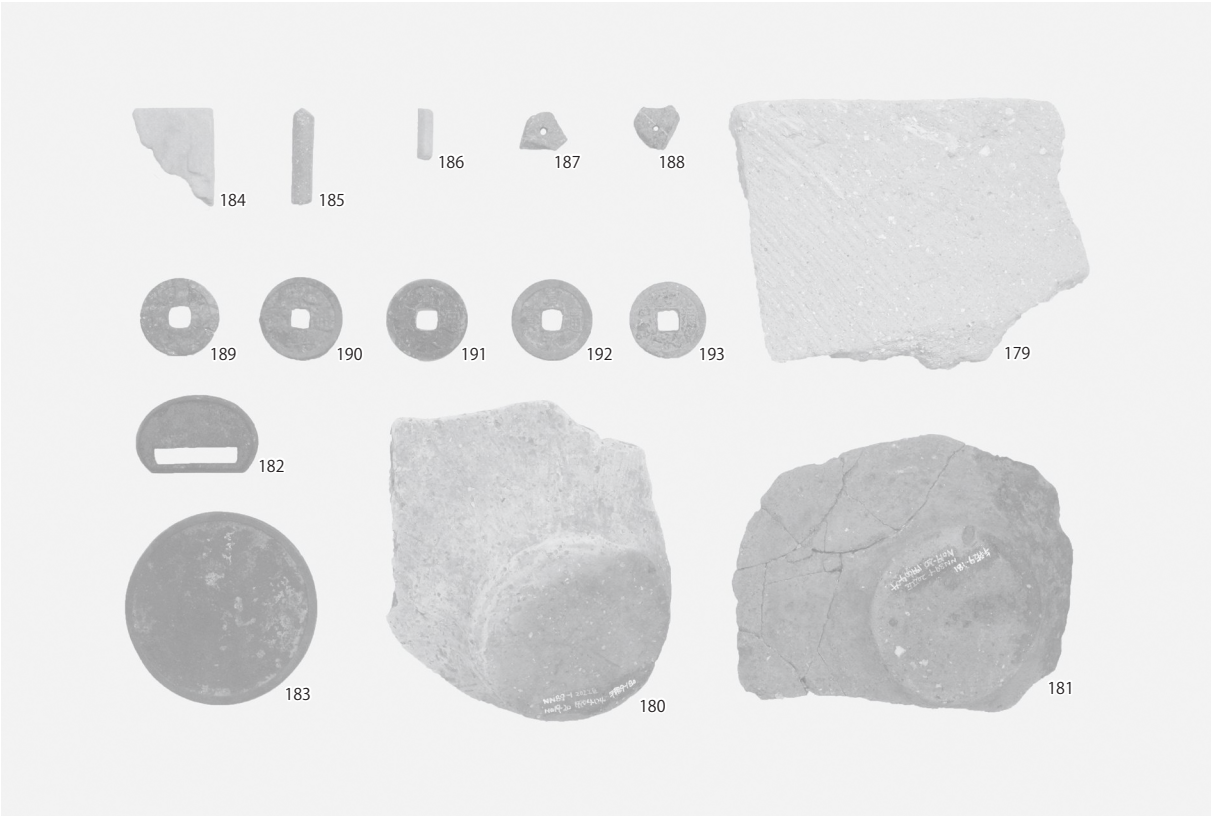


1．ＮＮ1989－１　出土遺物（立坑４土器・瓦・埴輪）



2．ＮＮ1989－１　出土遺物（立坑４石器・金属器）

写 真 図 版 20



1．ＮＮ1989－１　出土遺物（本体工区）

2．ＮＮ2000－２・93立会　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	しじょうなわてしぶんかざいちょうさねんぽう
書名	四條畷市文化財調査年報
巻次	第９号
副書名	中野遺跡　4
シリーズ名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第61集
編著者名	村上　始・實盛良彦・古谷真人
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501　大阪府四條畷市中野本町１番１号
発行日	2022(令和４)年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかのいせき 中野遺跡 （ＮＮ2013－2）	しじょうなわてし なかのほんまち 四條畷市 中野本町	272299	34° 44′ 30″	135° 38′ 29″	平成26年２月６日～３月15日	658㎡	宅地造成
なかのいせき 中野遺跡 （ＮＮ2000－2）	しじょうなわてし なかのほんまち 四條畷市 中野本町	272299	34° 44′ 30″	135° 38′ 17″	平成12年７月18日	—	擁壁設置 （立会）
なかのいせき 中野遺跡 （1993年立会）	しじょうなわてし なかのほんまち 四條畷市 中野本町	272299	34° 44′ 23″	135° 38′ 30″	平成５年８月31日	—	擁壁設置 （立会）
なかのいせき 中野遺跡 （ＮＮ1989－1）	しじょうなわてし なかのほんまち 四條畷市 中野本町	272299	34° 44′ 28″	135° 38′ 22″	平成元年10月２日～11月16日、平成２年３月19日～６月７日	—	公共下水道設置 （立会）

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野遺跡 （ＮＮ2013－2）	集落跡	古墳、奈良、平安、中世	井戸、溝、土坑、Pit	土師器、須恵器、陶磁器、黒色土器、瓦器、土製品、金属製品、石製品、木製品	平安時代の井戸から墨書土器が出土。 井戸枠の年輪年代が708年＋αと判明。
中野遺跡 （ＮＮ2000－2）	集落跡	古墳	なし	土師器	
中野遺跡 （1993年立会）	集落跡	古墳、中世	なし	土師器、須恵器	
中野遺跡 （ＮＮ1989－1）	集落跡	弥生、古墳、平安、中世、近世	大溝、溝、Pit	土師器、須恵器、陶磁器、瓦器、土製品、金属製品、石製品、ガラス製品	皇朝十二銭、青銅製銙帯（丸鞆）など官衙関連資料の出土。 古墳時代玉類多量出土。

四條畷市文化財調査報告　第61集

四條畷市文化財調査年報

第９号

中野遺跡　４

令和４年(2022)３月31日発行

編　集　四條畷市教育委員会

発　行　四條畷市教育委員会
大阪府四條畷市中野本町１番１号

印　刷　株式会社　近畿印刷センター